

悠遊

第十八号



企業OBペンクラブ

表紙の絵 「五月の薔薇」

山縣 正靖

五月の風薫るころ、我が家の猫の額ほどの庭に薔薇が咲きます。この季節の地植えの薔薇は色鮮やかで力強く、澆漉としています。明るく生きましようとする愛の賛歌を唄ってくれる少女応援合唱団の如し。

夏が過ぎ秋風が立つころ、薔薇は別の表情を見せます。Last Rose of Summer—。艶が深まり、風の中にたたずむ風情は捨てがたいものがありますが、絵に描くのは難しい。

昔、藤田嗣治画伯がパリの美少女の背景に秋の薔薇を描いていましたが、この組合せのセンスは日本人の感性ならではのもので、当時画伯がパリで愛されたゆえんと思いました。

本誌の編集途中、三月十一日に東北大震災が勃発いたしました。
亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表します。
また、罹災者のみなさまには心からお見舞い申し上げます。

悠遊

第十八号

企業OBペンクラブ

目次

◇巻頭言……………名誉会長 深田 祐介 4

Ⅱ特集・JAPAN 2025Ⅱ

- ◇十五年後の日本は……………山縣 正靖 6
 ◇「JAPAN 2025」に乾杯! ……西川 武彦 8
 ◇十五年後の日本……………松浦 武弘 10
 ◇国を支える老人が明るい日本を築く…上原 利夫 12
 ◇「2025年の日本を我ら年金生活者の地獄としないために」序論……………大野ただし 14
 ◇進歩と破滅……………杉浦 右蔵 16
 ◇それなりの老後、最後の世代……………志村 良知 18
 ◇金融立国と日本文化の輸出……………野上 浩三 20
 ◇日本の再建……………大泉 潤 22
 ◇近未来を思う……………安藤 晃二 24
 ◇人口減少社会の素顔……………橋本 政彦 26
 ◇価値基準を逆転せよ……………中村 将陸 28
 ◇百年に一度の危機……………大平 忠 30
 ◇牧歌的でなくなった日中関係……………垂水 健一 32
 ◇自然からの予言……………高口 恵子 34
 ◇お月さまお世話になります……………稲宮 健一 36
 ◇微生物と植物カーボン……………吉壽 清巳 38

Ⅱ特集・大失敗Ⅱ

- ◇フツフじゃない……………三 春 42
 ◇失敗の代償……………上田 信隆 44
 ◇添乗中の大失敗……………上山 裕次 46
 ◇悔いが残る……………岩崎洋一郎 48
 ◇止める勇氣……………野瀬 隆平 50
 ◇眠ってしまった候補生……………大庭 定男 52
 ◇車中のしくじり……………中村 爽 54
 ◇因果応報……………富岡喜久雄 56
 ◇薬品の霧に包まれた工場……………玉山 和夫 58
 ◇007になり損ねた記……………細谷 博 60
 ◇「額縁の御用はありませんか?」……………下平紀代子 62

Ⅱ自由テーマⅡ

- ◇スポーツ文化……………高橋 孝蔵 66
 ◇神は細部に宿るゝものらしい……………廣澤 重穂 68
 ◇市役所からの手紙……………福本多佳子 70
 ◇四十雀が来るまで……………吉田 邦彦 72
 ◇カーバイド技術者の歩んだ道……………中川路 明 74
 ◇我が栄光(へ?)のゴルフ史……………阿部 洋己 76
 ◇『スイングジャーナル誌』の休刊に思う……………大越 浩平 78
 ◇「悠遊」という言葉……………牛坊 貞夫 80
 ◇男(おとこ)の宿命……………中村 晃也 82

◇お見せしました……………	小寺 裕子	84
◇中山道を選んだ和宮降嫁……………	清水 勝	86
◇一族の滅亡……………	新山章一郎	88
◇想い出の旅……………	濱田 優	90
◇台本症候群……………	浜口須美子	92
◇金名鉄道の怪……………	田谷 英浩	94
◇会計戦争……………	安永 知史	96
◇私のハードボイルド体験入門記……………	鵜飼 直哉	98
◇「キリストの復活」〈裏切りと再生〉……………	都甲 昌利	100
◇時を贖い取る……………	新井 良佑	102
◇女中物語―サワイのこと―……………	浜田 道雄	104
◇『カドタさんのブルース』……………	平尾 富男	106
◇下北半島の漂民譚―菅江真澄の日記より……………	大月 和彦	108
◇「独居老人の死」と後始末……………	寺井 融	110
◇能への興味……………	田原 敬	112
◇拝啓、周平コーチ殿……………	松谷 隆	114
◇タイムカプセルよ 有難う……………	黒崎 昭二	116
◇「己の死」―最初で最後の大発見……………	金京 法一	118
◇「山恋」の想い……………	阿部 典文	120
◇愛犬ベルの死……………	児玉 忠雄	122
◇国債発行ウルトラC策……………	鳥海 博	124
◇ドイツ・オーバアマガウの地へ……………	西川 知世	126

Ⅱ 創作短編Ⅱ

◇岐れ道……………	馬場真寿美	130
◇薩摩湧水町の三姉妹……………	古川さちお	133
◇据え膳食うは男の恥……………	中江 賢三	136
◇ペンフォト句会の将来展望……………		
◇何でも書こう会……………		40
◇掌編小説勉強会……………		64
◇ペン俳句のこの一年 ―俳句鑑賞―……………		128
◇二〇一〇年「ペン川柳」勉強会の成果……………		139
◇サロン21……………		143
◇英語を読もう会……………		145
◇800字文学館賞……………		146
◇追悼 遠藤俊也さん「文章と釣の皇帝」中川路 明……………		147
◇遺稿 記憶に残る旅―冬景色の佐渡―遠藤 俊也……………		150
◇企業OBベンクラブの本年のあゆみ……………		152
◇企業OBベンクラブとは……………		154
◇企業OBベンクラブとは……………		157
◇会員名簿……………		158
◇編集後記……………		160
表紙制作……………	野瀬 隆平	
表紙の絵……………	山縣 正靖	
カット……………	児玉 忠雄	
	山縣 正靖	
	野瀬 隆平	
	山縣 正靖	
	吉田 邦彦	

巻頭言

昭和天皇の握手

名誉会長

深田 祐介

戦時中の昭和十八年頃、靖国神社やその周辺を歩いていると、よくアジアから来た青年たちに出会ったり、見かけたりしたものである。

彼らはインドネシアを中心に南方の日本軍占領地区から留学してきた青年たちで、日本の国民歌謡を声高らかに歌ったりする、元氣ハツラツたる連中であつた。

アジア諸国で、欧米植民地政府は現地人を差別して、高校、大学に進学するのも容易ではなかったが、日本の軍政は占領地行政の隙を衝くようにして、少なくともアジア出身のエリート官僚や教育者を養成しようとしていたのは間違いない。

特に陸軍は広大なインドネシア圏防衛の自信がなく、開戦直後からインドネシア陸軍の本格的訓練を企画しており、この発想のちにPETAすなわちインドネシア義勇軍結成に実を結ぶのである。

隊列を組んで行進する彼らを遠巻きにして私たち戦時少年と一緒に歌を歌い、陸軍の号令の練習をして、楽しい一刻を過ごしたものであつた。

この「善意の交流」については、初代インドネシア

大統領スカルノ氏の自伝にも出てきて、日本人があつと驚くような事実も出てくるのである。

大統領スカルノと副大統領を昭和陛下に謁見して頂くという話が起り、スカルノとハッタはそのためにモーニングを作ったり、謁見の練習を何日間かやらされたりするのだ。

ふたりは緊張してこの謁見の日を迎えるのだが、少々遅れて入室した昭和陛下はいきなりスカルノとハッタに向かって歩み寄ったから、ふたりは驚いた。昭和陛下は驚くべきことに、ご自分のほうからスカルノとハッタに手を差し出して、握手を求められたのである。

こんな話を聞かされていなかったスカルノ、ハッタは結局そのまま陛下と握手してしまう。外務省、宮内庁関係の列席者はもつと驚いたらしく、異例のことという感想をスカルノとハッタに洩らした、とある。

しかし昭和陛下のお心配りはスカルノとそして皇室に大きな余韻を残したごとくで、戦後、来日の度に、スカルノは宮中に参内、皇后と談笑するのを無上の慶びとした、とされるからあの昭和陛下の握手は、まさに大東亜戦争の大義を象徴するものであつた、という気がするのである。

特集・JAPAN 2025



十五年後の日本は

山 縣 正 靖

十五年後といえど随分と先のはなし。そもそも自分はボケの細道を辿って終点のところではあるまいか、とまづは考えたものである。

ところがある夜半、気がついた。十五年前には何をしていた？一九九五年のことで、丁度お役ご免、出社に及ばずとなり、暇をもてあます筈が、あつという間に十五年が過ぎてしまった。しかし世の中は大きく変わった。日本は弱く、貧しくなったし、お隣の中国さんが強く、世界を相手に挑みかかる中華帝国に変身したのである。

十五年後はすぐやってくる。しかも悪いことほどすぐ起きる。ここは「悠遊」のお題に依えて、自分なりの考えを披露させて頂くべきだと観念したのである。

さて十五年先の日本の姿を見通すには、まずは最近の悪い変化が何故おきたか、一体全体どう魔がさして日本は弱く、中国は怖い帝国に変身したのかを知りたい。

ところが、この問題に世のマクロ、ミクロ経済学は答えてくれない。小生の尊敬するA先生は晩年に日本経済の先行きを大変心配され、ある人にどの本を薦めますかと聞かれて、なんとマルクスの「賃労働と資本」とレーニンの「帝国主義論」を挙げられたという。コミュニストでもない先生が何で？と永年の謎だったのだが、最近の悪い傾向の原因が判るかと読んでみた。

資本主義は発展すると帝国主義に変身する（レーニン）。外国の市場と資源を求めて海外に押し出し、軍事覇権に挑むようになる。これは今の中国のことである。かたや発展する新興資本主義国の隣の国は、猛烈な価格競争を挑まれて国内産業が敗退し、企業はコストの安い海外に設備投資を移すから、国内は低成長、低雇用、低賃金に陥るとある（マルクス）。これはここ十年の日本のことである。

ただし、マルクス、レーニンは、資本主義はかかる不幸をもたらすから、革命を起こしてプロレタリア独裁の天国へ行け、とのご宣託を賜ったが、ご存知のとおり行った先は地獄だったわけである。日本はこのご宣託には従

わなかった。マルクス、レーニンの二つの予言は、あれほど言ってやったのに従わない日本への呪いともいうべきである。

呪われついでにあと二つ。まず、日本の国内の輸出産業は次々に価格競争に敗れて輸出力を失う。そうなる日本は国際収支が危ない。待ってましたと通貨ファン্ডに売り浴びせられて、日本国債が暴落し、IMFに国家更生法を指定されるようにならないか。

もう一つの呪いは不況、恐慌である。中国が今の高度成長を続けると、呪いどおりに大不況に陥ることはないか。そうなると中国は飢餓輸出を仕掛け、中国へ進出した外国資本を妨害する挙にでるだろう。それとも輸出品を諸外国に買って貰わなければならないから、今の傍若無人の姿勢を改めるか。

こんな古い呪いの話で恐縮だが、呪いの正体を知れば手の打ち様もでくるのだ。

本題に戻って十五年先の二〇二五年を占うと、出だしの五年間に悪い魔法使いの呪いを破って新たな道を切り拓くか、右往左往し政争に明け暮れて、呪いのままに流

されていくのかでは大違いである。これに対して日本の政治は呪いを打ち破る政策など創れるわけがないよ、と云うのはまたしてもマルクスの呪いである。たしかに今の先生方は選挙運動の場立ちと国会の政争に明け暮れて、新政策を勉強してまとめるような暇はなさそうだ。

それなら忙しい先生方に替わって、国民がみずから新しい政策案を創ってあげるのはいかがか。国民裁判員制度ならぬ国民政策立案制度である。良心的な学者、官僚、新聞記者などの専門家と国民代表十五人位がチームを組んで、重要課題の国民政策案をまとめて公表しておく。各責任政党は、この国民政策案を参考にしてもよいから、自党の政策を作り公表する。国民はどの党の政策が良いか、ITを使って投票する。IT世論調査の手法で、いわばIT直接民主主義政治を実現するのである。これならダメ政党でもまともな政策を組める、組まざるを得なくなる。

「JAPAN 2025」に乾杯！

西川 武彦

喜多川雅人は後期高齢化入りしてから、自宅は息子に建替えさせ、その一角を東京の拠点にしつつ、大半は小淵沢の山荘で過ごしている。別荘仲間も殆どが高原に居を移しているから寂しくはない。ペンクラブ活動は、小説勉強会に顔を出すだけになった。正月休みが明けるとクライストチャーチでロングステイするが、八十八歳になった今年は特別の事情があつて日本に留まっている。

二〇二五年二月十一日、喜多川は一月に開通したリニア中央新幹線で新宿に向った。小淵沢からの特急を甲府で乗り換え、時速五百kmの車窓を流れる景色を追いながら感慨に耽っている。十五年前、K社が創立百五十周年記念で募集した懸賞論文『Japan 2025』に応募、今年の元旦特集でその結果が発表され、入賞したのだ。賞金は百万円。明日はその表彰式だ。選考のポイントは、予想がどれだけ当たったか、いかに魅力的に描かれたかの二

点である。挑戦してきた直木賞は未だ叶わずだが、米寿を迎えた人生の記念碑にはなろう。喜多川が論文で予想して当たったのは、順不同で並べると以下の通りだ。

①交通 リニア中央新幹線は技術革新と国策で大きく前倒しされ、二〇二五年一月に開通した。

②消費税 社会保障目的税で二〇一五年に十%、二〇二五年には十五%に。

③人口 一億の万台を割り、高齢者が二十五%を超えた。TPPで外国人労働者が増え、今や労働人口の一割を占める。当り前になった国際結婚でハーフが増。TPP域内での生産の水平的分散で雇用も内外に散っている。

④言語 英語紛いの「Globalish」が日本でも大流行。例えば、*「I come back tomorrow」*と略す。

⑤道州制 二〇二五年に廃県置州で十三州制が実現。何でも何処でも手に入る時代になり、二〇一五年頃から、「里山ブーム」が起きて、イターンが大流行。小さな町村が個性を持って活性化し始めた。農業の大規模化が進み、小規模の稲作はイターン組が楽しみでやっている。

休耕田はほぼなくなり、美しい棚田で瑞穂の国が蘇生。

⑥経済 ロボット技術の急速な進歩で、複雑な機能を備えたオーディオやビデオ機器、パソコンなどが『開けゴマ』の一声で動かせるようになった。音声で命令すれば、音質などを読み取って操作する。海外には『ALIBABA』として輸出され、驚異の新商品が低迷していた経済を救った。中印・アジア各国の高度成長は続き、パッケージ型インフラ輸出で、高速道、新幹線などの海外事業展開も好調。

⑦政治 参院が消滅。一院制・首相公選が実現。議員の平均年齢は四十代後半に。三割が女性だ。民主党はとうに割れて、自民党の一部などと組んだ「新日本国民党」が三分の二を占める安定政権になった。

⑧GNP 中国の半分になったが、一人当たりでは世界十指に入る。座標の変換でターゲットはGNH (Gross National Happiness) に。

⑨世界 西洋による非西洋世界の征服・略奪は終わり、アジア中心に重心が移った。ただし、その余波は、領土・民族の滅茶苦茶な線引きに宗教が絡んで混乱から抜け

れない多くのアフリカ、中東、旧ソ連領に厳しく残る。

日米関係は右往左往だが、TPPの下、大局的に知恵を出し合っている。日中、日露は経済中心の戦略的相互依存に重きを置き、領土は封印して不安定な安定を維持。

⑩文化 二〇一〇年頃から本格化した電子書籍はIT化時代に生まれ育った層を中心に浸透したが、紙の本も文化としてしっかり残り、選択肢が増えた。ロングステイや出張先の海外で、iPadで何でも読める時代が到来。

表彰式は四十五歳の前田首相も出席して盛大に行なわれた。海外で生まれ育った双子の男孫のうち、一人は文系でこの春外交官になる。残る一人は理系でJRに就職が決った。リニアや幹線の海外進出に興味があるらしい。賞金を元手に帝国ホテルで祝賀パーティーだ。乾杯！

「あらお目覚め？ ほらほら、ワイン溢すわよ。嫌ねえ、ボケちゃって…。またスボン汚しちゃったじゃない。マッサージ用に換えてくださいね、もうすぐお気に入りの介護のお姉さんが来るから。マリーの名前間違えないでね。この間はメグなんて呼んでいたわよ」

十五年後の日本

松浦 武弘

私は大学時代に経済変動論を学び、ゼミナールでは「恐慌論」を専攻したが、株で大儲けをする幸運に恵まれたことはない。有名な経済学の大学教授ですら、大儲けをしたという人は、日本には、いや世界でも殆んど皆無に等しいのではなからうか？ ただ一人、ジョン・メイナード・ケインズ卿を除いては……

出生率と死亡率の予想から年齢別人口動態を予測できる。これは、経済変動、景気変動の予測と件の中で、最も信頼できる与件である。

二〇一〇年（平成二十二年）は、日本万国博覧会（大阪万博）の開幕した一九七〇年（昭和四十五年）から四十年を経過した年となり、時あたかも上海万博が開幕され、翌年の二〇一一年には、日本は国内総生産で世界第二位の地位を中国に引き渡す年と言われ、先日、それが決定した。中国の後を、インド、ブラジルが追い上げ

てきており、十五年先を待たずして、日本は国内総生産高で世界第六位以下になるであろう。

数年以内に、「世界経済のご破算」が起こることは必定であるが、能天気な民主党は無為無策で、残念極まりない。これを契機に日本の国力は著しく低下する。

二〇〇五年の一億二千七百七十七万人を境に、減少傾向に転じた我が国の人口は今後も減り続け、国立社会保障・人口問題研究所の推計では、二〇三〇年の人口は、ピーク時より一二五万人少ない一億一五二万人となる。少子高齢化はさらに進み、六十五歳以上の高齢者は「五人に一人」から「三人に一人」にまで増える。

更に、二〇三〇年には「世帯主が高齢者」という家庭が全世帯の四割にあたる一九〇〇万所帯、七十五歳以上の「後期高齢者」に限れば一一一〇万所帯に倍増し、地方では更に増え、過疎化が急速に進む。

現在でも少子・高齢化が急速に進んでおり、家族関係の希薄化、高齢者の所在不明問題、児童虐待問題、意味の無い殺人事件など、人心は荒廃し始めている。

年金制度、医療制度等は、もう既にパンクしており、

財政赤字は増え続け、国債の発行残高は雪だるま式に増加する。産経新聞の発表によれば、国家債務残高は空前の一千兆円に迫っている。

戦後の住宅難解消のため、一九五五年に日本住宅公団が設立され、農村から都市へ流入する勤労者の住まいを供給した。近代的住まいの住人達は「団地族」と呼ばれ、庶民の憧れの的となった。公団の二DKの間取りが標準サラリーマンの新しい生活スタイルとなり、「職住分離」や夫婦・子供の「分離就寝」となって日本の核家族化を進めた。

日本住宅公団の団地建設以来、百万件の公・民の分譲マンションが建築されたが、「一〇五」件の建て替えが決まったのみで、老朽分譲マンションの建て替えの困難さを示している。

最近東京都内で、一戸建ての住宅で委棄住宅が十万軒を超えており、年々増加していると報道されたが、二人（老人夫婦）暮らしや老人の一人暮らしが如何に増えているか想像を絶する。都内の老朽化したマンションがどれほど存在するか、住民もほとんどが高齢化していると

判断される。全国の主要都市でも同じことが起きている。農業従事者も高齢化し、後継者不足で廃業が年々増加しており、我が国の農業はお先真つ暗である。

十五年の間に、一戸建ての委棄住宅や住人不在のマンションがどれだけ増加することだろう。

十五年後には、都会では同じ地域やマンションの住人の半数近くが「昼間家にいる」という社会が生まれる。農村部も、若年者がいない過疎化された高齢者のみの社会となり、農業の担い手は無くなる。

現在、百七十万人といわれるフリーター達は、（今寄食している親が死亡すると）老人を支える事など出来る筈もないが、このフリーター達も年々増加し続ける。

過疎化が進んだ場合の、日本全国のインフラの整備を如何にするかは大問題である。

政府・地方自治体・公社（道路公団・本四公団等）などで、膨大なインフラ整備にいかほどのコストがかかるか想像を絶するし、その原資も無い。

急速な老人大国・日本に、明日はない。

国を支える老人が明るい日本を築く

上 原 利 夫

日本は老人大国になった。年金制度のお蔭で退職後の生活は楽しい。このまま死ぬまで続いて欲しい。だが、年金財源に不安が出てきた。そこで国の財政の立て直しを図る抜本的な改革案を提案したい。

現在の年金支給額を減らすことは難しい。だから死ぬまで同じ基準で支給するが、死んだときに返済させる。厳密には、支給ではなく無利息貸付である。しかし、資産を残していない人は返済できないから、このような人には支給者は債権を放棄する。この放棄損失は国税（相続税）で負担する。資産を残した人は、自己資産から年金債務を返済した残りが遺産となる。相続財産には相続税が課されるから、相続税収入で債権放棄損失が賄われれば、目出度し目出度しである。

そうなれば、二〇代三〇代の若者が希望を持って働き、彼らが社会の中堅となる二〇二五年までに日本は再建さ

れる。しかし、その過程で生じる障碍は摘み取っておかねばならない。子孫に美田を残すために、国を減ぼす資産家もいる。返済を免れるため外国に財産を隠し、不正に名義を変えるなど。抜け道を防ぐには、せめて高齢者だけでも背番号制度を導入することだ。

高齢者は、戦後よく働き、経済の発展に貢献した。その倫理観は「赤信号、みんなで渡れば怖くない」ではなかっただろうか。価値観が一八〇度転換した戦後に育ち、猛烈社員として会社のために働いた。定年退職すると、一人で渡つても怖くなくなった。この人達の住む家は所有が多く、相続財産になる。これに預貯金と有価証券を加えると、財産は退職時より多いという。こんな先進国はないのだそうである。「生まれたときは裸、死ぬ時も裸」という実体から見れば、相続財産は国家に帰属させるのが公平かもしれない。リーマン・ショックを百年に一度の危機というなら、相続財産も最近百年に築かれた。関係者の協力に負うもので、独占権はないかもしれない。教養のある人ならこう考えるのではないか。

教養とは、相手の立場で判断できる人格だと思う。読

書歴でも学歴でもない。政・官・財に教養の欠ける人が多い。二〇一一年度の政府予算案に現れている。歳出九二兆円のうち社会保障費は二八兆円、国債費が二一兆円もある。これに対する歳入の国債は四四兆円である。社会保障のために国債を増発し、返済を先に延ばし残高を累積させる。日本国債の信用度が八年ぶりに下がったのも当然だ。教養のない政治家の責任ではないか。

年金財源の改革を実現するには十年はかかるだろう。少子高齢化で人口が減少するときに、GDPの成長は難しいから、国家目標を文化の育成、スポーツの振興に置き、それぞれ世界一を目指すことだ。

文化大革命で文化を破壊した中国にGDPで抜かれてもよい。日本には世界に誇れる文化も多いし、スポーツも強い。スポーツはお金がかからず、選手の刻苦と応援する国民が士気を奮い立たせる。若者の国家意識を高揚させるには打って付けである。日本の選手は輝いている。あとは教養を身につけることだ。最近、電車内で老人に席を譲る若者が増えたのは、明るい兆しである。

しかし、残念なのは医療・介護の面での老人の甘えで

ある。食事や運動で健康を保つ自己努力もせずに、薬を飲む。安楽を求めず、克己心を持つてほしい。メタボでも恥ずかしがらない。四、五十年前の集合写真は、自堕落になった吾人を気付かせてくれる。加齢による身体機能の劣化はあっても、長命は健康であってこそ価値がある。老人を甘やかすと、国は滅びるだろう。

今年は親鸞の七五〇回忌にあたるそうだ。親鸞は宗派を超えて民衆に救いを教えた。資本主義精神はビュリタンの禁欲の倫理というのが通説であるが、日本人には「もったいない」「(手を合わせて) いただきます」という質素儉約と報恩感謝の慣習が身についている。これは親鸞の教えらしいが、経済活動におけるエコの実践、地球環境保護において、日本は先進国であるのだ。

国を滅ぼす老人もいるが、国を支える老人は多い。戦後の経済発展で残した資産を生かし、新しい日本を築き直すのが老人の役目である。これを助ける思想が日本資本主義の精神だろう。日本語の「もったいない」を世界に発信し、世界から尊敬される国になるのだ。この気概があれば、二〇二五年の日本は明るくなる。

「2025年の日本を我ら年金生活者の地獄としないために」序論

大野 ただし

2025年という未来について、はつきりしていることがあります。その時のわが国のおよその人口構成です。手元に2025年そのものずばりの数字はないのですが、2030年に1億790万人、2000年に比べ1760万人、14・0%の減少。これが2050年には8480万人となつて、4070万人と32・4%の減少となります。

15歳から64歳の生産年齢人口については、1995年を境にマイナスとなり、2000年の6770万人が2030年には5470万人と、1300万人、19・2%の減少です。この数字を実質労働時間で考えると、もつと深刻な数字になります。2000年の月間労働時間156・2が2030年には126・4時間にまで短縮されるのです。

その国の経済力を示す国民総所得は労働人口×労働時間×生産性ですから、どう頑張っても日本経済は縮小することになります。

この会でも講師をして頂いたことのある平川克美さんは、『経済成長という病』、『移行期的混乱』という二冊の書物を世に問われ、

『日本には成長戦略がないのが問題』ということに対してわたしはこう言いたいと思う。

問題なのは成長戦略がないことではない。成長しなくてもやっていけるための戦略がないことが問題なのだと。

彼のこの二冊の新著は、エマヌエル・トッドの『帝国以後』、『文明の接近』に影響されて書いた、とご本人もその著書の中に記されています。

トッドの指摘した識字率と出生率の関係から見れば、日本は先進国の仲間入りをしており、出生率が欧米並みの1・5前後のレベルにあることは自然であり、この数字を変えようとする政策そのものがナンセンスだ、ということになります。「子供手当」の評判の悪さもこの

辺りに起因しているのではないのでしょうか。

次にこれは現在の問題なのですが、政府は「デフレが問題」としている現状認識です。

やはりトッドに啓発された榊原英資さんは「現在の物価安はデフレのせいではなく、構造変化によるものだ。ユニクロ・加ト吉現象ともいわれている東南アへのマーケットの拡大が物価を押し下げている」と強調されています。

従って、経済学者が主張する流通通貨の増加によるインフレ・ターゲットの政策は極めて危険です。

要するにデフレもコレストロールと同じで、善玉と悪玉があるわけです。

今後の一人当たりの国民所得については、松谷明彦さんが『2020年の日本人』の中で、「2020年の一人当たりの実質国民所得は299万円であり、2005年の304万円に比べてわずか1.6%の低下にすぎない。15年間で1.6%の低下だから、ほぼ横這いとみてよいだろう」と書いています。

一方、同じ政策大学院の古川俊之先生と藤正巖さんの

共著『ウェルカム・人口減少社会』では、労働力のトレンドを「まず現在6600万人程度のわが国の労働力は、2020までは6000万人を割ることはない。現在、欧米に比べて低率（主要な労働力人口の20歳から49歳をとれば、男性94%に対して女性は66%）にとどまっている女性の労働力率を、労働力の不足分だけ上昇させるだけで、2025年頃までは現在の労働力を維持できる。いいかえれば、これからの20～30年間は、現在の経済や社会システムを維持するに足る労働力が質・量共に存在するということだ。労働生産性さえ十分に維持できれば、この間に人口は20%減少するのだから、個人当たりのGDPは、これだけでも20%増加してよいことになる」と述べています。

ただ、これで安心できないのが年金制度の仕組みで、この本でも指摘されています。野口悠紀雄さんが昭和四十年代に再三にわたって厚生省に公開質問状を突きつけている問題です。

進歩と破滅

杉浦 右藏

序論 N H K 高校講座「地学」で、地球四十五億年の生い立ちを見た。四十五億年を長さに置き換えると、西暦二千年の歴史は一ミリメートルに満たない。人間の生命八十年は計るに足りない長さだ。現実には十四年先がどうかは顕微鏡の世界である。我々は、その瞬間を人生として生きている。このミクロの世界の終焉は平成の末期になるかもしれない、今後十四年を展望する。

人類 しばし現世に戻り、近々第二次世界大戦後の六十年は、地球生命の時間軸で見れば針を立てたような形で急激な変化をしている。むかし私の息子が好きだった手塚治虫の鉄腕アトムを思い出す。五十年前にお茶の水博士の作ったロボットは傑作である。十四年後には、それに近い世界が実現するかも知れない。そして人類破滅に近づくかも知れない。アメリカの考え出した金融錬金術や実際の技術進歩は人類破滅の発想だ。自分たちアメリ

カだけが地球上に生き残れば良い確約は何も無く、地球上の生物すべてを道づれにする発想だ。約三十年前にスイスの作家デニケンによる、地球上の生物の歴史は十万年単位で繰り返してきたのではないか、という説に真剣味を感じる。このデニケンの考えが、南極氷原の掘削氷の分析で証明されつつあることは興味深い。

半導体 近代二百年の人類歴史は、電気とトランジスタを発明した時点が境目だと実感している。二個のトランジスタ（半導体）を組み合わせた回路は、今では数ミリの固体の中に何万回路を合成して、人類の生活に無くてはならない物体として君臨している。思い出せば真空管は、百年も人類に貢献してきた。半導体が実用化してまだ六十年、いまや集積度を高め高速高密度化して、我々が日常使っている全ての製品に使われている。半導体で作られたコンピュータ・インバータなど制御回路などが無いと製品は動かない。また人間が考えたプログラムが他の半導体に指令を出している。手塚治虫が考えたロボットの世界が次の十四年後にはかなり現実化するだろう。いまアメリカはロボットが人間に代わって戦争する構図

だ。人間がロボットを制御支配しているうちは良いが、ロボットに判断力を持たせると大問題だ。人間とロボットのどちらが主役だか判らなくなる恐ろしい事態になる。

自動車 現在日本国内の自動車登録数は、四輪車四千八百万台、二輪車三千八百万台である。ガソリンを利用した駆動方法は百年続いた。これを電気で動くように変えようとしている。電気自動車といっても色々ある。歴史的にそう簡単には電化出来る物ではない。私はEV車に賛成だ。しかし電池が一番厄介だ。リチウム資源に限りあり、充電方法も問題山積だ。私の提案は、いま開発中のEV車に次をプラスする。ガソリンエンジンで駆動している発電機を小型ガソリンエンジン駆動に改良、発電専用に動かし、走行中車内の諸電力供給と電池の充電に使う。ガソリンスタンドでは、ガソリン給油と若干の補充充電により今の車より高度な車が出現する。グッドアイデアとして十四年後の普及課題として提言する。

通貨 デフレからハイパーインフレになるかも。第二次世界大戦後体験した超インフレを思い出す。超インフレを起こせば、自民党田中角栄から本格的に始まった国と

地方の借金が棒消し得る。金融に詳しくない私だが、一部の頭の良い金持ちだけが微笑んで、一般庶民の大半が死ぬような苦しみを味わう。十四年後の私共の孫の世代に到来するかも知れない。私達は生きていない。諸元の悪はアメリカの金融を操る錬金術師の仕業で、日本だけでなくアメリカも含めて世界が巻き込まれる現象だ。

人間の限界 一万分の四の世界を考える。私が戦後NTTに入った頃は電話の復興に必死だった。電報受付台一五番が繁盛していた。耳掛けブレストで受け、タイプする誤謬率が一万分の十一字もあった。改善に相当な努力をしたが一万分の四字より改善できなかった。時代の近代化で電報が廃れ、改善努力を止めてしまった。この事実から人間の能力の限界を悟った。世の中はこの確率で左右されている。極端な例を申せば、万と万を掛けると一億になる。日本の世の中は四万人の逸れ者がウロツイテ居る。これが取り締まれないので変な事件が起きる。最後に 私の七十八歳の人生を振り返ってみると、出会いが連鎖して「人生の決め手」となっているようだ。人間と人間との出会いを、もっともっと大切にしよう。

それなりの老後、最後の世代

志村良知

今から百年後、二二一〇年の日本の総人口は約四二〇〇万人になり、その内の四十五%を六十五歳以上が占める、という震撼すべき試算がある。そこへの通過点としての二〇二五年には六十五歳以下が一五〇〇万人減、六十五歳以上が八〇〇万人増、日本の総人口は今より七〇〇万人減って一億二〇〇〇万になると予測されている。

二二一〇年の日本、となると考える事を放棄してしまいたいが、二〇二五年の日本がどうなっているのか、自分の生活はどうなっているのか、これは他人事ではない。

人口推移を切り口にしたテーマの議論の時に必ず出てくるのは、団塊の世代という言葉である。私は昭和二十三年の生まれなので、世にいう団塊の世代の中心に位置している。子供の頃に、社会科の授業で、美しいピ

ラミッドを描く日本の人口分布を見て誇りに思った。十代になると高校の増設が盛んになり、それは社会の活気であつた。

しかし、後続世代の出世数減少がだんだん顕著になってくると、数が多すぎる世代として問題視する風潮が広まった。そしてそこに止めとして、現職の通産官僚だった堺屋太一氏が、一九七六年時点から見た近未来連作短編集である『団塊の世代』を発表した。

これは、数の多さゆえに社会を歪め、企業の正常な活動と成長を阻害する元凶として、前後の世代から疎まれる団塊の世代を執拗に描いている。そして先行世代が築き上げた日本の繁栄の果実は、二十世紀最後の二十五間で団塊の世代によって無為に食い潰され、暗澹とした二十一世紀を迎える場面で小説は終わっている。

すなわち、堺屋氏は、団塊の世代を、その巨大なマス（質量）があらゆるものを壊し食い潰す、という飛蝗のような災厄として表現した。不幸にしてこの小説はベストセラーとなり、「団塊」という言葉は独り歩きを始め、団塊の世代こそ日本の社会の歪みの元凶であり、将来起

この問題は全てその所為である、とする考え方をこの小説を読んだ人にも、読んだ事が無い人にも浸透させた。

特に現代の若い世代には、五十歳台の自分の親以上の大人は全部団塊と呼ぶ厭うべきものである、という考えを抱かせるに至っている。

冷静になって人口統計をみると、戦場から生還した男たちを父に持つ我々の世代の数が多いというのは事実であるが、年間出生数が安定的に約二〇〇万人の水準で続いた戦前の世代に比べたとき、たかだかその十五、二十%増しが三年程続いたに過ぎない。この程度の人口分布の歪みが国家百年の災禍になる訳がない。問題は、昭和二十年代後半から出生数が減り始め、その減少に歯止めがかからなくなってしまう事にある。直近三十年の日本の出生数が、団塊の世代が残した団塊ジュニアと呼ばれる世代同様に、年間二〇〇万人の水準を保っているれば、百年後の人口が半減以下などという試算結果にはならなかったであろう。

若年人口の減少と高齢層の増加という現象が増幅され

ながら百年続けば、社会保障制度が云々という以前に日本国そのものが存続しなくなる。

樂觀的に過ぎるかもしれないが、支えてくれる労働人口がまだそれなりにある我ら団塊の世代は、それなりに老いて死んでいくのではないかと、淡い希望は持てるのであるが、飛蝗の群れが喰い荒した以後の世代は一体どうなるのであろうか。

政治家たちが今何より先にやるべき事は、百年後の日本をどういう国にするかの基本構想を作り主導する事である。女性一人に二人以上の赤ちゃんを産んでもらえる様にするのか、大量の移民を受け入れるのか、はたまに、今の半分の人口で成り立つ社会を作るのか、今決めて実行に移さなければならぬ。

百年後に極東の最貧国の廢墟の中で、二十世紀の中頃に団塊の世代という特殊な世代が生まれ、彼らがこの国を減ぼした、と語られるのはご免である。

金融立国と日本文化の輸出

野 上 浩 三

経済発展の先端を走ってきた日本は、今や経済基盤の変革を迫られている。すなわち、伝統的に強い「物づく」を第一にしつつ、単純労働に依存しない付加価値の高い新たな産業分野を切り拓くことが求められている。

新たな産業の第一は、ITをはじめとする創造的な産業であることは言うまでもない。第二は、現在既に世界的な実績を出している分野の更なる強化・推進である。環境技術を生かした産業などがその典型であろう。

第三は、既存の産業の再開発および自然や文化的資産の活用であり、多くの可能性が残されている。農業の再開発や観光立国など既に国策として取り上げられているが、「金融立国」と「日本文化の輸出」も有望であると考えられる。

一 金融立国について

金融立国とはわが国が保有する金融資産を国際資本市場で活用して金融収益を得ることを意味する。幾つかの条件整備が必要であるが、次のように実現可能性は高い。

「可能性の根拠」

- 1 わが国は一四五〇兆円の個人金融資産と二二五兆円の対外純資産（うち約一兆ドルが外貨準備）を有している。輸出国として今後とも外貨の取得・蓄積は続く。
- 2 新たな設備を要しないコスト・パフォーマンスの高い産業である。外貨準備の積極的な活用により過大な外貨準備が是正され、適切な通貨レートが生まれる。
- 3 人材面・ノウハウ面においてもわが国は十分なストックを有している。

「整備すべき条件」

- 1 国際資本市場において活躍できる金融機関および機関投資家の強化・育成。
 - 2 国策として金融立国が認知され、税制面や為替面等における支援策が講じられること。
 - 3 制度疲労を起こしている経済関係の制度の改革。
- ①金融制度：証券の発行市場（特に時価発行制度）が健

全に機能するように改善する。

②通貨制度：財務省のみでなく、官邸に関係官庁や経済団体、労働団体を加えた通貨専門のチームを設置し、総合的に適切な通貨レートの実現を図る。

③株式会社制度：わが国だけに存在する矛盾した「代表取締役制度」を廃止し、企業統治力が発揮され、能力本位の経営トップが選任されるようにする。

二 日本文化の輸出について

かつては子供の娯楽に過ぎなかった漫画が今やアニメとして世界に輸出されている。一方、わが国には優れた文学作品が多く存在しているが、ほとんど海外に知られていない。この差は翻訳の困難性の差にある。

しかし、文学作品でも、翻訳されたものはノーベル賞さえ受賞している。わが国にはこれらのノーベル賞受賞作品よりずっと素晴らしい作品が数多く存在している。

国策として奨励策を講ずるならば、個人あるいは組織的な翻訳者による翻訳活動が活発化するであろう。そうなれば世界的に大きな反響を呼び起こし、日本の文学作

品に対する需要が生まれる可能性は高い。優れた文学作品は、日本および日本国民の素晴らしさを世界に発信する媒体でもある。

例えば、山岡宗八の『徳川家康』は、第一巻のあとがきで著者が書いているように、日本版『戦争と平和』である。世界に紹介すべき有力な本の一つである。

実は、私は十年前にこの本の英訳に挑戦し、稚拙ながら全二十六巻の中の第二巻までの英訳を行なった。その結果、ある程度の翻訳力があれば、ある程度の翻訳は可能であると確信した。最終的にはネイティブのチェックを受ければ良い。残りの二十四冊にいずれ取り組むつもりであるが、年齢の制約がある。企業OBベンクラブの中に同志を見つけない。

幸い、吉川英治の「太閤記」がウィリアム・スコット・ウィルソン氏によつて「TAIKO」のタイトルで英訳されている。これにより戦国時代の固有名詞や会話の英訳の実例を知ることができる。彼は一九四四年生まれ、マイアミで活動しているので、協力して貰えるものと期待している。

日本の再建

大泉 潤

日本は今や沈没に向かって進んでいる。豪華客船タイタニックが海図を失い、暗黒の氷海を沈没に向かって漂っているがごとく、と述べる識者がいる。

最近十五年間、世界（人口六十六億人）は年率一・三%で成長している。中国（十三億）は十三%、インド（十二億）は十%、アメリカ（三億）は五%、ドイツ（八千万）は二%で成長している。日本だけがマイナス一・五%だ。

日本がマイナス成長になっている理由は多々ある。GNPを支える最大要素の個人消費の源である個人所得が減っている。日本の貿易立国のベースである加工産業が近隣諸国との人件費格差で競争力を失っている。政治の混迷が続き、政府最終消費支出が伸びない。公共投資の乗数効果が減少し、景気の呼び水とならない。

ここで船長をはじめ全員が力をあわせて頑張らないと浮上できない。

以下項目別に整理する。

政治は明るい方向を目指し、人々を元気にするものであつてほしい。政権交代が行われたが、与野党勢力伯仲もあり、ダイナミックな運営ができない。

政治家に弁護士出身が多い。弁護士は当事者の依頼、委嘱によつて訴訟や法律事務を行うことを生業としている。自らは当事者ではない。彼らは、国民のためと言いながら、責任感、切実感がない。自分は安全地帯に身を置いて、弁舌で糊口をしのいでいるにすぎない。

また市民運動、組合活動出身者は官庁、企業経営者と交渉するために、外部団体の応援で、弱者援護の弁舌さわやかに組織の中で上昇してきた人々だ。いずれも創業者感覚、自助の精神に欠けている。だから立法、法案の審議でも、独自性が見られない。他人の案をコピーし、複数の案の都合のよいところを切り貼りする。

またその判断基準は選挙の得票である。今は過疎地の一票の価値が高い。農村へ出かけてビール箱に乗つて演説をすると、聴衆が少なくても得票の歩留りは良くなる。聴衆は老人が多いので、手厚い福祉を約束すれば得票は

伸びる。このような選挙で選ばれた議員は自主性がない。派閥のリーダーの言いなりになる。

また、高齢者のための年金、病人のための保険、幼児手当などのばらまきが膨れ上がる。国家財政の累積赤字は、年間収入の十年分を超える規模に達している。さらに支出が歳入を大幅に超える予算を立案している。いまや多重累積赤字国家である。世界中でこれほど債務の膨張している国家は無い。個人であれば、どんな小さな銀行、サラ金に駆け込んでも、お金を借りることはできない。過去に藩の財政を立て直すために工夫を凝らし、実践し、見事に成功した事例は多い。為政者が質素儉約を旨とし、殖産興業に励んだ業績である。

マスコミも自らを律する必要がある。我々は世界の出来事を注視している。そしてその背景、解説、見通し等に関心を持っている。最近の傾向として、政党支持率、政治家の人気の世論調査が多く、むしろオピニオン誘導型である。芸能人対象の人気投票に堕することなく、社会の木鐸であってほしい。

今後なすべきことは多い。キーワードは、節約、自助

努力、無借金である。身の丈以上の生活をしない。政治家は、自ら身を律し、古今東西の古典に触れ、良き先達の指導を受ける。そして身辺整理をして、SPに頼らない。夕食は、取り巻き連中との会食のはしごをやめる。海外出張もクラスを下げる。

〈シナリオ二〉

債務が膨張し、金利が上がり、デフォルトとなる。米中等の援助で救済されるが、国の尊厳を失い、実質的に属国に堕する。国民は最下層の生活を強いられる。

〈シナリオ二〉

優秀な指導者が現れる。身体強健、弁舌さわやか、叡智にあふれ、勇気があり、律儀であり、国際感覚が優れている。国家の徹底的なリストラクチャリングを行う。成長産業の峻別、国際分業の徹底、経費の徹底的削減を率先垂範する。大事なことは国民一人一人が、その人と一緒にやりたいと思うことである。

〈結論〉

重荷を背負って高い山に登ることく、葛折りの道を辿ることになる。

近未来を思う

安藤 晃 二

十五年先といえば未来の響きを持つ時間ではない。過去十五年間を振り返ることも、このテーマに示唆を与えるに違いない。優に人生の六分の一、ノモンハンから第二次大戦終結までの長さである。この間、世界情勢を大きく変えたテロ事件が現実のものとなった。目の前に迫る歴史について考えよ、諸君が皆終焉を迎えるであろうとき、日本の状況や如何に。それが出題の意図と見た。

確実に進化し、その結果が人々の生活にまで日々影響し続けるもの。その一つは産業技術。十五年は先端技術の恩恵を加速度的に吸収し続けるにちがいない。日本は技術大国と世界に胸を張る。しかし、その進化の主導権を日本が取れる保証はない。技術革新に方向性を与える哲学において欧米が先行する。最近の実感である。電車で毎朝読むヘラルドトリビューンを仕舞って、iPadを

取り出す。NYタイムズなど詳細を自在に読める、アクセス感が凄い。あの技術のお陰で、もう老眼鏡は要らない。高額な英字新聞購読料など勿体ない仕儀となる。新聞紙に郷愁があるなら、有機ELを折り畳んだ紙になるという。過去に何台も買い替えたPCが恨めしい。「次世代」技術は、あらゆる産業分野で実現を見るに違いない。

十五年先を考えることは、取りも直さず現在の問題に目を向けることに他ならない。厄介なのは、不透明な世界経済の問題である。歴史の流れの中で、冷戦終結、イスラム世界との軋轢、新興国の台頭、それに無関係ではない資源問題の歪、各国の体制、政治の失態や経済活動の強欲が大規模な企業破綻を生み、公的負債問題が世界を揺るがす、環境問題に南北問題が絡む、国家利害の調整の難しさ、周辺に脅威となる体制の国々の存在、等等が背景に見える。それらが経済問題にも集約され、解決が迫られる。二〇二五年へ向かう過程で、この今日の課題は結果ともあれ、その帰趨を見るに至るであろう。その帰結が日本を大きく吞み込む可能性がある。

日本人のDNAに刻み込まれた勤勉さで、蹟いた歴史を抱えながらも、開国以来努力を重ねた今日がある。ドイツ人は東京の街を見て、その整然とした清潔さに驚かされた。工場では従業員全員参加で改善にまい進する。一方、この国には、昨今、政治が攻撃の対象となるような問題に満ち満ちている現実がある。若者は希望を失い、人々の生活から幸福感が遠のきつつある。膨大な財政はバランスせず、公的負債はウナギ登りの状況下で、増税モードが唯一の処方箋であるらしい。相変わらずの政争に国民は辟易し、政治は何をやっても手詰まりとなる。

世界に目を向けよう、皆必死になって自らの問題解決に躍起である。叡智を集めて実現した筈のユーロ通貨がいま低迷を極め、その制度に潜む本質的な誤謬とささえ批判の声が聞こえて来る。経済で独り勝ちのドイツは問題国救済には厳しい。迷走する日本と引き比べながら、ドイツの動きとEUの今後は大変興味深い。

ダボスで、TPPバウンドの日本はまたまた「開国」とと声高に開陳する。いつ頃からか、手が打てない「お

任せ」経済外交が続き、プラザ合意以来の四半世紀に亘って放置された円高に、企業は何処までも耐え忍ぶ。この国の行政システムに瑕疵があるのか、はた運営か。問題の診断さえつかぬ儘、国中が重篤な内臓疾患の自覚症状に憂鬱な毎日を過ごす。そろそろ出口を見つけよう。聡明な決断なしに良い変化は実現できない。奇しくも遭遇し青春を爆発させた安保闘争の敵役、岸首相。当時ビジネスでは大被害を被ったが、爆弾宣言の悪役リチャード・ニクソン。その信念とやるべき立場を完遂する姿を、今は敬服の念を持って思い起こすのは私だけだろうか。

Let's hope. この先十五年が経ったとき、déjà-vuは避けたい。斯く言う私も振り出しに戻ってデモクラシーを考え直して見よう。少々長生きの老人になれたなら、覚悟を決めて、政治へのインプットを諦めずに、この愛すべき祖国の行く末を思い続けることとしたい。

最後に一句。

近未来 洞察しかね レトリック

宿題少年

人口減少社会の素顔

橋本 政彦

「人々が現在を越えて未来について強い関心を持つのは、決まって調子がくるって見通しが暗い時のみであり、未来はその時まで隠されているから、過去に未来を照らす光を求めなければならない」とトインビーは書きます。デフレ、少子高齢化、財政破綻とかが頻繁に話題になるこの国のこの頃を、「明るい時」で、「暗い時」ではないと納得させるのは無理です。これらのフレイズには「未来はどうなるのか、より厳しい社会になるのではないか」という漠然とした不安が込められているからです。

人々がこの国の未来の見通し、解決策を切実に求めているのが分かります。その手掛かりとなるのは、過去における人類の経験です。我々はそれを「歴史」と呼んでいます。歴史を辿れば未来の姿やモデルを探し出せます。歴史の役割は、より良き生き方を探し出すための羅針盤です。しかし、より良くなるのも悪くなるのも使い方次第で、失敗すれば地獄行きの覚悟も必要です。

ところで、我々がより良く生き続けるには、今どのよ

うな選択をしたら良いのでしょうか。それを幾冊かの書物を頼りに尋ねてみたいと思います。デフレ時代が長く続くわが国では、その原因が少しずつ明らかになって来ているようです。それを分かりやすく解説し、最近ベスト・セラーになっている書物に、「デフレの正体」―経済は「人口の波」で動く―(角川 One テーマ21) 日本政策投資銀行・藻谷浩介著があります。この本では、人口動向で経済変動や社会現象を分析しようとする試みがなされています。この人口動向をキーに未来の見通しを試みた書物は以前にも相当数あります。例えば、興味を持って読んだものには、二〇〇三年出版の古田隆彦著「人口減少 日本はこう変わる」(PHP出版) があります。

ここでは、人口波動法 (Population Cyclicis) というものが提唱されています。人口容量≡自然環境×文明の公式が示され、文明と自然環境により人口総数が規定されるとする考え方が述べられ、これに基づき過去の歴史分析、将来予測が行われています。これによれば人口減

少社会の先頭にいる日本では、それに相応しい新たなパラダイム、枠組の構築が求められています。大幅な変革の選択を通じて未来を乗り切ることが処方箋のようです。

二〇〇〇年出版の「日本文明の次なる設計―偉大なる衰退」(高橋英之著 三五館)も同様の認識で興味ある本です。ここでは文明設計の基本を「全ての人が生物的に生きられる社会」すなわち「現実性」と、「全ての人が人間的に良く生きられる社会」である「妥当性」をその物差しにするとし、そのためには「恒産社会」が前提で、そこから道義心、精神性の基になる個人の自由が生まれ、望ましい社会の継続が齎されるとします。

他、二〇〇四年上半期にベスト経済書一〇一冊の第一位となった「人口減少経済の新しい公式」(松谷明彦著 日本経済新聞社)もあります。そこでも個人、企業の従来の価値観、すなわち高収益企業へ転換を図る見直しなど、その実行が解決策として提案されています。「デフレの正体」と、これらの書物に述べられている内容には大きな違いはありません。強いて違いを挙げれば、公式発表のデータ数値をベースに人口減少を「生産年齢人

口、現役世代(十五歳から六十四歳迄)」の動向として重点的に取り上げ分析していることです。そこが読者の共感と呼んだのでしょうか。生産年齢人口の減少の波は、従来の人口ボーナスの経営を根底から覆し、新たな生き方、社会の構築を必然化し提唱します。資本主義の新たな形を求めているとも言えそうです。その難問を解決するには、神曲ダンテの地獄門にある如く「この門に入る者はすべての望みを捨てよ」を血肉化した明知と勇気が不可欠です。現実の人口減少の試練を甘受し、僥倖を求めず、忍耐ある日々の取り組みのみが地獄界脱出の術のようです。

経済史分野の「歴史人口学」ではこれまでの人口変動による社会の変化を研究しています。この分野からも、先人がどのようにこれらの苦難を乗り越えて来たかの教訓をくみ取り、学ぶことが出来るでしょう。人口減少社会は、自分の足元を再度見つめ直し、外面性よりも内面性重視の価値観を選択する傾向にあります。この人口減少社会の苦難の日々が笑話に思える日々がいつになるのかは未来の扉の向こうです。これからどんな新規の工夫、創造が生み出されるのが楽しみます。

価値基準を逆転せよ

中 村 將 陸

昨年の飲み会で仲間が「我々はせいぜいあと十年だよ」といった言葉が、年を越しても執拗に耳の奥に残っていました。仲間の言ったことが当を得たものだと思えば、私には与えられたタイトルを書く資格のないことになります。しかし、中央リニア新幹線の首都圏・中京圏の営業開始が二〇二七年とのJR東海の発表を考えれば、二〇二五年はそれほど遠くない将来であることに気づき、気を取り直して筆を進めている次第です。

私は現代の世界が抱えている危機は、暴走する資本主義だと思います。ヘッジ・ファンドなどは、有り余る資金をバックに、原油を含む各種の工業原材料や食料を投機の対象とし、価格を高騰させ暴利をむさぼる一方で、途上国の貧しい民を塗炭の苦しみに陥れています。こうした暴挙を許しているのは、世界各国が単一の経済指標を採用していることと無縁でないと思います。私はここ

に日本人が描くべき夢を披露したいと思います。

その第一は、経済から幸福への価値基準の転換です。

現在社会では、あらゆる国のあらゆる組織がGDPという経済指標で優劣を評価しています。しかし、憲法でも幸福追求の権利を謳っている通り、幸福こそ最大限に尊重すべき価値であることは疑いの余地がありません。

経済はあくまでも手段であり、世界の各国は自国民の幸福の最大化を目指すべきです。毎年の自殺者数を見るまでもなく、日本は小泉改革の名のもとに世界に冠たる国民総不幸の最大の国の一つになり下がってしまった。これからの日本は、GDPに代わってGNH（国民総幸福）を、追求すべき指標として掲げるべきです。社会の仕組みを変えることは至難の業です。幸福を指標とすることに色々な議論があることは承知しています。しかし、民主党政権は我が国を「最小不幸社会」にするといっています。二〇二五年までにこの国の自殺者数が世界最少になっていることを願って止みません。

第二は、高付加価値製品への転換です。一時、内需の拡大が日本繁栄の道だといわれてきましたが、縮小しつ

つある内需を頼りにすることはできません。四十二年間保持し続けた世界第二位の経済大国の地位を奪われたことが話題になっていますが、今後は新興国が続々と日本を追い抜いて行くものと思われまゝ。世界の成長センターのアジアが直近にある利点を生かし、急激に成長しつつある外需を積極的に取り込むべきです。今や日本は、自国に市場を持たない欧州のオランダ、スイスなどの人口小国に学ぶべきだと思います。メイド・イン・ジャパンの高級ブランド化がテーマとなります。これらの国の企業にならって、対象国の富裕層への売込みを商品開発の目的にすべきです。新興国との果て知れぬ価格競争の先には、日本の未来はありません。

第三は、日本人の自信の問題です。液晶テレビ、半導体、スパコン、携帯電話、パソコンなどのハイテク分野で一敗地にまみれた日本人のメンタリティーは、シュリンクし過ぎています。政府はインフラやエコを輸出のプレーヤーに育てようとしていますが、当を得た施策であると評価しております。日本には磨かれ抜いた技術の山があります。思いつくままにその例をあげれば、高速鉄

道網、水道事業、太陽光発電システム、スマートグリッド送電網、ハイビジョン放送システム、橋梁・隧道・超高層ビルの建設などがあります。決して悲観することはありません。ただし、安易な技術流失を放置してはなりません。法科系大学の就職難が話題になっていますが、国はこうした人材を活用して、貴重な技術流失を防ぐ手立てを企業と共に考えるべきです。

願わくは、神のご加護により、二〇二五年以降も命を永らえて、これらの夢のうちいくつが実現しているか見届けたいと、楽しみにしています。



百年に一度の危機

大平 忠

我が国は、一八五三年ペリーの来航により近代国家への扉が開いた。それ以来の約一六〇年の歩みをざっと眺めてみると、四、五十年の周期で上り坂と下り坂の時期が交代しているようである。

一八五三年 ペリー浦賀沖に現れる

「まことに小さな国」から「近代国家」へ

一九〇五年 日露戦争の勝利

国土拡張から太平洋戦争へ

一九四五年 太平洋戦争の敗戦

無一文の国から豊かな国へ

一九八五年 JAPAN AS NO・1

バブル崩壊、金融恐慌、次になにが？

(二〇二五年) 「まことに小さな国」に戻るのか？

一・上り坂の時代の共通点

国全体に危機感がみなぎり目標がはっきりしている。

一八五三年～一九〇五年

「植民地化から脱却」し、独立国家として西欧列強から認められるため、富国強兵に邁進した。そして、日清・日露戦争の勝利により、独立国家として近代国家の仲間入りを果たした。

一九四五年～一九八五年

「飢えからの脱却」を目指し、「人並みの生活」へ、さらに「豊かな生活」へと邁進した。

二・下り坂の時代の共通点

国全体に危機感、緊張感が失せ、油断と驕りが生じる。

一九〇五年～一九四五年

「国土拡張」の気運と「コップの中の争い」を生み、自分以外の世界を見られなくなった。リーダーの不在、政党は足の引っぱり合い、行政は省益の追求、軍部は陸と海軍務局と参謀本部、国内と大陸と対立軸が乱立した。

四十年働いて得た蓄積を四十年かけて食いつぶした。

一九八五年～二〇一〇年

「豊かな国」になった時点で、自分を見つめ直すべきだった。国も国民も、目標は真の「幸せ」追求でなくて

はならなかったのに、さらなる「富の拡張」へと走った。リーダーの不在、政党の足の引つ張り合い、改革の見えない官僚制度、……。戦前とまったく似ている。そして、バブルは崩壊し、金融恐慌が襲ってきた。歴史のシナリオでは、盛衰四十年の周期は二〇二五年に下り坂の底に到達するであろう。

二〇一一年～(二〇二五年)

いまの日本は、閉塞感と焦燥感が覆っている。見え隠れに迫ってきている危機に対する恐怖感であろうか。そして、危機に対する日本の備えが不十分であることへの不安感なのだろうか。

少子高齢化、財政赤字、第二の金融恐慌、円高による空洞化、雇用不安、アメリカの苦悶、中国の脅威、安全保障問題、テロの拡散、イスラムの動き、資源・食料獲得競争、地球温暖化……。大きな津波が迫ってくる。

「百年に一度の危機」である。しかし、その危機感がまだない。従来の政治は、八方美人と先延ばしで、将来への危機感ゼロの小手先凡愚の政治であった。つけがきた。

いまも、政治家の無様な姿は呆れるばかりである。国

民も、なぜタレントやスポーツマンを選ぶのか。

いまからのすべての政策は、現在に目をつぶり、未来を見据えてのものでなければならぬ。明治政府が、近代国家の樹立のために、士を切つて捨て、農民には徴兵と地租を課したごとく。今後の政治は、国民に傷みを与え、犠牲を強いる政治となる。不公平も当然であろう。政治家はまず自らの身を削り、範を示さねばならない。

将来を担う若者・子供たちのために、我々老人は我慢をしなければならぬ。大昔は姥捨てがあつた。内向きの若者にも同情の余地はない。飯を食うために、昭和の初めまで、我々の祖先は外国へ移民し、出稼ぎにいった。

福澤諭吉は、国の独立は個人の独立なくしてありえないと「独立自尊」を説いた。当然、国も自分を守るの自分しかないのである。アメリカも、いつの日か頼れる存在ではなくなるときがこよう。遠くはないかもしれない。

「百年に一度の危機」との意識を持ち、我慢をし、ばらばらではなく小異を捨て共に働くときがきたのである。

二〇二五年の日本は、「まことに小さな国」でもよい。普通に幸せに暮せる国であれば。

牧歌的でなくなった日中関係

垂水 健 一

たいしたことではないが、忘れられない思い出がある。一九八六年の春。北京の郊外の道端で農家の主婦が茹でた落花生を売っていた。ボールに一杯一毛か二毛だった。毛は一元の十分の一、当時の一元は約六十円である。硬貨の持ち手がなかったので一元の兌換券を渡して、売ってほしいと頼んだ。ところが主婦は「見たこともない」といって、兌換券を受け取らない。付近にいた人が「値打ちがあるから、それをもらっておけ」というが、主婦は頑として売ってくれなかった。

中国には、一九八〇年から一九九四年まで「外貨兌換券」という外国人が使用する紙幣があった。兌換券にまつわる話は鮮明な記憶で蘇る。外国人は中国国内で通用している「人民元」は使えず、円やドルを兌換券に交換しなければならなかった。人民元と兌換券は等価といわれたが、兌換券は外貨に交換できる点で価値があった。

輸入品を買いたい中国人は兌換券をほしがり、兌換券を人民元に交換すれば、一・五倍くらいの価値があった。

北京の市街地では「外兌換券はないか」と、うるさく付きまとう男女がいるのに、同じ北京で兌換券を知らないという人に出くわしたのは意外だった。中国の経済の仕組みを理解するのに骨が折れた。

兌換券にまつわる思い出は北京以外にもいろいろある。広州に旅行したとき、買い物も食堂の払いも兌換券は喜ばれず、「人民元はないか」と言われた。広州では人民元一元が香港ドル一ドルと交換でき、複雑な背景を持つ兌換券より人民元の方が使いやすかったのだろう。

いまの中国の若者は兌換券などがあつたことも知らないだろう。そんなことより、中国の人民元がやがて世界で通用する日が近いことを信じている。

私の中国とのかかわりあいには十五年が一つの区切りになっている。兌換券にまつわる話は最初の十五年の忘れられない思い出である。

現場に足を運んで見たことの記憶は比較的是っきりしているが、大きな出来事も机の上で処理したことの記憶

は時代の前後があいまいだ。あいまいなことも含めて中国のことを思い起こすことが多い。私の場合それは日本の生活事情を比較しながら日本の将来を考えることになる。一九九五年に新聞社の特派員を終えて中国から帰国した。その後も中国にかかわる仕事をしているが、いつでも、何が起きたかという記憶の整理は杜撰である。思い出すのは現場で目にした牧歌的な風景が多い。

日本と中国の動きをフォローしてきた期間の約三十年を十五年区切りにするのは個人的な理由がある。一九八〇年に香港に赴任してから北京や上海で取材していた約十五年と、帰国してからの十五年である。この区切りは、中国が経済建設に取り組み始めた時期と「改革・開放」が軌道に乗った時期に符合する。後半の十五年は人民元が次第に力を持ち始め、兌換券もなく、日本人に対する対応、さらに対日感情にまで変化が現れた。一方日本の個々人にとっても、もはや中国は牧歌的ではなくなった。もっと中国に親しみたい人も腰が引ける。そのあたりに日中関係の複雑さがある。

私流の次の十五年の区切りは二〇二五年である。その

とき日本と中国はどんな変化を遂げているであろうか。二〇二五年の日本は中国と深く関わっているはずだ。十五年後の中国は、人民元の力ばかりでなく、中国人の生活、国際政治でのステータスも変わっていることだろう。米国や日本のような先進国は豊かにはなったが、バブルがはじけ、いま若者たちが未来を探りしている状態だ。中国はどうだろう。いつまでも順風満帆とはゆくまいと思うが、豊かになっても混乱しても、日本はその嵐にさらされ、飲み込まれるかも知れない。しかし中国が経済力をつけたとしても、生活の質や内容では日本はまだまだ中国に負けることはないのではないか。

ある日、私は新宿のビルから駅周辺を見下ろしていた。何本ものレールの上を、間断なく列車が整然とホームに出入りしている。見渡せば近代的なビルが立ち並び、道路を行く車にも歩行者にも活気があるように見える。高度の文明社会だった。二〇二五年に中国が生活の内容で日本のどこまで追いつけるだろうか。二〇二五年の日本と中国の生活の中身を見比べてみたいと思う。年齢を考えると、その可能性は少ないかもしれないが。

自然からの予言

高 口 恵 子

昨年、我が家は四十二インチの液晶テレビを購入しました。二〇一一年にアナログから地上デジタルに移行するためです。電気屋さんが設置を終え、スイッチを付けた途端、画面に大きくカタカナの「イ」の字が映し出されました。これは八十四年前の一九二六年のこの日、高柳健次郎氏によって、全国にテレビ放映が始まった記念すべき映像でした。私も電気屋さんも、この偶然に大変驚きました。そして、その番組中で高柳氏はインタビュに答え、「未来は、今の画面よりも縦横に三倍も四倍も長いテレビが各家庭に設置され、色もカラーになり、衛星放送も始まるだろう」と、見事予言していました。

これは本当にすごい事です。今回、この発言にとっても感慨深いものがありましたので、この偶然をきっかけに、十五年後の日本がどうなっているのかを考えてみました。まず、コミュニケーション手段がかなり変化していき、

機械操作に疎い人は別として、操作に精通した人は、益々機械依存になっていくと思われます。

ポケベルから携帯へ、携帯から 아이폰 へと、コミュニケーションの手段が一つの機械に全て内蔵されていき、情報が集約されていくでしょう。手紙も電話も無くなり、最後には IC チップが全てになっていくのではないのでしょうか。日本人の美徳とされてきた以心伝心という言葉は死語と化して、仕舞いには、新人類、いわば宇宙人が誕生するのではないか、という予感すらします。その宇宙人とは他の星から来るのではなく、今の地球人の中から育っていく人を指して言い、彼らの日常会話は全て機械任せで、それが人類の進化ということになるのかもしれません。

そして、もっと先には、IC チップが内蔵された人間と機械でできたロボットが共存しているかもしれませんね。まるで映画のターミネーターや鉄腕アトムの世界が現実になっているかもしれません。

しかし、ここまでくると、近未来的な話ではなくなりますので、もう一度話を元に戻して、十五年後の日本が

どのように変化しているかを考えてみました。

まず、平成生まれが三十代になり、日本の将来を担っているであろう事、このまま戦争がなければ、その悲惨さを語れる人がはばいなくなっているであろう事、女性の社会参加人口が増えると同時に、家事労働も機械によって簡易化され、共働きも多くなっているであろう事、世界のボーダレス化が進み、交通手段の急速な発展と共に各国への移動時間が短くなっているであろう事、少子化の影響で大学等の統合が進み、DVD授業が導入され、学校に行かなくてもネットで授業が受けられるようになっていくであろう事、医療現場はより長寿化を進めるべく、精密なロボット操作により手術がなされていくであろう事、など冒頭部分と同じく、人間の生活自体が益々機械と切り離せなくなっていくと思われます。

しかし、現在、世界では地球温暖化やオゾン層の破壊などの環境問題が深刻化し、核燃料開発に関する危険性が論じられています。人間が豊かさを求めて機械化を進めれば、生活は便利になりますが、皮肉なことに、地球の寿命は短くなっているのです。医療の世界でも、鬱病

など、機械では対処しきれない、精神的な病気を抱えている人が増えています。このような心の病は、私達の社会が複雑化されるに伴い、益々増えることでしょう。機械の発達が、逆に私達人間が生きにくい環境を作ってしまう恐れもあるのです。

ここで心に留めておかねばならないことはただ一つ、この機械を作るのも人間だし、使うのも人間だということです。その人間が万能感を持ち始めるほど怖いことはありません。マグニチュード七以上の地震が起こることを予測はできても、防ぐことはできません。全てのビルが壊され、文明が一瞬にして倒壊した時、人は何を思うのでしょうか。

それを考えると、人間と機械が共存することを熱心に求めるより、自然に対する畏怖の念をもう一度呼び起こし、原点回帰することも必要になってくるのではないのでしょうか。人間の小ささや非力感を実感させてくれるのは、自然の驚異しかありません。

私達は十五年後を守る為、自然からの予言に対し、もっと耳を傾けなければならない時が来ているのです。

お月さま お世話になります

稲宮 健一

昨年の夏は暑かった。原因は海水温が上昇して、例年と変わった偏西風の流れが熱波を起し、日本を襲ったためである。人起源の温暖化に依るとは断言できないが、二酸化炭素（CO₂）濃度が過去二百年間に一・四倍に増加したことは事実だ。多くの科学者が各種の根拠に基づいて鳴らす警鐘を真摯に受け止めよう。その措置として、CO₂排出の少ないクリーン・エネルギーの開発と、省エネ製品の普及が図られている。

二〇二五年に向けて、ここでは省エネ達成に関する一つの提案をしたい。省エネ対象の大口の一つである産業界では高度な頭脳作業の割合が急激に増大し、それに伴い、頭脳に相当するコンピュータの消費電力がウナギ登りに増加する傾向にある。これを抑制したい。

そこで、高度な演算を月面で行う案を創ってみた。対象となる例として、将来の地球環境を明らかにする地球

シミュレータ、航空機の安全や、局地予報に使う気象変動シミュレータ、化学の分子レベルのシミュレータ、高層建築、橋梁の開発用の強度計算等々で、製品の知的水準が上がるほど、あらゆる分野で膨大な科学技術計算を実行する必要性に迫られる。

案件を試験に例えたと、問題は紙一枚に書かれていたとして、その解答も同様に、一、二枚で書ける。受験生は、問題を読んだ後、脳の全能力を全回転させて解答を作る。この活動はコンピュータで実行される膨大な繰返し演算に相当し、脳の血流に相当する大電流を消費して実行される。この演算を月面で実行する案である。

想定した月面コンピュータは次の特徴を持つ。コンピュータの心臓部分である中央処理装置（CPU）、メモリなどの大規模集積回路（LSI）は微細で、かつ薄いシリコン上に多数の電子部品と共に載せられている。

但し、宇宙線で劣化しない構造が必要である。月面の重力は地上の約二割なので、軽い構造体を持つ薄膜製のコンピュータが可能である。電源は月面に置かれた太陽光発電から供給される。月に雲はないので効率よく発電で

きる。また、演算のため、超高速での膨大な繰返し演算中は大量の熱を発生するが、この熱は構造体を経由して簡単に真黒の宇宙空間に放出できる。このコンピュータは地球の資源に全く依存しないで作動できる。

ユーザに必要な簡潔にまとめられた文書や、画像に表された結論を高度な暗号を使って地球に送る。ここで、放送衛星の例を引用すると、日本列島に番組を送る送信電力は二〇〇Wと極めて小さい。月までの距離は放送衛星の場合の十倍なので、百倍の電力である二〇kwであるが、大型高性能のアンテナを風の無い月面に固定できるので、二kw程度の電力で伝送できる。これとは逆に、地球から月に向かって、演算の条件、プログラムの修正や、更新の情報も同様に地上から容易に伝送できる。

但し、月までの距離が三十万kmなので、信号が到達するのに一秒かかる。リアルタイム性は少し劣るが、この時間遅れは科学技術演算の目的に支障はない。

昨年の五月に野心的な宇宙開発の試験プロジェクト、「イカロス」衛星がH-IIAロケットで「あかつき」と同居し、同時に打ち上げられた。ロケットに収納された

内部に幕が組み込まれた本体は直径一・六m、高さ〇・八m、重量三〇〇kgの「ちゃぶ台」ぐらいの大きさで、衛星軌道に投入された後、折りたたまれた扇子を開くように幕を本体から伸張して、一辺が十四mの正方形の風のような幕を宇宙空間に広げた。全展開された厚さ〇・〇〇七五mmの極薄のポリイミド樹脂製の幕は太陽風を受けて、丁度ヨットののように自ら宇宙空間を自動走行して、目的地に飛翔する実験が行われている最中である。

月の重力に十分な強度を持つ、沢山の薄膜部材で構成された大容量の薄膜製の軽量なコンピュータを創作して、イカロスと同様な方法で月に到達させる。また、システム全体は、地球と通信するためのアンテナ、送受信機、大面積の太陽電池、排熱機構など、多くの部材から構成されるが、これらを月面で完成品に組み立てるには、日本が得意とするロボット技術の活用が期待される。

静止衛星を使った世界通信はSF的な発想で世にデビューしたが、その夢は実現した。この案もきつと多くのブレークスルーを通じて、実現できると信じている。

微生物と植物カーボン

吉 寄 清 己

二〇二五年の日本は、微生物をもつと利用し、植物カーボンを化学原料にしている。

世界の自動車は八億台。中国とインドの台数は増加して、近いうちに十億台になるという。自動車用燃料の使用量はますます増え、CO₂排出による地球の温暖化は進んで行く。石油の使用量を減らすため、空気中のCO₂を吸収して生育する植物からエタノールを作り、ガソリンに混合する事業が始まってきた。アメリカはとうもろこしデンプンを発酵して作るエタノールをガソリンに混ぜて販売している。ガソリンに一〇%加えても車は対応できるという。さとうきび産地のブラジルは、砂糖からエタノールを作り、自動車燃料にしている。ところで、アフリカの飢餓、開発途上国の人口増加は世界の食料不足をもたらすと関係者は危惧している。私は食料品を燃料にすることは避けてもらいたいと思う。

非食品植物のなかで、エタノール製造の原料になるのは雑草と藻類・稲わら・とうもろこしの茎・バガス・建築廃材・間伐材などいろいろある。これらの構成主成分はセルロースで、セニ製品になっているように堅牢な高分子化合物である。セルロースを原料にしてアルコール発酵を行うには、まずセルロースを低分子のグルコースに分解しておく必要がある。この分解は常温では容易なことではない。しかし、草を食べる牛、木材を食料にしている白アリは胃腸内の酵素、微生物の働きを利用してセルロースを常温で消化している。この消化技術を利用して台湾の企業がエタノール生産を始めた。ゴルフ場の刈り取った芝生は利用価値がなく、処理費を支払って焼却している。この芝生処理費をエタノール製造の諸経費に当てれば、できたエタノールは利益となる。利益は日本円に換算して一リットル当たり五〇円である。エタノール六〇%の洗浄用、七〇%の消毒用溶剤として売られる。これは廃棄物処理の地産地消の仕事である。

稲わらを原料にエタノールを生産する実験は一〇〇リットルの発酵槽で行われた。まず稲わらを高温高压に

処理してセルロースを分離し、酵素を加えてグルコースに分解する。これを発酵し、六%エタノール液を年二トシ生産した。液は蒸溜して純エタノールを製造する。一キログラムの稲わらから二五〇CCのエタノールが生産できた。生産費用がエタノールの販売価格より安いことが事業化できる前提となる。決め手はセルロースの分解酵素を安価に、しかも大量に作れるかどうかである。

植物の葉緑体(葉)にセルロース分解酵素の遺伝子を注入し、植物の成長と共に、酵素を量産する実験は、植物そのものが成長しなくなり失敗した。植物体内にある分解酵素が、植物の主成分であるセルロースを分解して、植物自体の成長を妨げるからである。最近、沖縄の熱水鉱床から摂氏一〇〇度で生きている微生物が発見された。その細胞膜にセルロース分解酵素遺伝子を注入し、生育させたところ、注入した酵素は一〇〇度の高温でセルロースを分解する性質があることがわかった。しかも、常温においては、分解機能は働かないのである。植物の葉にこの超耐熱性セルロース分解酵素遺伝子を注入し、酵素と植物を同時に生育させ、収穫後、植物を一〇〇度

に加熱すれば、主成分のセルロースはグルコースに分解する。しかも安価に。いわゆる自己糖化型作物が開発できた。

原油の価格は、一バレル当たり九〇米ドルに高騰している。まだまだ値上がりするらしい。このような高価な化石燃料を車の運転に使わなくても、電気自動車が開発され、普及してきた。電気自動車は CO_2 を排出しないから地球環境の悪化は改善されるだろう。ところで、プラスチックは私たちの生活に便利な品物である。プラスチックの骨格はカーボンである。カーボンサプライヤーは石炭に始まり、今は石油・天然ガスが主流となっている。この有限で将来高価になる化石原料に対し、 CO_2 と H_2O から光合成で毎年生育する植物は無限のカーボン原料である。微生物を利用すれば、非食品植物のセルロースから糖が生産できる。次に有機合成化学の技術を活かして、液体燃料や有用なプラスチックを生産すれば、我々日本人は石油・天然ガスの枯渇、高騰を心配する必要はなくなる。そして、植物がやっている光合成の人工化はもっと先の年代になるだろう。

ペン・フォト句会の将来展望

新しい文芸の勉強会、ペンフォト句会は昨年八月に誕生した。一回目の勉強会は、全員が全くの素人であるかと思ったが、さすがペンクラブ、傑作が集まった。

写真を撮って他人に見てもらおう楽しさと、自分の言葉でものごとを表現する楽しさを兼ね備えたこの文芸は、写真か句のどちらか一方だけでは、伝えきれない情景や情念をよりの確に表現することができる。写真だけ上手くても、句だけ上手くても十分ではなく、この両者の利点、欠点を熟知して巧みに味付けのできる料理人だけが醍醐味を味わたるのだ。

そこには古めかしい権威もなければ、小難しい理論もないし、窮屈なルールもない。

始めたばかりの、同じレベルのお仲間が沢山いて、お互いの作品を評価し、添削しあうことで、自然にレベルが向上し、仲間意識が生まれる。大阪在住の会員も、句会当日出席できない会員も事前に作品をプロマネにメールし、句会に誌上？参加できる。

デジカメで撮った画像をメールで直ぐに送ることができる、電子書籍という新しい受像ツールが普及すれば、遠隔地でも手軽に作品の鑑賞が可能になる。画像は文章よりも情報量のはるかに多く、官能に直接訴えるので、この文芸は爆発的に普及する可能性がある。NHKでも「フォト575」の番組を推進している所以である。

ペン・フォト句会の毎月の成績がホームページに掲載され、会員以外の人達のアクセスも可能になった。

今後は他のクラブとのリンクの輪を広げたり、外部講師の招聘、作品の発表会などの対外的な活動を活発に行えば、当ペンクラブはこの新しい文芸の普及に先駆的な役割を演ずる有力な組織のひとつになり得る。

このフォト句会は、未だ実績は乏しいが、老ボケ防止を兼ねたクラブライフの発展充実および会員増強のための手段としてその先行きは誠に有望である。

OBペンクラブの会員の皆さん、今がチャンスです。奮ってご参加下さい。

(プロマネ 中村 晃也)

特集・大失敗



フツゝじやない

三 春

その昔、六本木に「スウェーデン・センター」なるものがあつて、そのなかのスウェーデン料理の店「ストックホルム」は、知る人ぞ知るお洒落なデート・スポットとして憧れを集めていた。スモーガスボード専門店としては、おそらく日本唯一だっただろう。レストランというよりむしろ高級クラブのような雰囲気だ。ある日、「いい店を教えてやろう」と上司がご馳走してくれたのが最初である。広々とした落ち着いた空間に豪華な調度、柔らかな照明、数々の珍しい食材と味の良さに魅せられたが、新米OLには「高値の華」だった。

あれから数十年。姿を消して久しいその「ストックホルム」が数年前に赤坂で再開されたと聞いた。果たして往時の面影をとどめているだろうか。

我が家では母が強くて、父はいつでも蚊帳の外。「昔

は小姑に苛められてね」と私に語って聞かせる頃には既に女帝となっていた。母は兄を偏愛していて、兄の帰宅が遅い夜は食事もとらずに一人いつまでも待っていた。従順な兄は、母が郷里から連れてきた人と初めての見合いをして、あっさりと結婚を決めた。その日から婚約者が頻繁に泊まっていくようになる。二階の客用寝室は障子一枚で廊下に面しているから、その真向かいのトイレに行くにもついつい遠慮してしまう。彼らが別の地に新居を構えると聞いて正直ほっとした。

ところが、その兄夫婦に子供が生まれることになって、「こちらに戻って同居したいそうだから、お前もいい加減に結婚して部屋を明け渡してくれないと困る」と母が私に切り出した。そう言われてもちやうど失恋したばかりだ。すると「結婚なんて誰とだってそうたいして変わりがやしない。お前が相手を好きかどうかよりも、相手に好いてもらえるかどうかが肝心」と、追い出しにかかる。乱暴で無責任な説得ではあるが… これから毎夜トイレを我慢することを思えば、そろそろ潮時か… こうして半ばやけくそで結婚に踏み切った。

式は挙げないつもりだったが、それだけは勘弁と母が泣きつくので折れた。但し、口を出すな、手も出さな、お金だけはたっぷり出して、が条件である。そうになると、いかに個性的で独創的な細工をほどこすか、フツッじゃない披露宴を演出するために頭をひねることが至上最大の楽しみになってきた。挙式は大学のチャペルで、披露宴はいっそのことあの「ストックホルム」を借り切ってしまう。退屈なご挨拶は一切なし、友人や新郎がギターやフルートを奏で、新婦までもが下手な歌を聴かせて、親戚一同はウンザリという、その日限りのわがままコンサートを企画。当時としては珍しいスタイルだった。

風も爽やかな五月。いよいよ挙式当日、後悔と不安が頭をよぎったが、映画「卒業」のようなことを期待する間もなく、式はあっけなく終わってしまった。

続いて、披露宴をおこなう六本木に移動するために、参列者はそれぞれ車を都合して大急ぎで出発した。はつと気付くと、新郎新婦だけがポツンと置き去りにされているではないか。慌てて駐車場に駆けつけると、残って

いたのは新郎の実家が仕事に使っているオンボロのライトバン。後部席には資材や工具が乱雑に積まれたままだ。泥と埃にまみれたこの車を皆が避けたのも無理はない。

「えい、いままよ」とウエディングドレスの裾をグイッとたくしあげ、薄汚れた助手席に威勢よく滑り込む。ヴェールはずり落ち、汗がにじみだす。凝りに凝ったこだわりの衣装もこれで台無しだ。運転手はもちろん新郎。ジョン・レノンを気取った長髪とヒゲがもはや珍妙である。必死な形相ですつ飛ばす婚礼衣装の二人に、道行く人は目を丸くして興味津々。赤信号で止まる度に左右の車から覗きこまれる。素人映画のロケとでも勘違いしてくれればいいが……まさにフツッじゃない展開だ。

その後もなにか思いついてはドジを踏んでばかりを繰り返してきたように思うが、母は呆れかえったのか、それとも諦めきったのか、もう何も言わなくなった。

後年、母が亡くなった時、子供の頃から知っている母の友人が焼香にきてくれて、しみじみと洩らした。

「お母さん、貴女のことをとても心配しててねえ……」

失敗の代償

上 田 信 隆

失敗と成功は紙一重という。確かに成功という自慢話も、一つ間違えれば奈落の底へととなりかねないこともある。その点からすれば、大成功でも大失敗につながることもあるのかもしれない。

私はつつがなく定年を迎えずに、五十歳にして起業家の道を選んでしまった。別に会社に特別な不満もなく、そのまま誰もが定年を迎える典型的なサラリーマンと、自他共に認められた存在で有ったと思う。しかし、ある成り行きで起業家の道を選択してしまった。

起業家である以上、一通りの苦勞の連続である。社長とは名ばかりで、何でもしなければ生きてはいけない。後輩の諸君には起業家を薦めたことがないことからして、私の起業家の道があまり誉められたものではないことがお分かりだと思う。

社員にたいする責任だとか、金銭の心配だとか、心静

かなことはこの二十年間一度も無かったといつてよい。あえて選んだ道であるので後悔こそしていないが、若し平凡なサラリーマンの世界を選んでいれば、やりたいことがもつと出来たのではないかと悔やんだりもする。せいぜい良かったことといえ、何も考えずに毎日を通じたことを挙げるしかない。

起業家に向かわせたのは、私の営業時代のほんの小さな成果がそうさせたとも言える。今は皆さんにはあまり聞き覚えがない、UNIXマシンの営業の販売責任者になって全国を飛び回った。オープンソースなどという言葉は今では主流であるが、当時はまだはしりのもので、その説明にさえ苦慮したことを覚えている。苦勞して、偶然ある専門学校に数百台の大型物件が決まったこともあった。

しかし、この事業販売は約二年をもつて終了に追い込まれる。コンピュータの販売は営業的魅力はあるが、損益的には難しいものだ。価格の競争、技術の変化、バックアップ体制の充実など、どれをとつても経験と技術の修練が必須であり、メーカーの体力が試されてしまう。

事業の撤退はおおくの傷みを伴う。業績評価として事業の撤退はマイナスをもたらす。私はともかく、特に将来ある担当の若手に傷がついてしまうことが多い。私が彼らの防波堤になったかといえば、正直自信の程はぐらついてくる。企業においては、組織の運営をあく以上、数字という損益こそ成果を問われる。

どこに何台売ったという時々の寸劇より、この期がなんぼ利益をあげたかが問われるものである。新規事業などが実績をあげるのは、至難の業である事が多い。今、私が事業の責任を負う事を求められたら、おだてにも乗らずに遠慮する道を選ぶかもしれない。

さて、私の大失敗に戻るが、実績をあげ、成果をあげることだけを、中心に選んだことが失敗だと思う。成果にばかり酔い知れ、周りをよく見ない性癖、時によりこの自慢は顰蹙を買ったことだろう。俺が俺がの、のほせあがり、守りに転じると意外に弱いものである。

大きな会社だから思うようにやれなかった、自分が全てをやればこんなことにはならない、という不遜にも似たうぬぼれや反省のなさが、起業家の選択になったのか

もしれない。

起業はしてみたが、家族の協力（犠牲）や多くの人の助けでなんとか面目を保ってはいるものの、けっして勝ち組などとは思っていない。

こうしてみると私の人生は大失敗といっても過言ではない。会社は利益を出してこそだと思いが、なんとか損益を確保している今でさえ、何か足りないものがある。失うものが限りなく多いと思うことさえある。

わが人生の大失敗を弁明させていただければ、失敗の代償として、健康で一生懸命仕事に取り組めたという体験ができたことである。この貴重な体験と、多くの人脈の広がりを考えれば、あるいはお釣りがきているのかもしれないが……。



添乗中の大失敗

上山裕次

私が入社した昭和四十八年当時、団体旅行専門店の男性社員は添乗を覚えることが最初の仕事でした。先ずチーフの下でサブ添乗員として二、三回経験します。そして二ヶ月後には、「わからなくても、行けば何とかなる」と言われ、チーフとして送り出されました。

添乗は、「上手くいって当たり前。失敗したら会社の信用問題になる」というプレッシャーがある仕事ですが、一方、無事に帰ってきた時にお客様からの感謝の一言でそれまでの疲れが吹き飛ぶというやりがいのある仕事でもあります。これから添乗中の失敗談を二つばかりご紹介したいと思います。

(一) 中野区のある町内会の旅行で東北に行きました。

出発日前日、行程表を見た時に、「蔵王のお釜見学」と記されていました。

可愛がっていただいた先輩に、「このお釜見学って何ですか」と訊ねたところ、真顔で、「それはお釜を作っている所を見に行くのだよ」と言われました。私は全く何も疑問に思いませんでした。

バスの中で町内会の会長が、「添乗員さん、このお釜見学って何？」と訊いてきました。私は、待ってましたばかり、「それはお釜を作っている所を見学するので」と答えました。

すると会長は、「そうですか。どんな釜ですか？ 風呂釜、それとも普通のご飯を炊く釜ですか？」と更なる質問をしてきました。そこまでの答えを考えていなかったの、

「それはご飯の方ですよ」と適当に答えました。会長がクスッと笑ったのはわかりましたが、私は風呂釜だったのか？と思っただけでした。

やがて、目的の「お釜見学」に近づいてきた時、バスガイドが、

「皆様、これからお釜見学に行きますが、ここは五色岳・蔵王狩田岳・熊野岳に囲まれた火口湖で、釜状なのでお

釜という名前がついています」と説明しました。

私はえっ！とビックリし、恥ずかしさで穴があったら入りたいという気持ちになりました。会長は笑いながら、「初々しい添乗員さんだからちよつとからかっただけ。気にしないで」と言われましたが、その後はまた失敗するのではないかとビクビクしていました。それでも、何とか無事に終了し、会長からは寸志と励ましの言葉をいただきました。

先輩は私が真に受けるとは思っていなかったと後で言いましたが、このことがあってから、私は行程表の中で知らない地名や人名があつた場合は、人に聞くのではなく、自分で調べることにしました。

(二) オーストリアのある宮殿に行った時のことです。

市内観光を終え十五時すぎから自由になったので、ガイドと宮殿の庭で話をしていました。次第に周りの人々もいなくなり、いつのまにかガイドと私の二人だけになりました。閉門の合図にも気がつかないで話に夢中になっていました。やがて遠くの方で犬の吠える声があります。それが気のせいか段々と大きくなってきたのです。

そして二匹のドーベルマンが見えてきました。最初は鎖に繋がれていると思ったのですが、よく見るとフリーです。二匹の犬は我々に気がつき、こちらに向かってくる様子。やばいと思った我々は出口に走りしました。

ところが扉は閉まっており、通用門らしきものもありません。そうこうしている間にもこちらめがけて突進してきます。我々は塀沿いに走りしましたが二m近くの高さのため飛び乗ることが出来ません。やがて一部破損したところを見つけジャンプ。ガイドは外側に降りられましたが、私は焦ってなかなか登れません。

やっと上に手が届いた時、犬も下に来てジャンプしてきました。まさに間一髪という状態。どうにか向こう側に降りられましたが、心臓はバクバクで、手のひらや膝はすりむけ、足は傷だらけになっていたのです。もしこのまま登れなかったらどうなっていたらうと考えただけでぞっとしました。そして、「時間は守るべき」と実感させられたのです。

こういった失敗談も、今では笑って話すことが出来るとても懐かしい思い出です。

悔いが残る

岩崎 洋一郎

一九六八年、米国に出張中に、本社から電話がかかってきた。ブラジルへすぐ飛べと。業務は、アクリル繊維の企業進出の下調査という。正直驚いた。そのころ、私は繊維を離れて、樹脂分野の新事業企画に専念していた。

ブラジルを全く知らないのに、本社に一週間の余裕をもらい、ニューヨークで懇意の法律事務所や会計士事務所を訪ね、参考になる資料を入手して勉強した。隠密行動とせよと本社から念を押されていたので、商社にも黙って飛行機やホテルの予約を自分でした。そしてサンパウロへと飛び立った。二週間、文字通り朝から晩までブラジルの現状と近未来の姿を調べ上げた。

この国は確かに将来性に恵まれているが、今の時点では投資すべきでないと確信した。インフレは治まったというが、それでも年三〇パーセントを超えている。しかも使用するアクリル繊維技術は、まだ開発段階の乾式と

いうではないか。とても事業として成功はおぼつかないと判断した。レポートには、調査事項と共に、意見として投資先としては不適切であり、進出は時期尚早と結論付けた。

その後、私はニューヨーク駐在員になった。ブラジル案件とは縁が切れていた。一九七三年に、流れて来た社内情報では、いよいよブラジルへの直接投資が本格化する機運になったというものがあつた。

ちょうどそのころ、社長が米国に來られることになった。私が通訳兼アシスタントとして、二週間ばかり米国の訪問先にお供した。二人だけのリラックスした空間ができた。頃は良しと、日ごろ感じていたことを思い切つて口にした。一課長の分際で、社長に直訴するのは勇気を要する。でも、抑えきれない気持ちに駆られて、ブラジル案件に反対であると告げた。そして調べた事実に加えて、米国の識者による同国の国情や経済分析、そして自分の分析と見通しを率直に申し上げた。

そして代替案として、米国で有力化学会社Aとのアクリル樹脂に関する合弁会社設立案を提案した。これは単

なる思い付きではなく、そのA社の先任副社長と非公式に打診済みで、先方は前向きであったことも報告した。

黙ってじーっと聞いていた社長は怒りもせず、ゆっくりとした口調で、「ブラジルは未来の国と評価されている。同業他社も積極的に直接投資を進めている。わが社も負けていられない。アメリカ進出に関しては面白いが、競争が激しいこの国では苦勞が多く自信が持てない」との見解を示してくれた。私は、「日本の常識はそうかもしれないが、現地の情勢とブラジル国を最もよく知っている米国企業の意見を重視すべき」と熱っぽく説いた。

一年後に、ブラジル進出は本決まりとなった。そしてその直後、本社から電話が夜中にかかってきた。当時の直属上司からで、「社長命令で、君はすぐにブラジルに転勤して、現地で進出合併企業の経営を担当するようにとのことだ。局面が難しいことを最もよく知っている君に頼むとのことだ」と。

社命であるので抗しようもない。生まれたばかりの子供と七十歳を超える母を連れて、新興の石油化学地帯でもある古都バイアに赴任した。それからは地獄であった。

工業としての技術が完成されておらず、生産は間欠運転したり手直ししたりで、苦勞続きだった。赤字経営だったので金策にも奔走した。二千キロ以上離れているリオやサンパウロの金融機関に毎日のように追加融資等を頼み込んだ。そして、おおよそ東京と大阪位の距離にあるこの両都市間を一日に二往復もした。本社に打つ電報の発信日時を見て、本社では、「岩崎はいつ寝ているのか」とまで噂になったという。

ついに体力も氣力も尽き果てて、潰瘍でダウン。現地での療養はままならず、本国に帰任することになった。悔しい二年間であった。

今振り返ってみても、一課長の方で社長に直訴したことには悔いはない。しかし、それが全く功を奏しなかったことが口惜しい。そして、結果として会社が十億の損害を被った結果になったのも悔まれる。もっと強く効果的に反対できればよかったのに。しかし、日本にいない米国駐在員では、他の重役を巻き込むことも叶わず、地団太を踏むばかりである。今でも、どうしたら止められたであろうかと思ひ悩むことがある。

止める勇氣

野瀬 隆 平

長生きすれば恥多しというが、まだ人生も駆け出しのころ、今思い出しても冷や汗が出てくるような、恥ずかしい失敗をした。

大学に入り、やっと受験勉強の日々から開放された。

これからは勉強以外にも何かしたいと思い、サークル活動にその場を求めた。音楽は好きだったが、楽器を奏するほど器用ではない。歌を歌うことなら気軽に楽しめそうだと合唱を選んだ。学内には男声合唱と混声合唱、合わせて三つか四つの合唱サークルがあった。混声の場合は学内に女性が少ないので、女子大の学生が加わっている。さて、どの合唱団にするか。幸い、学園祭で全部のサークルが発表するので、聴き比べて（実は、歌っている女性も見比べて）一番魅力的なところに入ろうと考えた。その結果、一つの混声合唱団を選んだ。後で知った

のだが、いわゆる歌声のサークルである。技術的には他の合唱団のほうがうまい筈なのだけれども、最も迫力があり、訴えるものがあるような気がしたからだ。

週に一回の練習は、学内にある会館で行う。パートごとに分かれて練習したあと、全体で音を合わせる。うまくハモッタ時には、率直に感動する。年に一度、合唱もした。千葉県のお寺に三泊ほど泊まり、本堂で歌うのだ。最後の日に、村の人達をお寺に招いて合唱を聴いてもらう。その夜は、「ガントツ」と称して徹夜で仲間たちともろもろのことを議論しあう。この合宿を通して、授業では得られぬ知識と友を得ることができた。

さて、いよいよ失敗談を語らなければならない。日ごろの成果を発表する合唱祭でのことである。団として五、六曲を歌う。指揮は、曲ごとに仲間の団員が順番に行う。私も一つの曲の棒を振ることになっていた。

自分の出番が来て指揮台に立つ。壇上にピアノがある場合は、各パートの出だしの音は簡単にとれる。しかし、当時はピアノが無い場合が多かった。そこで、いつもの

ように音叉で音を取ってパートごとにくだしの音を与える。指揮棒を振り下ろし、演奏が始まった。曲は、黒人霊歌。「牧師が厳かに 天国を語るとき 俺たちは腹が減る……」という歌詞で、いかにも歌声サークルが選びそうな歌である。

充分歌いこんだ曲であるから、間違えようが無い。いかに感動を与えるように歌うか、表現の問題だけである。いや、その筈であった。滑り出しは各パートの音程も確かで、順調に流れ始めた。このまようまう進むと思っていたら、曲が三分の二ほど進んだところで、ハーモニーが壊れた。どこかのパートが音程を狂わせているのは分かったのだが、頭に血が上ってしまっただけで、どうしたらよいか判らない。練習中ならば、勿論すぐにストップしてやり直すところだが、今まさに大勢の客の前で曲が進行しているのだ。指揮者として決断をせまられる。前列で歌っているテナーの仲間が、目で盛んにこちらに合図を送ってくる。彼にもおかしいのが分かっているから。多分、ここでストップしろといっているのだろう。

そうこうしている内に曲は最後まで来てしまった。結

局、強引に棒を振り続けてしまったのである。演奏が終わって場内から拍手があったものの、何とも決まりの悪い思いで台から降りた。

その日の反省会は私にとって針のむしろだった。歌った団員は自分たちにも責任があると思っているが、最も責任が重いのは、言うまでも無く指揮した私である。歌をうまく纏められなくて残念だというのではなく、曲の進行中とはいえ、途中で演奏を打ち切り、最初からやり直す勇氣を持てなかったことへの悔いである。

この後悔の念はいつまでも心に残り、会社勤めをするようになってからも、事あるごとに胸をよぎった。

先日、何十年ぶりかで、その合唱サークルの同窓会に出た。かつての団員も今や七十歳を超えた爺さん婆さんである。練習場だった会館は、雰囲気は全く違う明るいレストランに改装されていた。ずっと心に引っかかっていたこの恥ずかしい話をしたけれど、誰も「そんな事あったかなあ」と覚えていない様子だった。

眠ってしまった候補生

大庭 定男

昭和十八年十月末、東京・小平市の陸軍経理学校では、全校をあげて敵味方に分かれて徹夜の演習を行い、私たち幹部候補生隊もこれに参加した。軍曹の階級であった私は斥候を命ぜられ、戦友と共に敵情搜索に自転車で出発した。肩には三八銃（明治三十八年制定の歩兵銃）を掛けていた。

当時の小平市は畑と森が点在する全くの田舎で、その晩、月は煌々と輝き、空気は澄み、冷え冷えとしていた。敵はどこに潜んでいるかわからない。人氣のない田舎道を警戒しながら走るのは、演習とはいえ気持ちのよいものではなく、怖くさえあった。

深夜、午前二時ころであろうか、明かりがついた一軒家を見つけた。「調べて見ようか」と相棒にいうと「よからう」という。恐る恐る入ってみると、牛乳を絞っている最中であつた。今のような搾乳機のなかった当時は、

すべて手でやるしかなかったのだろう。

不意の訪問者、しかも銃をかずいた兵隊に驚いたらしい男は「どうぞ」といって席を勧め、「飲みますか」という。夕食よりかなり時間がたち、腹も空いていたので、ためらうことなく、「いただきます」と言つて、怖々飲んだ。かなり濃い、ねっとりした味であつた。飲んでしまつてから、「しまった。殺菌してないものを飲んでしまった」と思ったが、後の祭り。どうしようもない。

このように重要な敵情搜索の途中に大事な任務を忘れ、民家に入り込んで油を売るとはとんでもない事だと気づき、早々にこの家から立ち去り、隊に向かった。

隊はかなり敵陣に接近し、黎明攻撃（夜陰に乗じて敵陣に近付き、黎明と共に突つ込む戦法）の態勢に入つており、撃ち合う弾（もちろん、空砲であるが）の下で、畑や草原を匍匐前進していた。私と戦友も匍匐前進に加わり、隊長に「異常ありません」と報告したところ、「遅いではないか。探ってきたことは何の役にも立たない」とお目玉を食つた。

ところが、その後がさらにいけない。昨夜からの疲れ

に日ごろの蓄積疲労が加わり、匍匐の状態で眠ってしまつたのである。「ワーツ」という歓声に眼をさましてみると、隊は敵陣に突っ込んでゐる。急いで、同じように歓声を上げながら突っ込んだ。幸い、誰も私が遅れて突っ込んだことに気づいていないようである。

それから、しばらくの数日、私は不安であつた。もし、隊の誰かが、「大庭候補生は眠ってしまつて、遅れて突撃した」というようなことを、区隊長に言えば大変なことになる。最悪の場合、「将校生徒にあるまじき行為」として、幹部候補生の資格をはく奪され、見習士官になる日を目前にして、軍曹から一等兵に降等されても文句は言えず、過去一年あまりの苦労は水の泡となることすらありうる。

ひやひやの数日であつたが、幸い、何のこともなく過ぎ、十一月二十日卒業、経理部見習士官に進級出来た。私は南方軍勤務を命ぜられ、乗船地の宇品に向かった。



車中のしくじり

中村 爽

湘南の茅ヶ崎に住んで半世紀を越す年月の間、東京までの電車通学、通勤を続け、さまざまな出来事を体験した。不注意が原因のしくじりは多く、車内に物を置き忘れたり、落したり、盗られたりしたし、遠距離乗り越しの回数も多い。われながら情なく、苦い思いもあったが、今となると、それも懐かしい思い出となっている。

まだ学生のころ、従兄弟の結婚式に呼ばれた帰りの車内で、引き出物の袋を網棚の上に置き忘れた。年の近い新郎の晴れ姿と祝い酒に酔っていたのかもしれない。駅に届けるのはきまりが悪くて、そのまま帰宅し、家族にも知らぬ顔で通してしまった。初めてのしくじりで、同じことは二度とあり得ないと思ったはずなのに、実はその後、何度も同じような忘れ物を繰り返してしまった。

大学の卒業式が終わったの帰り道、同じ沿線に住む同級の友人と一緒に、思い出話にふけた。友人が先

に降り、なんとなく気抜けがして、ふと眠ってしまった。駅に着き、ホームを歩き出してすぐ、貰ったばかりの卒業証書が入った紙筒を座席に残したのに気がつき、駅事務所に駆けつけて遺失を届けた。程なく忘れ物は平塚駅で見つかったが、返ってきた紙筒の中にあった証書は、まるで雑巾でもしぼったように、しくわくちゃになっていた。それが何故だったのかは分からずに終わった。

会社勤めに慣れ、残業や居酒屋通いも多くなると、たびたび東海道線大垣行きの終列車で帰ることになる。おなじみ客が多く、ある夏のむし暑い夜も満員で、脱いだ服を手持ってデッキで立ち続けた。下車してから見ると、服の胸ポケットに仕舞った名刺入れがない。クレジットカードを入れてあったので、翌日はカード会社や警察に紛失届けを出すなど大騒ぎ。幸いにも数日後、それは大垣駅で見つかった。

海外出張が度重なったころ、出発に備えて書類や旅費のドル紙幣などを入れたアタッシュケースを家に持ち帰る時のことだった。何気なく電車を降りて、自分が手ぶらでいるのに気がつき、びっくり仰天。すぐに駅事務所

から電車の各停車駅に連絡をして貰い、一時間ほど後に小田原駅で見つかった。小田原駅では警官立会いで事情を聴取され、ようやく取り戻した。さすがにこの時は、あまりにも間拔けな失敗を恥じ、他言無用として胸の奥に仕舞っておくことにした。いよいよ呆けてきたのかと気が休まらなかった。

ある冬の夜のこと。酒席続きで疲れを覚え、帰りはグリーン車で少しゆっくり休むつもりだった。夜も更けて、乗客はまばら。横浜を過ぎると車両内には三、四人の乗客しかいなくなった。いつの間にか眠りこけていたが、ぼんやりした意識の中で、何者かが肩に触れ、座席横の通路を急ぎ足で通り過ぎたように感じ、ふと我に返った。一瞬、その後姿を見た記憶があるが、また眠りこんでしまった。はつきり目を覚ましたのは茅ヶ崎に着いた時。駅前でタクシーに乗り、自宅に到着。ところが、上着の内ポケットに財布がない。慌ててコートからズボンまでのポケット全部を探したが、結局、盗られたと認めざるを得なかった。おまけに、首に巻いていたマフラーまでも抜き取られているのに気がつき、あの夢で

見たと思った姿は現実の掬りだったに違いないと思った。家族からは、怪我がないのは幸いとしても、ともかく無神経で無防備過ぎる、という批判がいつまでも続いた。車内で酔っ払いを介抱するふりをした掬り団の横行に世間の注意が喚起されていたころのお粗末で、反論の余地もなかった。

深夜の電車での乗り越しは何度もあった。いずれもお定まりの飲み過ぎの眠り込みが原因だ。平塚、大磯、二宮はまだしも、小田原、早川、根府川、熱海などとなると上りの電車がなくなつて往生した。最も遠かったのは三島で、やむなく怪しげなホテルに泊まった。翌日は快晴で、目の前にくつきりと見えた大きな富士山が印象的だったのを思い出す。

毎日の乗車はしなくなった現在だが、現役時代には往時の国鉄、そして現在のJRには長年の間、随分とお世話になった。車中で過ごした喜怒哀楽の時間は生活の一部そのものだった。その中で生じた出来事の思い出はいつまでも忘れ難い。

因果応報

富岡 喜久雄

今回のテーマは失敗談とのこと。自慢話は多からうが、失敗談は少ないだろうとのコメント付きである。だが我が人生失敗続きのようでもあり、ならば話の種は尽きない筈だ。出自ですら失敗だったと言いたくなるが、生まれた時と場所は選べないからそれは神様の失敗で、自分の所為ではない。失敗には悔恨と怨嗟も付き物で、ある女流作家は「怨で書く」と言うが、それはやりたくない。そこで俄か中年国際派としては、旅の恥も許されようから、その幾つかを披露することにする。先ず思いだすのは、湾岸戦争直前のバグダットからクエートへの旅立ちで犯した判断ミスだ。たとえ「問題ない」との大使館情報を信じたとしても、結果は着いた翌朝イラク軍の攻撃に曝されたのだから、正に飛んで火に入る馬鹿者と言われてもしょうがない。後の苦勞を思えばやはり大失敗だろう。帰国後ある銀行筋との会食で「ご苦勞でした」

でなく、「やらなくても良かった経験ですね」と言われた時は苦虫を噛み殺すしかなかった。

虫は虫でも、もう少し可愛げな虫で済んだ失敗は南米にある。ボリビアでの地鎮祭だった。米国援助で地元が作った幅だけ六車線と広いが、土盛り転圧しただけの穴だらけな道路の改修工事のこと。場所はサンタクルス近郊の田舎村である。医院も教会もレストランも何も無い。そこで起工式兼地鎮祭である。日本なら神主だが、ここでは牧師を呼んでくる。式はといえば、まず地面に三本の長い鉄棒を三角錐状に立て、キャンプ場の炊事場のようなものを作る。その頂点から葡萄酒の壘を結び付けた紐を吊るし、直下にコンクリート板を置く。そこで施主と施工者の代表が鋏で紐を切り、壘を落とす仕掛けだ。壘が落ちて割れ、レッドワインが地上に流れれば、工事の無事が保証されるということらしい。牧師の祈りの後、施主と一緒に挟みを入れた。だが傾きながら落ちた壘は割れず、一度弾んでごろりとコンクリート板の上に寝ただけだった。周りからは失笑である。再度やり直すしかない。二回目、ボリビアの葡萄酒壘は固いのか、

コンクリート板が軟いのか、また割れなかった。周りからは笑いより白けが出てきた。三回目、それでも割れない。そこで私は即座に壇を拾い上げ、コンクリート板に思い切り叩きつけた。見事に壇は砕けて血のような赤葡萄酒は回りに飛び散り、私と牧師にも返り血を浴びせた。万雷の拍手である。その後テントの下での素朴な焼肉パーティーで、地鎮祭兼起工式は無事に終わった。だが工事開始後、四駆の連絡車はピットホールに落ちて大破するし、乗っていた土木屋は怪我をしたから、やはり地の神は飲み足りずにお怒りになったのだろう。不測事態への準備不足と、思い切り叩きつけた私の失敗である。ボリビアのさらに南、チリでは竣工式だった。サンチャゴ市に大型の魚市場を作ったときのこと。例によって式典とその後宴会がある。出席者は政府の漁業省の局長と市役所のお偉方。挨拶のあと施工側から記念品として日本の小物を渡すことにしていた。私が日本から持参したのだが、夫人連まで式に出席するとは予想しなかったので数が足りない。そこで私は「フェミニストなので女性にだけ渡したい」と無理な言い訳をした。局長夫人

が「あなたがフェミニストでよかったわ」と英語で言うてからスペイン語で左右にぶつづつ。式後の反省会で現地スタッフに聞いてみると「日本人は妻を奴隷のように使っているそうだから」とか言ったという。反省どころではない。ここまで来て日本人がバカにされるとは、とても許せないと思った。夜の宴会は中華料理屋の丸テーブルで夫人も同席。私は「日本で妻は女王蜂、夫は女王に貢ぐ働き蜂。家、外、分業でこれが本当のフェミニスト。女性尊重だ」と言ってやった。件の局長夫人はシカゴ大学卒とかでまくし立てるし、皆かれこれ英語を話すから、日英西の三カ国語で喧々諤々の議論となってしまった。その後の保証期間に意地悪されないと気になったが、流石に彼らは割り切りが好い。杞憂だった。日本の役人だったらそうは行かない。だがその後メンテナンスのため残留した若き建築技術者は、事務所のチリ美人に取り込まれ結婚する羽目になったから、彼はこのときの議論を実証すべき生き証人になったわけだ。彼の幸せを祈るばかりだが、これも失敗の一つだろう。以降私は、生半可なカタカナ語は使わないことにしている。

薬品の霧に包まれた工場

玉山和夫

私は一九四一年に工学部を卒業した。このときはすでに戦時体制で、私は割り当てで仕方なく北海道留萌町にあった北海道人造石油（株）に勤めることになった。

人造石油は石油資源の乏しい日本が戦争に備えて急につくることになったので、会社は社員をかき集めていた。

社員は「上下転業、中間新米」と自嘲していたが、技術者不足で新米の大学新卒にも責任ある仕事を任せていた。

その年の十二月に日本は米英と開戦したが、私に与えられた研究テーマでは戦争に貢献する可能性が殆ど無いと考え、空軍が熱望していた高オクタン価航空燃料であるエチルベンゼンを製造する意見書をだした。これが早速採用され、パイロットプラントを設計建設して、運転条件の検討を行った。それと併行して年産三千トンの工場を、私と同期に入社した機械科卒業生と組んで設計した。転業の上司は設計を二人に全く任せきりだった。

私は建設も担当とされ、造船所に発注していた装置類を据付け、配管工事を行った。工場の格好ができたので、会社は工場完成の祝賀式を一九四五年八月十二日に行なった。ところが三日後に日本が無条件降伏した。

敗戦という経験したことのない事態になったので、従業員には軍需工場である人造石油はどうなるかと不安が広がった。そこで、所長は全従業員を集めて話した。

「留萌の事業所は民需を対象にやってゆくから、諸君は現在の仕事を引き続き落ち着いてやってほしい」

私はこの話をまともに聞いて、エチルベンゼン工場はスチロール樹脂の原料として活用されると考え、工場を運転することとした。自分が基礎研究から設計建設までやった工場を是非動かしてみたいと思うのは、技術者として当然の気持ちだった。原材料は総て揃っていて何時でも操業を開始できる状態だった。

そこで部分的なテストを行ってから、五十名の部下と動員できていた学徒を配置につけ、総合試運転を始めた。アルコールからエチレンを作る加熱炉はうまく動いた。エチレンとベンゼンとの縮合反応は、初めは順調の

ようだったが、冷却水をフルに流しても温度が段々上がっていった。そのうちに反応槽内の温度が急に上がり、安全弁から白い気体が激しく吹き出した。温度が上がったので槽内の大量のベンゼンと塩素が沸騰気化したのだ。

見る見るうちに広い建家の中は真っ白になった。ガラス窓で仕切つてある事務室に退避したが、ここにも霧が侵入してきたので居られなくなって屋外に逃げ出し、少し離れたところからみていると、窓などから漏れ出してくる白い霧で大きい建屋がすっぽり包まれてしまった。

街の消防から火事ではないかと問い合わせがあった。六キロも離れた望楼から良く見えたのである。霧には塩素が多く刺激性が強かったが、工場敷地が広がったのと風向きよかったのが幸いして、社外からの苦情はなかった。

夕方、所長に報告に行つたら、原料をどれだけ使つたか聞かれた。

「ベンゼン三トン、アルコール一トンです」

と答えると、所長は機嫌悪く

「もったいないことをしたな」

と言われた。

その時は試運転の失敗を責められているかと思つたが、後になって、所長はアルコールから合成酒を作り、闇で売り、従業員給料を払うと決めておられ、アルコールは出来るだけ温存すべきであつたのを知つた。

所長は従業員を動揺させないために、民需産業に転換すると言つたが、終戦の混乱時では製品の販売の見通しは立たず、法を曲げて闇にたよるほかに方策がなかったのであつた。

私が独善的に試運転を行い、貴重なアルコールを霧散させたのは正に大失敗であつた。

試運転で使つてしまつたアルコールを闇酒にすれば、全従業員の一月分以上の給料が払えたのであつた。

なお原料のアルコールは高純度で、これに水と琥珀酸を加え、櫛の鉋屑をひたして色と香りをつけると、上等な合成酒ができた。よく売れて、一年半ぐらいは資金繰りがついた。しかしこれが国税局の知るところとなり、所長が呼び出されたが、経営者の苦悩に免じてか、処分は軽く済んだ。

007になり損ねた記

細 谷 博

「今日は会わせたい人がいるので、夕方一杯やりながらなんて、たまにはどうですか？」Mのおっちゃんからの電話に大手町ビル地下の鮪屋でと一発で決め、いつもの果てしない残業をぱっと切り上げて会社を飛び出した。

Mのおっちゃんは、実はアメリカのさる政府機関で科学情報を担当する沖縄出身の三世で、私は会社命令で我が社の先端技術の既発表の論文、資料を選び出して供与する役目を長年続けていたが、普段は昼飯をご馳走になりながら資料の解説をしていた。ご馳走といっても、カツ井とか、おごつても鰻丼など、Mの好きなものばかりだったので、その晩は年甲斐もなく浮き浮きとして鮪屋に飛び込んだ。

「会わせたい人というのは、こちらの上司ですよ」と紹介されたのは、Mよりは十分若く、鋭い目つきのインテリ風のアメリカ人で、JJと自己紹介したが、名詞の

裏の英文を見てびっくり仰天。なんと国際的マッチポンプで怖れられているラングレーの組織の人間ではないか。

すると、その部下であるMも、その下部組織ということになる。考えてみれば、米政府派遣スタッフが日本語の名詞しか持っていなかったことに、疑念を抱かなかったのは迂闊であった。Mが予告もなく本国の上司に会わせしたのは、何か深い魂胆があるに違いないと、私の明敏な灰色の脳細胞は動きを早めた。

さては、英語他数カ国語を操り（誤解だが）、世界を股にかけて飛び回り、科学全般に明るく、日本人にしては酒も強く、しかも余程の女でもない限り見向きもしない私を、環太平洋の007として相応しいかどうか見極めに来たとはいえないと気が付いた。

もうそれからは、酒の廻りもあったが、007映画での美女もてのシーンや、カッコよく銃を構えるジェームズ・ボンドの姿が眼先にちらついて、JJの話題がいつしか、私の東欧での知見と直近の動向に集中していると気付いたのは大分あとのことだった。

アメリカと日本だけに行動半径が限られているMに

とって、そのほかの地域の話はいつも新鮮であつたらしく、私も得意になって、印象に残った町や人の話を良くしたが、なかでも、土地も人も音楽も好きなハンガリアは最大の話題であつた。

商売で知り合いとなつた保健省の中心人物、健康保険組合の理事や国際的に活躍するドクター達が話にたびたび登場したが、そのうち、欧州の放射線学会となると必ずと言ってよいほど現れる東独の代表者ドクターGに関する話題に、特に興味を覚えたようであつた。Gとはハンガリア医学学会長の自宅でのパーティーなどもしばしば会つて飲んでいるうちに意気投合し、政治、経済など全般の情勢を度々話したが、Gは西側の文化や情報制度にことのほか興味を示し、私は東側の国民の生活の話に特に関心を持って耳を傾けたものだ。今度はMが私の話に耳を傾け、今や目の前のJJが耳を傾けている。

そのうちにMが、ふと気が付いたようにJJにたずねた。「どうです？ミスター細谷は多能な上に全く目立たない。国際的なエージェントとして申し分ないと思うが」暫くじつと考えていたJJは、にたつと笑つて「それ

はそうだが、首実検をして、最も目立たない人を」と言われたら、百人が百人ミスター細谷を指差す。つまり特徴が大き過ぎ、我々の組織には相応しくない」と言い放つた。

007の夢は一瞬にして煙と消えたが、ベルリンの壁が消えたのも、それからまもなくのことだつた。東独の独裁体制下の告発社会に倦んだ人たちが、大挙雪崩を打つて西側に流れ、もはや壁が無用になつたからであつた。その流れの殆どはハンガリアを通じて行つた。

あのドクターGは東独政府の廻し者、シユタージだつたとの噂もあつたが、彼が東独の民を救つたのかも知れない。



「額縁の御用はありませんか？」

下平 紀代子

華やかな大磯ロングビーチのイメージが強かったためか、その駅周辺の案外閑散とした風景に一瞬戸惑った。

二〇〇六年晩秋、句友たちと吟行に向かった先は大磯。最初に訪れたのは旧島崎藤村邸であった。昭和十六年から二年半余り住んだこの家で、藤村は生涯を閉じている。

簡素だが、広縁や下地窓といった昔の家のつくりは、凛とした風情を感じる。藤村が最も好んだという書斎には、静子夫人の書「明月」が掛けられている。人となりがよく表れたあたたかい字だ。白い花を愛した藤村が縁側から眺めたであろうこじんまりした庭はよく手入れされて、ツワブキやミズヒキなど季節の野草が可愛らしい花をつけていた。

その年の初め、九十九歳で他界した母方の祖父は、若い頃文学を志し、郷里の文豪・島崎藤村に門弟として教示を賜りたいという手紙を出したことがあった。

当然のことながら、祖父の希望は叶わなかったわけだが、「文学に師なしとは私の信条です。（中略）もし君が私達と同じ道を志して進まれるなら万人を師としたまへ。現に生きている人達ばかりでなく死んだ人達をも師としたまへ、（後略）」とかかれた返信―すっかり黄ばんでいた紙片―を、祖父の家に行くたびに見ていた私は、図々しくも、なんだか、かつてここに住んだ主がとても近しい人に思えてならなかった。

その後、上京した祖父は、どのような偶然か、飯倉片町に「島崎春樹」の表札をかけた家を見つけた。神の導きに違いないと、勇気を出して、「御免下さい」と声をかけたところ、奥から出てこられたのは、温厚そうな藤村先生その人ではないか。

慌てた祖父の口から出た言葉は、
「額縁の御用はありませんか？」。

その時、友人のついでで額縁のセールスをしていた祖父は、とっさに身なり相応の言葉しか出せなかったのだ。いつぞやの手紙のお礼、突然尋ねたことへの非礼を詫びるべきところ、こうした対面で終わってしまったことを、

祖父は愧じた。

この一件から、自分の人生経験不足を痛感した祖父は、一生をかけて自分自身を研磨することを誓う。そして、東洋哲学を学び、鍼灸医学の道を志すことになる。時は昭和の初めの頃、一人の青年が経験したひとつの失敗談である。

さて、祖父が他界してから早五年、まさか孫に、この大失敗をこうして披露（暴露？）されるとは想像だにせず、今ごろ、おそらく空の上で苦笑いしていることだろう。私自身の大失敗が書ききれないほど多いからといって、この誌上に、愛すべき祖父のこんな話をまっさきに載せたことに詫びを入れねばなるまい。

ごめんね、おじいちゃん。

逆上がりなんてかんたんだった頃

宇宙はもつと果てしなかった

この大地は宇宙の底であったのか

寝転び見上ぐ満天の星



何でも書こう会

八〇〇字に纏めたエッセイを持ち寄って批評し合う「何でも書こう会」は十五年続いていきます。

昨年は熱海での合宿を含め十五回開催され、発表作品は二七一編になりました。どの作品も日ごろから構想を練り、調べ、見聞し、思い起こして綴られた力作です。

出席者が増えたので、十一月からは前期と後期に分けて二回開催しています。前期、後期とも出席者が十四、十八人とほどよい人数になり、掘り下げた意見交換ができるようになりました。

トイレ休憩も惜しんで五時過ぎまで議論が続く、遠慮ない質問や意見がぶつけられます。テーマが宗教、芸術、政治経済社会、内外の歴史や旅、創作、身の回りのことなど多岐にわたるので、文章作法の意見のほか、作品の内容についても延々と議論が繰り広げられます。濃密な四時間です。

五時過ぎ、積み残した議論を続けようとセンター内のレストランに向かい、さらに近くのソバ屋さんにまで繰りこみます。

大庭定男さんが昨年この会で発表されたエッセイ「八十八年の生涯より（二十五）」の一部を紹介します。

「……数多いクラブ活動の中で私が喜んで出席しているのは『何でも書こう会』である。八〇〇字に纏めた提出作品を通じて、会員の履歴、人生観、家族、交友、趣味などその人についての全部を知ることができる。永年の親友さえ、ここまで深く知ることができない。永年また、ひとつのエッセイを書く作業で、四苦八苦の後に纏め上げた時の喜びは格別である……」

作品の多くは、企業OBペンクラブのホームページ「八〇〇字文学館」に掲載されています。

（プロマネ 大月、大越、志村）

自由テーマ



スポーツ文化

高橋孝藏

スポーツの語源は、ラテン語の *deportare* から来ているといわれている。もともとはある所からある所への移動を意味する言葉であるが、それが転じて「気分を転じさせる、気晴らしをする」という表現となり、綴りも *disport*、*sport* と変化していった。

動物は気晴らしをしない。スポーツをするのは人間だけである。人は何故スポーツに熱中するのだろうか。スポーツをすることで心が満たされるからではないだろうか。体を使って自由に自分を表現できる。あるいは「これだけできた」、「やった」と感じる充実感を味わうことができる。自己表現や充実感が、スポーツが人を惹きつけて離さない大きな要因であろう。

そこでスポーツを文学、音楽、美術、演劇、映画などと同じく自己表現できる、自己実現できる「大衆文化」と位置づけるのが、最近の学者やスポーツ関係者の理解

である。

今ではスポーツをする人口は飛躍的に増えている。「みんなでスポーツ（スポーツ・フォア・オール）」、「生涯スポーツ」の掛け声とともに、プレーする人の裾野が広がった。ジョギングする。草野球に参加する。ゴルフコンペに行く。ジムに通う。泳ぐ。男性だけではない。女性もバレー、卓球、エアロビ、テニスなどが好きだ。子供たちにはサッカー、野球、水泳の教室が人気である。

プレーするだけではない。見るスポーツとしてもさらに大きく伸びた。見る楽しみ方も様々ある。ヤクルトファン、あるいは横浜F・マリノスファンならチャンネルにパラルを振る。熱狂的な阪神ファンなら風船を飛ばし、興奮すれば道頓堀に飛び込むことも厭わない。

オリンピック、サッカーやラグビーのワールド・カップ、野球のワールド・ベースボール・クラシックなどのビッグ・イベントなら、億を超える世界中の人々が観戦する。時間と金に余裕のある人は海外に応援に出かけるが、圧倒的多数はテレビで見る。家で見える人もおれば、外に出て大勢の人と一緒に見る人もいる。お気に入りの

選手と同じユニフォームを着て、スタジアムの大画面を、あるいはスポーツ・バーの小さい画面を見ながら、歓声を挙げ、今まで知り合ったこともない人と一緒に応援し、一体感を味わう。国民が一緒に興奮し、感動し、口惜しがり、喜ぶことができるのは、スポーツをにおいて他にない。スポーツは世界に共通する文化といえよう。

一方では盛り上がらない面もある。バンクーバー冬季オリンピックで、お隣の韓国がメダル十四個を獲得したのに対し、日本のメダル数は五個だった。東京オリンピック招致、サッカー・ワールド・カップ招致に失敗した。しかし、非常に残念だ、口惜しくてたまらないという世論は沸き起こらず、国民の眼は意外に冷めていたのも事実である。

これから続く少子・高齢化社会では日本は活力を失くすのではないかと心配されている。これに対する有効な処方箋の一つにスポーツが考えられないだろうか。

他国と比較すると、もともと日本には強力なスポーツ政策や施策がなく、いつも後塵を拝している。オリンピック、ワールド・カップなどのイベントで国別対抗戦の性

格がますます露骨になってきた以上、国としても打つ手は打たねばなるまい。

同じ文化でも、美術なら美しくなければ存在価値はなく、スポーツは強くなければ尊敬されない。まず、世界の強豪を相手に勝ち抜いていける精鋭を鍛え上げるべく他国より優れたシステムを作らねばならない。同時に多くの人々がスポーツを楽しみ、スポーツを通じて人々が成長するよう、メンタルなサポートも充実したシステムも必要だ。少年・少女時代は勝つための努力を通じて大きく成長するものだ。ところが現実には、少年・少女のスポーツ・クラブでも勝利に固執するあまり、運動神経のすぐれた体力のある子どもだけにしかチャンスは与えられず、普通の子供は見捨てられていくと現場は指摘する。

今の日本のスポーツはメダルもとれねば、若い人々を育てていくシステムも作れないのかと全くながつかりさせられる。

参考文献・『阿部生雄著『近代スポーツマンシップの誕生と

成長』筑波大学出版会、『永井洋一著『スポー

ツは良い子を育てるか』NHK出版』

神は細部に宿るものらしい

廣澤 重穂

もし「座右の銘は？」と聞かれれば、「神は細部に宿る」にしようかと思っています。もともと、いまさら人から聞かれるはずありませんが……。もしもの話です。

すると、次に「何で？」と聞かれるかもしれません。普通、座右の銘といえは、「成せばなる、成さねばならぬ——」といった武士の心構えのようなことを言うべきでしょう。しかし自分の格言は、やはり「神は細部に宿る」にしようと思っています。

それは、私が掌編小説勉強会に参加するようになってからです。書く側にまわっていちばん思ったことは、書き手と読み手は違う、ということです。読み手は余り気にせず、スーッと読みます。一方、書き手は細かいところをああでもない、こうでもないと考え尽くして、書くとうとします。ですから、書き手の意図を、読み手に理解してもらえたととても嬉しいのです。

ではその意図を、どうすれば伝えることができるのか？

それが、神が宿るであろう細部、なのではないかと思うからです。

たまたま、桂離宮に関する本を読みました。

桂離宮の凝った造りは、枚挙にいとまがありません。仲秋の名月に中央の池に最も美しく月が見えるよう設計された月見台、月を意匠した襖の引き手、わずかな落差ながらも奥深い音色を出す鼓の滝、緩く湾曲した古書院の屋根と重厚で鋭角的な白河橋……。

そんななか、特に古書院御輿寄せ前庭の四つの飛石の意匠に驚かされました。

ほぼ正方形をした四つの踏石はL字型に並べられ、御幸道からやって来るお客を玄関に誘っています。ほぼ正方形といったのは、どれも左右が四十五cmですが、縦横が四十三・五cm、四十四cm、四十四・五cm、四十四・五cmなのです。要するに、手前の石が若干短く、奥の石が少づつ長くなる。そのため、奥行き観が醸し出されているのです。

あの広い桂離宮に、どれほどの庭石があることでしよう。そのわずかに四つの石にさえ、心憎いばかりの演出が施されているのです。そこを訪ねる客は、恐らく、ただ四つの石が並んでいるとしか気づかないでしょう。むしろ、それさえも意識しないかもしれません。しかし、無意識のうちに奥行き観を感じているのです。

なるほど造り手は、そこまで思つて（こだわつて）造っているのか……。

話は変わりますが、あのイチロー選手がテレビでインタビューに應えていました。一時間以上に及ぶ長いもので、米大リーグのことや、二百本連続安打を達成した時の苦悩、大リーグを目指す後輩たちへのアドバイスなど、多くのことを語っていました。

そんななか、「オフになつていちばん嬉しいことは？」という質問に、「爪切りで爪が切れることです」と答えていたことが、とても印象に残りました。

というのは、シーズン中、右手の親指と人差し指、中指の三本の爪を、わざわざやすりで削り取つているとのこと。爪切りで切つた指では、送球するときに微妙

な引つ掛かりを感じるため、わざわざやすりを使って削つているというのです。そのため、パチンという音を立てて爪を切る快感を味わえないのだと。だから、〃オフの爪切り〃を待ち望んでいると答えていました。

桂離宮の飛石といい、イチローの爪切りといい、何て細かいことを。他にも、似たような話は、きりがありません。誰もそんな所に気付きはしないし、気にしてなんかいません。そういつてあげたい。

しかし同じことは、書き手と読み手の関係にも言えることかもしれません。

読み手は気付かないし、気にもしていないが、書き手はこだわらないといけないんじゃないかと。

それまでは、〃大局的に〃とか、〃木を見て森を見ない愚〃〃歴史的観点〃などと、〃細部を気にしない〃ことばかり意識してきました。しかし書き手側（創作する側）に立ちたいなら、あえて細かいことを意識し、より詳細に観察することが必要なのではないかと。

なぜなら、〃神は細部に宿る〃らしい、から。

市役所からの手紙

福 本 多佳子

十二月の初旬に岐阜県中津川市役所から一通の封書を受け取った。「何だろう」と思いながら開封してみると、伯父、憲一の生存確認であった。今、話題の高齢者の戸籍確認の手紙だ。地方自治体がこの問題に動いている証拠の封書だと思って興味深かった。

高齢者生存を確認する動きが出てから、「そういえば、アメリカで百二歳で亡くなった伯父の戸籍もそのままかも？」と、気になったことはあったものの、伯父の本籍地は祖父母の郷里、中津川市と推測しているだけだ。

郷里にいる遠縁の人々もここ数年で次々と亡くなり、次世代との付き合いは殆ど無いに等しい。伯父と十六歳も年が離れた母は東京生まれの大阪育ちだったので、祖父母の郷里についての話をするのは殆どなかった。

伯父の娘である従姉の理恵はロングアイランドのアパートで独り暮らしをしていて、せいぜい年に一度の電

話といった付き合いしかないし、母も伯母とは殆ど付き合いがなかった。

戦前の伯父の駐在員時代にニューヨークに生まれ育った従姉は、常に良質のアメリカの服を着て、英語まじりの気取った話し方で目立つ存在だったが、高齢になってとみに人付き合いが悪くなった。彼女が日本領事館に伯父・伯母の死亡届を提出しているとは想像できなかった。

まずは市役所に電話してみることにした。

「直系の方の連絡先がつかめず、姪御さんに手紙を送らせていただきました」と女性の担当者が説明した。

「伯父だけでなく、伯母も百歳を超えてからアメリカで亡くなっています。ところで、その戸籍には従姉の理恵の名前もありますか？」

「理恵さまの籍は昭和二十七年にアメリカ国籍を選択された段階で除籍となっています」

「もう一つお尋ねします。伯母は生前、日本の老人ホームへの入居を考えたことがあります。従姉も一緒に帰国となると、日本国籍再取得が可能かどうかが問題となりました。もし現在八十歳の従姉が日本定住を希望する場

合、彼女の戸籍はどうなるのでしょうか？」

「その場合、理恵さまの日本国籍取得が認められたとしても、新たな戸籍を開設していただく必要があります」
「それは今回の調査で、伯父一家の戸籍が消滅してしまいませんか？」

「いえ、外国籍を取得したことによる除籍なので、もとの戸籍には戻れないのです。新たな戸籍をご本人に開設していただくことになります」

それを聞いた私は「そうか。ということは5年前に私がアメリカで市民権を取得していたら、私も除籍となっていたのかも……うーん、良かった申請しなくて」

自分が気になっていたことを聞いてよかった。

従姉がまだ健在なのに、私たちから伯父夫婦の戸籍抹消を依頼するのは越権行為だ。市役所担当者に従姉の連絡先を教えて連絡をとりあってもらうことにした。

アメリカ人の友達には、私が市民権を取得しないことを不思議に思っている。しかし誰しもそのことによって自分の国籍、すなわち、アイデンティティーを失いたくないという気持ちが残る。ドイツ人の友人も高齢になって

アメリカ人との結婚時に捨てざるを得なかったドイツ国籍の復活を願い、領事館に電話した。「国籍というものは、簡単に捨てたり、取得したりというようなものではない」そう担当者から言われ、「自分から捨てたわけじゃない、選択を強いられたんだ」と反論したが、口論で終わったようだ。

在米日本人の間では「安易に市民権を取得するな。アメリカ国籍を取得したら、日本国籍は自動的に捨てることになる」という声もあれば、「日本政府も暗黙の内に二重国籍を認めていますよ」という声もある。

現代のグローバル化のなかには、実際的にも感情的にも二重国籍という人々が沢山存在するけれど、この問題はこれからも常にグレーゾーンに位置し続けるものなのか？ 戸籍問題からより微妙な国籍問題に思考をめぐらすこととなった。

四十雀が来るまで

吉田 邦彦

昨年の夏、信州の高原にある友人の別荘でベランダに小鳥を呼び寄せているのを見て羨ましく思い、東京に帰ると、以前作ったままになっている小鳥の巣箱を出してみた。これは大工センターで端切れ木材を買ってきて、当事幼稚園児の孫に作ったもの。赤く塗った三角屋根をつけ、小鳥しか入れないような小さな窓を苦心して開け、その窓の前には餌を置いたり、羽根を休めるための「ベランダ」も用意し、我ながら良く出来た巣箱と悦に入っていた。

さて、リビングから遠くない所にくすの木があり、巣箱を針金で吊すのに良い枝があった。掛けてみると食卓から眺めて丁度良い高さになり、小鳥がとまれば良く見える筈であった。

次は、餌にするひまわりの種を一袋買ってきて、巣箱の「ベランダ」にパラパラと置いた。さあ準備万端整っ

た、あとは小鳥がやってくるのを待つだけだ。

結局その日は何も来なかった。翌朝、起きて巣箱を見るとひまわりの種はひとつも無かった。やっぱり来たなと思うと嬉しくて、ひまわりの種をつぎ足した。「さあ、来るぞ」と朝食をしながら眺めていると、案の定小さな雀くらいの頭の黒い小鳥がチョコチョコとくすの木の茂みから飛んできて、あつという間に種をくわえるとまた飛び去っていった。人影を見ると来なくなるかと、部屋の中でデジカメを用意すると、待つまでもなく小鳥がやってきた。黒い頭に頬とお腹の部分は真っ白で、首から黒ネクタイのような線が走っている。背中が薄みどりと茶色の地に先端が白い羽根が円形状に左右に分かれている。尻尾は長くないが、なかなかダンディな代たちである。チッチとさえずるのが心地よく聞こえる。

野鳥の本で調べると、四十雀らしいことが分かった。餌はやりすぎてもいけないと思い、朝起きてから一回だけにすることにした。その後餌やりは私の日課となったのは言うまでもなく、家内と二人の朝食は、彼らと同じペースで取ることとなった。

見ていると四十雀は、つがいであることが多い。たまにメジロもやってくるが、けんかもせず代わりばんこに餌をついばむ。ところがそこへ彼らよりふた周りも大きい鳥がやってきた。

ヒヨドリである。彼は四十雀やメジロを威嚇して追い払ってしまう。まずいなと思ったが、ヒヨドリもこの時期、北海道から温暖な本州に飛来することをテレビでみた記憶がある。ならば、と思い、ミカンの輪切りを別の所へ吊ると、あつという間に平らげてしまった。彼がいなくなると四十雀も安心してやって来る。それにしても何でシジュウカラというのだろうかと思う。

パソコンで調べると、四十雀の名の由来は諸説あるという。まず、雀は小鳥を示し、四十は多数を意味し、たくさん群れるからという説。ジュク、ジュクという鳴き声を発するからとか、四十雀一羽は雀四十羽分の値段だからという説もある。

一方で五十雀という名の小鳥もいることが分かったが、こちらも名の由来がはっきりしない。五十雀は全体がほぼ青味がかったグレー色をしている。昔は四十歳で

初老、五十歳で老人だったので、そこから五十雀と呼んでいたという説。カラは同胞Ⅱはらから、同じ仲間に来来するという。そんな訳で江戸の昔から混同されることも多かったらしい。

むずかしやどれが四十雀五十雀 一茶

どちらにしても、冬になるとカラの仲間は山から里に降りて、一緒に仲良く群れを作って森や林の中を飛び回り、餌を求めて家の周りにも出現するようになったと、自然観察家の河井大輔さんは書いている。今のうちに栄養をつけておけよと言いながら、しばしの交流である。



カーバイド技術者の歩んだ道

中川路 明

私は、一九五二年ダイセルに入社した。セルロイドで世界市場に勇飛し、製造業三十社の中にあつた。ただその発火性により白木屋火災で死亡者を出す悲劇を招き、当社は樹脂の不燃化に全力を傾け、硝酸に代わる酢酸を使う酢酸纖維素の開発に成功した。新潟県新井に試験工場設置、戦時に鮮満に工場進出したが、敗戦で失つた。

一九三三年、私は神戸の甲南幼稚園に入った。甲南は創立時英国に学び、社会貢献の人材教育に寄与するラグビーを校技と定めた。私も小学生から始めた。敗戦一ヶ月後、芋畑のグラウンドを復活し、高校時代インターハイで優勝を争つた。正月に大学何処受けるかと友に聞かれ、「勿論京大や」と、即答。「もう遅いで」と失笑された。当時、ラグビーの強い国立大学は京大しかなく、その年は学制改革で旧制と新制の二回の受験機会があり、何としても徹夜勉強を開始した。志望した旧制工学部燃料

化学科に合格、幸運に感謝、拳を握つた。

入学式の午後、グラウンドのラグビー部室に招集され、先輩、他校球友と握手を交わした。まずキャプテンが、「おめでとう。君たちは勉強もしようと思つていらしいが、京大でラグビーも勉強もというのは贅沢だ。勉強は卒業してから出来る。来週から十五時に練習開始」。

在学中、福井（謙）教授室に伺うと、タイガー計算機を操作中。「先生、そんなお手伝いしますから実験教えて下さい」とお願いした。「これでは腕が強くならん。鉄亜鈴が善いよ」。恐縮して引き下がる優しい教室だった。

不況で就職難。出来れば関西でラグビーを続けたい。ダイセルが姫路で米国と合弁計画との極秘情報を得た。合弁事業にはスポーツマン大歓迎との先方の意向が分かり、諸手を挙げた。だが、十月末、合弁無期延期の青天の霹靂だ。新井工場の有機部配属を考える。よし勉強しようと思つた。翌四月、配属先はカーバイド部が変わつてた。予定者は酒も飲めないし緊急重要任務が出来たとの説明だ。企業は変化する。期待されたと納得した。酢酸は、カーバイドからアセチレン経由で製造するア

セチレン化学の華だ。日本の背骨の山々に多い石灰石をコークスで焼いて生石灰とし、更にコークスと混ぜ電気炉で一酸化炭素ガスを副生しながらカーバイドにする。

昔、有機化合物を天然品から抽出し得ていたので、有機アセチレン化学は人類の叡智であった。

敗戦後の復興を目指すのが国は、すべて国産の原材料、豊富な水力発電、優秀な労働力で、肥料・医薬・合成樹脂などを低廉に確保できるカーバイド産業育成を最大課題と指定した。しかし自動車が発展、ガソリンと副生するナフサが原料の石油化学工業が、量・価格・輸送に勝り、カーバイド産業の前途は暗かった。カーバイド業界も電気炉の密閉化による副生ガスの回収で、競争力を維持せんと大手二社は外国技術を導入した。新井工場の電気炉の密閉化は課題山積だった。

配属すぐ、鬼課長が課員に「我々の技術で国産化を目指そう。日本の産業界は支援してくれる。年末までに技術調査を終え、計画書を提案する。中川路は現場を覚え、装置設計を担当しろ」。問答無用の命令だった。先輩たちは既に密閉化を目指していた。基本案は、第一の人力

操作の解消は重量三百トンの炉体を微速で三十度往復回転（戦艦大和砲塔技術）、第二の電熱制御は電圧調整の付加（この東芝新変圧器はバリ伝熱工業会賞）、第三の超耐熱機器は日本ステンレスと関係各社の支援で開発に成算があった。残る問題は我々の創意工夫の三千枚のポンチ絵の実現で、機械設計部の応援で予定通り提案できた。後は開放炉でも製品は出来るのに、密閉化技術の莫大な建設費が問題となり、成否は経営会議次第だった。

その前日、技術専務は我々四人を呼び、金の知恵の輪を渡し、一時間で解けと言った。無理をすれば伸びる金、皆脂汗で格闘。「よし分かった。報告も了解した。後はカネの問題、任せておけ」（専務は我々の技術、氣力を確信、自己の出資を決意した由、後日聴き感涙を流した）。

四年計画の密閉炉計画が決済され、私の五年間無休は始まった。労基法は守るが、出退勤自由の特例が認められた。真夏も雪の日も走り続けた。家を守った家内、寂しさに耐えた子、親切だった社宅の隣人、皆のお蔭で完成。家内、子供も実家に帰した未知の試運転も大成功し、放出煙突に着火。新聞一面に『上越に科学の火は灯る』。

我が栄光(?)のゴルフ史

阿部 洋己

「ハンディはいくつになりたいんだ」プロのこの一言から、思いもかけなかった我がゴルフ人生の汗と涙の物語が始まった。今から二十七年前の四十六才の時、当時一世を風靡したレッスンプロK氏の門を叩くことになった。

レッスン初日、七番アイアンで三発打たされて、すぐにそう聞かれたのだ。「せめてハンディ十くらいには、出来ればシングルになりたい」「そうかい、それなら一年間チョコレートを支払い続ける覚悟はあるか？」とつさにその意味が分からないまま、レッスンは始まった。

その頃一ラウンド九十から九十五くらいのスコアで廻っていたので、たぶんハンディは二十前後の実力であったろう。思うにプロの診立ては、小生の今のスウィングでは到底覚ええないが、ポテンシャルはあると見たのだろう。それからは彼の熱心な指導のもと、スウィングの大改造に取りかかった。三カ月経ったところチョコレ

トの意味を嫌と云う程味わうことになる。

習い始めて最初のコンペでなんと一一五も叩き、全員にチョコレートをしこたま召し上げられた。あまりのひどさに前のフォームに戻して打つが、どちら付かずで、余計始末が悪い。どうにもならないのだ。もう自分には戻る道はないと腹を据えた。そこへ師匠は追い打ちをかける。「阿部さん、あなたは練習熱心だし、今までにトラック一台分くらいのボールは打っただろう。覚えこんだ悪い癖を直すには、その三倍は打たないと身体が正しく覚えないうから、今からトラック三台は打たないとね」

覚悟が出来、一層練習にも身が入った。だが、忙しさにかまけて復習が足りない時は、すぐに見破られてしまう。いく人もの生徒を教えているのにどうして判るのか。プロの目は恐ろしい。一年経って、どうにか形が出来てきた頃、プロの一言。「親の仇を討つ訳じゃないんだから、そんなに力を入れなくていいんだ」。事実一六〇センチに満たない細身の老プロの打ったボールは遥か二〇〇ヤード向こうのネットに突き刺さる。

一ヶ月に一度のレッスンで、それを復習して次に臨む。

その繰り返しが続く。何とか目鼻が付いたかと思われる時に転勤になり、師匠との三年に及ぶ格闘の日々を終えた。しかしその甲斐あって、目標であったシングルの仲間入りが出来、会社の中でもゴルフでは一目置かれる存在になった。

概して趣味でもスポーツでも、ある一定以上のレベルになると尊敬されることが多い。だが、ゴルフだけは「あいつは仕事を真面目にしているのか。ゴルフが好きだからな」とやっかみ半分に揶揄されるのだけは困った。

今から考えると五十才から六十五才までが全盛期であつたように思う。後半は社長時代と時期が重なり、役得でプロアマにも随分と招待されて、有名プロとのラウンドを楽しませてもらった。招待されるのは年配の役職者が大半であるので、同伴してくれたプロからは、こんなに上手いアマチュアは初めて、と良くお世辞を言われた。また日本経済新聞社主催の社会人実業団ゴルフ大会に腕利きの社員と共に参加したのも思い出だ。実業団で会社の名前を宣伝出来たと喜んでゐる。

しかしである。最近の低迷ぶりは目を覆いたくなるほ

どの体たらくだ。その傾向は六十五才くらいからあつたように思うが、今までの貯金で何とかなつた。だが七十才を過ぎてからはどうにもならない。ドライバーがまるで飛ばない。アイアンもグリーンを捉えられない。自分では感じない身体之衰えと練習不足の付けが来た。

目下、健康のためにゴルフを楽しめれば良いと考えるか、一念発起してもう一度プロについて習い直すか、丁度その分岐点に立っている。ゴルフは歳を重ねても出来るスポーツの典型だと思う。現にシニアの大会で活躍するプロがその代表だ。一時腰痛で半年間好きなゴルフを休まざるを得なかった。ゴルフは小指一本痛くても出来ない。五体満足の身体とサムマナーに恵まれてこそだ。しかし巷間、男性のゴルフ人生は平均七十四才だそうだ。後一年で到達だ。やはりプロにつこう。自分が教えている経営塾の塾生にいつも言っているではないか。自分のことは分らない。だからプロにつけと。趣味ではプロにつくの、ましてや仕事ではどうしてプロにつかないのか、と論しているのにだ。やるぞ、まだまだ歳に負けてはいられない。

『スイングジャーナル誌』の休刊に思う

大越 浩平

JAZZ専門誌『スイングジャーナル』（略称SJ誌）は1947年に創刊され、昨年七月号で六十三年の歴史をもって休刊した。同誌は、世界のジャズの潮流と日本人演者を紹介し、ジャズを日本文化に根付かせる役割を果たした。

私が購読し始めた一九五〇年代、岩浪洋三氏が編集に携わり、活気に満ち充実していた。一九五五年、同誌に発表された大橋巨泉氏の「ジャズヴォーカルの鑑賞」は、歌手の独創性と個性を重視し、加えて高度な技巧と洗練度を歌手に求めた衝撃的な一文だった。以降、氏は歌手評論の第一人者となるが、その後評論活動から去る。

一九五八年「モダン・ジャズファンの手帳」で植草甚一氏がSJ誌にデビューした。外国文学、映画、絵画等に造詣が深く、評論は追従する者を許さず、読者の圧倒的な支持を受けた。

そのころジャズファンは、ジャズ喫茶店毎に仲間を作り、入手したLPをお互いに鑑賞し、曲や演奏者を評価して、ジャズ談義を楽しんでいた。米国のジャズ専門誌『ダウンビート』では、ジャズプレイヤーに曲の演者を知らせずに音楽を聴かせて、演者を当てさせ、感想を求める「目かくしテスト」という記事があり、曲の解釈が我々とは異なったりして面白かった。

我々も新宿や渋谷で仲間とそんな遊びを楽しんでいた。大阪の喫茶店「パンビ」のレコード係をしていた耳の良い男の噂は、東京にも届いていた。その男が一九六一年上京した。中平穂積氏が新宿二幸裏に「DIG」を開店した年だ。我々を知っていたのか、渋谷の喫茶店「デュエット」の目かくし大会に参加させて欲しいと申し込まれた。仲間と緊張して演者と曲目の選定を行った。曲の選定には暗黙のルールがある。聴き手はその演者を知っていること、演奏は名演であることだ。

当時は新譜情報も乏しく、一九五八年四月のSJ誌に岩浪洋三氏の海外LP紹介がやっと始まったくらいだ。LPの収集は困難で、もっぱら中古LP店を巡り、えさ

箱といわれたLPを入れてあるダンボールに手と頭を突っ込んで探し回っていた。新譜は高価で手が届かない。

いわば東京と大阪の対抗戦が始まった。お互いの曲目を聴き合い、順調に演者を当て、東京勢がホツとしたところで、大阪の男はベースプレイヤーを当てさせる最後のLPをかけた。

難問だ。巧い演者だが、個性が絞れない。消去法で推測する。ポール・チェンバースより音に粘りがある。サム・ジョーンズよりフレイズと音色が良い。白人演者、レイ・ブラウン、パーシー・ヒース、ロン・カーター、チャーリー・ミンガスとも異なる。幅広い演奏のベテラン、オスカー・ペティフォードと答えた。

正解を聞いて東京勢は言葉を失った。演者はダグ・ワトキンス。新進気鋭の演者で注目していたが、アート・ブレイキーやソニー・ロリンズ等のサイドメンバーで、聴いていたLPは四、五枚だ。取り出したのは彼のリーダーアルバム「ワトキンス アット・ラージ」。トランジョン盤、超マイナーレーベルだ。男の名は児山紀芳氏。そんなレコードは見たことも聴いたこともなかった。

目くしテスト仲間の常連に、とても耳の良いかわいい女性がいた。仲間は皆、妹のように思ってた。大切にしていた。そのうちとんでもない話が飛び込んできた。大切な妹が児山氏と恋仲だと言う。浪速男に東女を持っていたってしまった。東京勢は更に打ちのめされた。

その後、児山氏は、S J誌の編集長を延べ十七年務めた。J A Z Zの新しい潮流を積極的に評価した氏の前向きな評論には好感が持てた。氏はS J誌を離れ、米国でジャズの優れた未発表音源を多数発掘発表し、世界に通用するジャズ・ジャーナリストとして今も活躍している。

昨年、某雑誌で児山夫妻の写真を偶然見た。奥様があの「妹」だったので安堵し、S J誌の休刊に五十年前を思い出したことが、本文を書く動機となった。



「悠遊」という言葉

牛 坊 貞 夫

企業OBベンクラブの年刊同人誌は「悠遊」というが、私は実はこの名称に少し落ち着かないものを感じている。それはおそらくこの言葉を私が知らず、また国語辞典にも載っていない言葉だからであろう。

手元の国語辞典のほか、図書館で小学館の日本国語大辞典ほか何種類かの大きな辞典にあたってみても悠悠、悠然、悠久、悠遠、悠閑などはあっても、「悠遊」は載っていない。白川博士のものや他の漢字字典にもこの言葉はなさそうである。広辞苑ほかには「優遊」という言葉があつて、これは「悠悠」と同じ意味である。「悠遊」は会員のどなたかが「遊び心」で作った造語なのだろうか。

ところが、つい最近私はある本のなかでこの「悠遊」が実際に使われている場面に出会った。その本というの

が何と著名な国語学者で、何冊もの国語辞典にも関係されている金田一京助博士の書かれたものである。私などが「落ち着かない」「気になる」と言っても始まらない。不思議なのは博士の監修された辞書にも載っていないことだが、実際に使われているのだから、立派な日本語なのだろう。その本は博士の「石川啄木」という本であり、以下のように使われている。

「宿泊料のことは心配なく、この序にゆっくり仙台を見て行き給えなどというような土井（晩翠）教授のお言葉に、すつかりのんびりとなつて悠遊していたのではありませんか」

盛岡で啄木の結婚式を挙げるため、花嫁の節子さんは勿論、媒酌人や関係者が首を長くして待っているが、当の啄木が一向に現れない。それまでもう何回も日延べをしているので、やむなく啄木抜きで結婚式を行ったというエピソードを紹介しているところである。啄木はこのとき、どうしたものか東京からの汽車を仙台で途中下

車し、悠々と遊んでいたのである。

上の部分が書かれたのは昭和九年であるが、当時こういう言い方が普通にされていたのだろうか。或いは、ひょっとして「悠遊」が中国語で、明治以来の文筆家などがさかんに中国語をそのまま使った、そういうものの一つなのかも知れない。例えば啄木は「こんな生活はいやだ」という「こんな生活」を「這麼生活」と書き「こんな生活」と読ませている。発音も中国語でしたかどうかはともかく、書き言葉として中国語をまじえるのが流行だったように思われる。

「悠遊」を中国語の辞書でも探してみた。日本の普通の中日辞書にはない。中国の代表的な「新華詞典」にも載っていない。「辞海」という大きな漢字辞典の「悠」のところを見ても、この言葉は出てこない。これはやはり日本語で、今はあまり使うことのなくなった言葉なのだろうと思うことにした。

が、諦めが悪いというか、これが最後と思いつつ「新

華詞典」と同じ発行元である商務印書館の「現代漢語詞典」を見たところ、何と「悠游」があるではないか。日本では「遊」だが、中国では普通はこの字を使わず「游」である。まさしく「悠遊」である。「従容としたさま、行動、態度」などの説明である。悠揚と同じようなことであろう。

やはり中国語だったのだ。金田一博士の文章とこの「現代漢語詞典」とで、私の長い間のもやもやが晴れることとなった。

それにしても、悠々とした気持ちで文章を書く人の集まりである企業OBペンクラブの同人誌にいかにもふさわしい名前と改めて感心し、またこれまでのように「悠」が先だったか、「遊」が前に来るのだったかなどと、一々確かめることのないよう、しっかり胸に刻み込むことにした。

(註) その後、大正七年発行のある本の中で、「優游として名状すべきことなし」「口碑に伝えられるが如き超越味や悠游味も」というような用例も見つけた。

男性（おとこ）の宿命

中村 晃也

「中村さん、六十歳では早すぎますよ」と検査結果を見た医者が言った。前夜遅くに閉尿症状で駆け込んだ新宿のある泌尿器科の病院である。二、三年前から排尿に時間がかかり、残尿感が払拭できずにいた。トイレに行く頻度が増え、寒い時期のゴルフ行では渋滞した高速道路で運転中に尿意を催し困ったこともあった。会社でも会議の終わる頃になると必ずといっていいほど尿意を催し、トイレから帰ってから最後の結論を下すケースが増えていた。長い会議の際には部下から「そろそろトイレに行って結論を考えて下さい」とからかわれる始末だった。

ある時、取引先の社長との会食で、涼しくなってきたので、とビールから日本酒に切り替えた途端、トイレにいても尿が出なくなってしまった。その後、カラオケに行ったが、自分の歌う順番以外はトイレに籠りつきりだった。帰宅後も、一旦は一晚中トイレに座っていよう

と覚悟を決めたが、『家庭の医学』という本を見ると尿毒症に注意との記載があり、夜中にタクシーを飛ばし、泌尿器科の病院へ駆け込んだ。そこは東京女子医大の分院で、宿直の先生はインターン明けの若い女医だった。尿道に突っ込まれたカテーテルの先が膀胱に達すると激痛とともに溜まった尿が迸った。洗面器半分ほどになった尿を見て、明日一番に外来で来るように厳命されたのだった。

病名は前立腺肥大症、癌の気配もあるという。前立腺とは精子を運搬する輸液の供給源のようなものだという。「これからも酒を飲むなら、閉尿を避けるため手術をして尿道を広げるしかありません」と言われ、その場で手術を決意した。会社では秘書に、手術のため一週間ほど休暇をとること、自慢できる部位ではないので、社外秘とすることを申し渡した。秘書は前立腺と甲状腺の違いが判らず、説明に苦労した。

手術室にはデビューしたばかりのモーニング娘の唄が流れていた。「モーツアルトもありますよ」と看護婦は言ったが、麻酔で直ぐに音楽も聞こえなくなった。手術

の翌日からは歩いてもういと言われた。ただ急所に排尿用のカテーテルが突き刺さっている状態では、歩くのもままならず、カテーテルを動かすと激痛が走った。

一週間で退院すると、同じ悩みを持つ業界の知り合いから質問攻めにあった。そしてみな手術患者になった。

前立腺癌の血液指標はPSAといつて通常の数値は三〜四の範囲だそうだが、私の場合は手術前が十五、手術直後は三十八あった。退院間近になっても六、七くらいで、このレベルでは癌を疑わざるを得ないという。

そこで生体検査をすることになった。背骨の真下に当たる超過敏な部分に太い針を刺し、四箇所を細胞採取して、癌細胞の有無を調べるのである。血管と神経が集中交錯している部分にブスツと針を刺された時は絶叫した。それでも癌細胞は見つからなかった。

退院後も定期的に測ったPSAの値は下がらない。三年後に、東京女子医大本院に名医が赴任したので診てもらえ、との紹介状付の手紙がきた。待合室で長時間過ごした後やっと名医に会えたが、そこでも同じようなテストの繰り返しであった。ある時ちょっと協力して欲しい

と、普通の水洗トイレのような椅子に座らされた。と急に、椅子全体が後ろに倒れ両足を上げたまま仰臥した形になり、そのまま椅子は回転して尻の部分だけがカーテンの向こう側に出るという、はしたない格好になった。途端に、「失礼します」の声と共に代わるがわる医学生のもものと思われる指が肛門に差し込まれた。屈辱的な仕打ちにあったが抗議もママならず涙をのんだ。

その名医によると「前回の手術では前立腺はとり切れてなく、全摘をすれば癌になる心配は無くなる」とのことであった。「但し、今度の手術をすると体外ではなく膀胱内に射精されるようになるので子供はできなくなります。精子は尿と一緒に排出されます。精子の混じった尿は泡立つのですぐ判ります」と言われ、泡を食った。

退院時に、長い間抱いていた疑問を先生にぶつけた。

「先生、前立腺肥大になる原因は、セックスが激しいとなるのですか、それとも少ないとなるのですか」
先生はニコリともせずこう答えた。

「中村さん、それはあなた自身が一番よくご存知でしょう」

お見それしました

小寺 裕子

結婚する前、主人から、義母はしっかり者、義父はおつとりタイプとだけ聞かされていたので、私の頭の中ではすっかりそのような夫婦像ができてしまっていた。

しかも『水戸黄門』が好きだと聞いていたので、初めて会った義父の落ち着いた知的な笑顔は意外だった。当時六十を越えたばかりであったが、義父はすでに退職していた。畑をやりたいからと郊外に落ち着き、庭には花や野菜と広い芝がある。

私は実家の父が仕事中毒だったので、お義父さんはのんびりやだから、退職後はゆっくりしているのだと思っていた。

その後、義父は友人からの依頼で、玉川大学で会計を教えるようになった。とても楽しそうに、

「学生は勉強しないけど、会ってもきちんと挨拶してかわいいよ」

と言っていた。

そんな人の良い、のんびりしている義父のすごさが年月とともに私にもわかるようになった。義父は苦勞して二年遅れで中学に進学したので、人生を達観している。

我が家の長男が、会社を辞めてコーチになりたい、と言いつ出した時も、義父は、

「若いのだから健康さえあれば何とでもなる」

と背中を押してくれた。私も義父がそう言うのなら、と息子を応援する気になった。

次女が二、三歳の頃、知的障害があることが明らかに、私が落ち込んでいた時も、

「純ちゃんが一番裕子さんのことを手伝ったり、役に立つようになるよ」

と言ってくれた。今まさにそうになっているが、当時は誰がこうなることを予想できただろう。

義父は学徒出陣の直後に捕虜となり、シベリアに抑留された。船に乗せられる時には日本に帰すと言われたが、月の見える方角から船が北へ向かっていると解り、やはり到着してみるとシベリアだったそうだ。

抑留された時のことを訊ねると、

「中学の時に共産黨員になったYというのがいてね、同じ収容所だったんだ。そいつがソ連側とのパイプ役でね、いろいろよくしてくれた」

とのことだった。しかし最近ほ、

「中隊長のKは、悪い奴だった。中隊長だからまず食事を自分のところに持ってこさせ、肉とか良いところ取りをするし、兵卒の分まで食べてしまう。師範学校や中学で召集された十六歳くらいの食べ盛りの兵隊が一番かわいそうだったよ。ほとんどまともな物が食えない。Kは後にスキー連盟の役員などやっていたが、金を横領したと新聞で見たよ」

と、つらそうに言っていた。

「とにかく関東軍というのはひどい軍隊だった。バカな戦争をやって、若い人を死なせ、家族を引き裂いた。その責任はきちんとしていないね。僕は天皇にも責任はあると思う」

と、とても硬派な意見だ。

去年、長女が結婚祝いをした日は、義父の九十四歳の

誕生日でもあったが、

「今日は僕の人生でも最良の日です。（中略）彩ちゃんにはたくさん遊んでももらいました。小さい頃プールに行くとき、うまく泳げるまで帰らない、と言うので困りました。帰りはよくおんぶしました。そんな頑張り屋さんだから何も心配してません」

と素晴らしい挨拶をしてくれた。

義父の家は近所で一番みずばらしい。四十年前のままである。暮らしもとても真似ができない質素なものだ。しかし義父が手入れている芝生は、真冬に寝転がってもぽかぽかと暖かい。そして義父の作る大根、小松菜、トマト、きゅうりなどは天下一品だ。お金では買えない贅沢をしていると思う。

そんな義父の名前を二回ほど一橋大学の同窓誌で見つけた。二回とも百万円を寄付したという内容だった。

義父には言えないが、「のんびりしている、なんて思っ
ていてお見せしました。一本芯が通っていて、しかも
ニコニコしているあなたには脱帽、感謝です」

中山道を選んだ和宮降嫁

清水 勝

旧東海道、旧甲州街道を歩き終え、今回チャレンジしたのは旧中山道である。最終回となる二月十九日には京都三条大橋に到着し、祇園・花見小路で完踏祝いをささやかにした。

中山道は山道を歩くため峠が多く、難所である碓氷峠・和田峠・鳥居峠を始め十数か所の峠があり、近代装備で且つ道が整えられている現代の我々ですら難儀した。こんな厳しい道を皇女和宮は徳川家に嫁ぐために二八〇〇名も引き連れて東国へ下向したのは正に驚きである。

今年はこの和宮降嫁から百五十年を迎える。一八五八年井伊直弼は勅許を得ないまま日米修好通商条約を締結したことから、尊王攘夷論が噴き出した。とりわけ孝明天皇は激怒し、朝廷と幕府との間に緊張感が生まれた。幕府は朝廷との融和を図るため、將軍家と天皇家が親族

になることで関係を改善しようと考えた。

そこで選ばれたのが孝明天皇の妹で、当時十六歳の和宮であった。この間、いろんなことがあったが、和宮は「天下泰平のため、まことにいいいやの事、余儀なく御うけ申し上げ候事におわしまし候」と答えた。

一八六一年十月二十日（新暦では十一月下旬）に和宮は、岩倉具視、庭田嗣子らの公卿、女官ら本隊一七〇〇名のほか総勢二八〇〇名の未曾有の大行列とともに中山道を歩み出した。なぜ中山道なのか。当初、下向の道筋は素直に東海道としていたが、諸般の事情から中山道が選ばれた。諸般の事情とは……

一 警備上の理由Ⅱ 尊皇攘夷派が和宮を道中で襲撃するという噂があったことから、それを避けるために狭い山道で、警備のしやすい中山道を選んだ。

二 東海道は河川が多く、川止めによる行程の狂いを恐れた。

三 和宮の大行列の長さは数十キロにもおよび、通過するのに二、三日間も掛かるため、往來の激しい東海道では、通行止めをするには影響が大きすぎる。

四 各宿場へのお達しには、こまごました禁止令が下されており、それを行うには人口の少ない中山道の方が適している。

五 毎年、朝廷は例幣使を日光に遣わしていたが、その往路は中山道・例幣使街道を使っており、公家には馴染みのある道であったため、抵抗が無かった。

六 確かに公家の姫君が江戸へ下った前例に則ったのかもしれない。

・一七三一年 比宮↓九代將軍家重

・一八〇四年 樂宮↓十二代將軍家慶 等五人が利用

七 東海道には薩埵峠さつたがあり、婚礼には縁起が悪い。中山道にも「離山」(軽井沢宿)という婚礼には馴染まない山があるため、「子持山」に変更されている。また追分宿については名前の変更は無かったが分かれる

Ⅱ 離別に繋がるとして、宿泊を避けている。さらに板橋宿には「縁切榎」があるため、迂回路を進んだとある。

八 海路でもいいのではないかと思うが、当時は諸外国の船が何隻も来ており、その襲撃も恐れた。

九 いまひとつは、なぜ下諏訪宿から徳川の道とされる

甲州街道を利用しなかったのかである。宇治採茶使は甲州街道を利用したのに……。下諏訪宿から江戸までは距離はより短いが、街道沿線の整備状況が悪かったためか、天下に公武合体を知らしめるには物足りないと考えたのかも知れない。

これらの理由により中山道が選ばれたのだろう。

和宮は輿に乗っているとはいえ、冬の訪れ時期に中山道五七三キロを二十五日間掛けて江戸まで行ったというのは大変なことだと、今回の街道歩きで実感した。

また、各地で和宮の心情を表した歌が詠まれている。

旅衣ぬれまさりけり渡りゆく

心も細き木曾のかけはし (於・木曾の棧)

我らの歌

「旅姿三人揃って京に着き

心満たされ祇園酔い」

一 民族の滅亡

新 山 章一郎

「大家の倒れんとするや、一木を以つてこれを支えることあたわず」。歌舞伎『桐一葉』の舞台、片桐勝元の名台詞である。古来、幾多の国家、民族が地球上に現れ、栄えそして滅んでいった。今の日本もそれらの歴史上の国家の如く一時期の奇跡的繁栄の後、急速に衰退の道を辿っているように私には思われてならない。

まず近年における日本国の指導者たちの統治能力の衰退、資質の劣化だ。卑近な例をとればあの民主党政権の体たらくは余りにもお粗末だ。自ら「愚かな政治家」と認め、「稚拙ではあるけど」と弁明し、他国のメディアからは「不必要に不器用」とこき下ろされるような国の指導者たちの続出はその民族の衰退を象徴するものだ。自民党だって末期は三人の首相が相次いで政権を投げ出した。みな国民の目にも明らかに無能だった。一党の内

閣のみならず、複数の政党の多数の内閣が、連続してこのような失態をさらけ出すのはあまり例がない。そのような政治家しか国の指導者として選出できないのは、正にその民族の活力の衰退を示している。

国民だって衰えきっている。屈辱外交などと政府を責めるけど、自分たちではろくなデモ一つ起こすわけでもない。これで一人でも海上保安官や自衛官が死んだり傷ついたりすれば、相手国を非難するのではなくて、ここぞとばかり自国政府の責任を追求する。自分たちの国土を体を張って護るという気概なんか全く他人事。これでは政府だって何も出来ない。一方では、何かというと市民から死者が出るような激しい示威運動をして強い意志を示す国民の力をバックに、少しくらい自国の民を殺しても、自国の艦船を二、三隻沈めてもかまわないという国を相手では、最初から「勝負あった」だ。

一般国民のレベルにおいても日本民族は衰退の一途を辿っている。殆んどすべての分野で日本の国際ランキン

グは落ちるばかりだ。国内のいろいろな社会現象においても、衰退期に入った国の症状が顕著だ。子供を育てる困難さを理由に、子を持たないことを選択したり、何かと理屈をつけて結婚すらしようとしないうなど、自らの子孫を残し、繁栄させようとする意欲、即ちその民族を維持しようとする生物としての本能すら衰えている。

個々の人々の考え方でも、その国、民族の行く末を担う若者たちに何かと内向き、後ろ向きな考え方が目立つ。困難に打ち勝ち、成功発展しようとか、成功するかどうかわからないがとにかく挑戦してみようとかいう覇氣を持った若者が少ない。戦後の復興期にあつてはポストンバッグに商品を詰め込み、人も言葉も知らない世界の果てにまで日本製品を売りまくった若者が大勢いた。自分に与えられた仕事に見栄も体裁もなくぶつかっていった。今、大卒の就職内定率は六十九%（去年十二月現在）しかないという。しかし求人倍率は一二八倍（同）、選り好みさえしなければ大卒全員が就職しておつりが来るわけだ。ところが彼らは絶対潰れそうもない大企業で一

生食いっぱぐれのないところばかり狙う。しかも三Kでない仕事しか望まない。とにかく彼らは楽な人生しか志向しない。かつては多くの若者が自分の好きな仕事に食らいつき、与えられた職業の中に自分のアイデンティティーを見出していった。今は、自分の天職しか求めず、中には何をやりたいのかさえ分からないまま、三十歳、四十歳になるまでパートやニートで生活保護すれすれの日々を送り、無駄に貴重な青春を費やしている。

民族として、国として壊れつつある現象は他にもいろいろ挙げられる。身勝手な自分の都合だけで人を殺す。無縁社会、孤族社会などいわれるように利己的な自分中心で、他とは一切関わらない人々。海外に暮らした人々が、日本に帰ってきて世の中の冷たさを知ったという。今の日本人には、同じ国に住む同胞とか、同じ民族の一員というような、国としてまたは民族としての連帯感などは余りないようだ。やはり日本は国として、民族として壊滅しかかっているのではないか。

想い出の旅

濱 田

優^{ゆたか}

記憶の中にいつまでも色褪せない風景がある。

昔上高地で目にした、白い幹を赤い小枝で装ったケシウヤナギの群生が、梓川の川辺を鮮やかに彩っている景色だ。自然が織りなす見事な画趣に私たちは感嘆し、しばしその風情に浸った。

ちなみに、ケシウヤナギは氷河期の遺物で日本ではこの辺りと北海道の十勝川流域に隔離分離しているだけと聞く。赤い小枝が楽しめるのは青葉が茂らないうちだ。二十年ほど前の五月上旬、会社の先輩樋口さんと正宗さんが、敬愛する大先輩のリンパク（林博）さんを誘い出し、私がお供をして四人で上高地と安曇野を訪ねたときのことである。

その時、リンパクさんは古希を超えて二、三年、すでに会社を退いておられた。両先輩は彼より十数年下、まだ現役のバリバリだった。

この旅は、花追い人のリンパクさんが悦ぶ花紀行の趣もある。高地を下りた安曇野のリング園では、リングの花盛りに出会った。真っ赤なリングをたわなに実らせた秋の光景は見たことがあっても、こんなに沢山のリングの花を目にするのははじめてだった。蕾は濃いピンクだが、咲いた花は白くて可愛らしい。リングがバラ科に属するのもうなずける。リング園で作業をしていたオバサンが私たちを招き入れて親切に相手をしてくれた。

東京と信州では春の花の開花期がずれ、花暦が異なる。子どもころ夢中で聞いたラジオドラマ「鐘の鳴る丘」ゆかりの地の辺りでは、スイセン、ウメ、レンギョウなどの東京なら早春の花々が、サクラ、シャクナゲ、ユリなどと共に咲いている。東京育ちの私の目には珍しかったけれど、北海道出のリンパクさんは故郷では見慣れた光景だそうだ。

宿は穂高温泉の割烹旅館「みさと」にとった。

リンパクさんは会社で営業畑の核を成した人であり、先輩たちは技術系。所属は異なっても彼の人柄に惹かれ、

かねてから一度ゆっくりリンパクさんと語り合いたいと望んでいた。

彼を慕う人は直属の部下ばかりでなく、縦に横に幅が広い。少しも偉ぶらず、第一線で働く人たちの話をよく聞かから若い人にも人気があった。

とはいえ仕事には厳しく、口先ではお客第一といいなから上役の顔色を伺うことの甚だしい者は役職に関係なく相手にしなかった。彼の視線は社内の足許になく、外の先の方に向けられていたのだ。

彼は信念を貫く人である。時の権力者にとっては煙たい存在だったろう。ある先輩は社内を回った稟議書に、彼一人が「本件、納得しかねる」と、黒々と達筆で書かれたのを見た、という。

そんな彼はお客から抜群の信頼を得ており、人脈は多岐にわたっている。後々「昔、リンパクさんにお世話になった」という人に、私は世話になったことがある。

浴衣姿で寛ぐリンパクさんは、現役時代より少し痩せたようだが、胃を切った痕はすでに癒えて酒も進み、お元氣そうに見受けられた。

いよいよ飲みながら談論風発の歓談。会社の話も少しは出たが、広く政治、経済、社会から文学、芸術に及び、花は桜についての蘊蓄が半端でなかった。

知的好奇心が衰えないのも驚くばかり。「今、マルクスの『資本論』を読んでいる」と彼がいうのを聞いて、樋口さんと正宗さんは彼の気持の若さに脱帽した。

彼はまた「仏教に凝って毎日写経をしている」という。私が訳を尋ねると、「最後の抛りどころは信仰だろう」とさりと一言。その言葉に込められた彼の思いの深さを、私は推し量ることはできなかった。

私たちは、夜更けまで語り続け、自分の信念をしっかりと持っている先達に教わることの多い旅を終えた。

彼が亡くなられたのは、それから十年後である。

たまたま、今年私は、当時のリンパクさんと同じ年になった。それで旧懐の情にかられ、その頃の想い出を辿ると、彼が達した境地に遠く及ばない自分の至らなさばかりを思い知らされて愕然とする。

やはり、リンパクさんは偉かった。

台本症候群

浜 口 須美子

私は昔から想像力が遅い。たぶんイチを見てジュウを想像する。被害妄想のケもあるみたいだ。

娘時代、人並みに恋愛もし、デートもした。彼が車で送ってくれる。

「もうすぐ車が止まるわ。きつと彼はおやすみと言う。そして、私を抱き寄せて、おやすみのキスをするわ。どうしよう」

車の速度が遅くなって、止まりかけたときに、私は扉を開けて転がり落ちるように飛び降りる。想像力だけが先走り、彼の行動に対して、私がどう対処したらいいのか、私の頭の中でキャパオーバーのランプが点滅する。それで、走行中の車から飛び降りるといった異常な行動となってしまうのだ。

だいたい、まずはデートの約束ができない。約束したときから、私の想像力がドンドン膨らんで、まるで将棋

の手を先々まで読むかのようにドラマを作り出す。彼と会ってドウスル。映画を観てドウスル。ドウスル。ドウスル。想像力でデートをシミュレーションするうちに、しんどくなつて、息すら苦しくなつて「実は体調不良で……」と断ってしまう。とつても邪魔な私の中の想像力なのである。

さて、そんな私がどうして今の夫と付き合い、結婚に至ったのかというと、夫は約束をしない人。不意打ちの人。突然人間なのである。「今、君の家の前にいるから、ちよつと出てきて」「今すぐ」「今から」の誘いは、私に想像の余地を与えない。しかも幼馴染みだった夫は、イイ意味では安心。別の意味では、ときめきなく、ドウスル、ドウスルの危険性を感じないままに、気が付いたら結婚していた。

私の想像力の出る幕はなく、すべてのシミュレーションもなく、行き当たりばったり、出たとこ勝負の夫との結婚生活が始まった。

私は夫が帰ってきた時、いろいろな「おかえりなさい」をした。私の中の台本によって、三つ指について京都舞妓

風、隠れて伊賀忍者風、急に抱きついて外国映画風など、私のお帰りなさいごっこは何年も続いた。「フロ、メシ、ネル」のつまらない夫婦になりたくなかった。

結婚七年目の頃「ねえ、どのお帰りなさいが好き？」って聞いてみた。夫はすかさず「普通のがいいわ」ですって。「ガーン」私は一体いままで何をしてきたのか、夫も嫌な顔せずに、二人でお帰りなさいごっこをしてきたのに。その日からしばらく、夫の車の音が聞こえると、私は金縛りにあったように身動きできなくなってしまう。子供二人を学校に送り出して、夫婦で喫茶店に行く。楽しくなさそうなのが夫婦で、会話の多いのが恋人とか。「黙っていたら、夫婦にみえるやん」と私。夫は慌てて、「最近どう？」と聞く。愛人ごっこは夫を雄弁にして、とっても楽しい。

人生は自分が主人公のドラマを演じているようなものだと思う。自分の作り出すドラマの台本はつまらないものであつてほしくない。

結婚十年を記念して、夫が「何が欲しい？」と聞いた。ああ、私の台本では、結婚記念日には食事のあと、車が

ホテルに入っていく。私は「どこへ行くの？」って聞く。夫が「今夜はここに予約してあるんだ」って、そのサプライズがうれしい。そう、サプライズあつてこそその記念日である。私はこっそり夫に耳打ちした。「ねえ、ホテルの予約をお願いします」って。心の中に育てた台本は、時には登場人物の夫に教えてあげる事が大切である。

十年目の記念日。夫と二人、車で神戸に行く。

ディナーはフレンチのフルコース。神戸の山の灯が祝福してくれる。ホテルの部屋の窓際、夜景を見る私。夫は私を後ろから抱く。

ソォー！台本どおり。

いつもは私が台本係りだったけれど、今日は夫がシナリオライター。

少女の頃から、心の中の台本作りが大好きで、想像力が被害妄想の域までもなり、逃げ出してしまった私が、今、夫の台本の中で、心豊かに演じることだけにのみこめる幸せ。

台本症候群が治ったのかも。

金名鉄道の怪

田 谷 英 浩

友…キンメイ鉄道って知ってますか。正確に言うとなつたてことなただけ。

私…またあんたのブラフかよ。聞いたこともないし、むしろ乗ったこともない。

友…金名と書くんです。金沢と名古屋を結ぶ構想だったそうです。

私…眉唾だなあ。白山をどうやって越えるの。まさかトンネルを掘りかけたなんて言わないだろうね。

友…それがそうでもないんです。実は遠縁に小堀定信という人がいまして、親類縁者を説き伏せて資金を集めまくり、大正十四年には金名鉄道という会社を設立したそうです。

私…フーン。今夜の話は珍しく本当らしく聞こえるな。

友…いつも本当のこと言ってますよ。女の話以外は。

私…それはともかく、あんたの親戚筋じゃあんまり悪く

もいえないが、その人、山師とかペテン師の類いじゃないの。稀有壮大な法螺話で金を集めてドロンするよな。

友…とんでもない。ボクが十二才のころ、亡くなつたんですが、隣のおじさんみたいな感じの人で、よく覚えていますよ。白山下という駅の跡には今でも銅像が建っています。ペテン師なんてあんまりだ！（酔いもまわりはじめ、真つ赤になつて怒る）

私…まあそう怒るな。金名なんて聞くと、東名や名神クラスと思うじゃないか。今度はオレが聞くが、紀州鉄道って知ってる？

友…オレはジャズ屋だ。たまたま石川県出だから地元のことを知っているだけで、あんたみたいな「鉄」じゃないから他所のことは知らないよ。

私…紀州鉄道つてのは、紀伊半島に三キロ位の線路しか敷いてない。それなのにいかにも大きな鉄道会社のようにならせて、本業の不動産の物件にハクをつけようとする魂胆だ。鉄道ファンとしては許せない。あんたもそう思うだろう。リゾートマンションか何かでだま

されたことない？（こちらもかなり酩酊してきた）。

まあ聞けよ。明治の終わってから大正にかけて、私鉄ブームがあったんだ。その頃、大杜宮島鉄道などという社名だけ壮大な地方鉄道が雨後の筍のように出来たと聞いたことがある。あんたの叔父さんもそんな一派かと思つてね。

友…そうではないと信じています。もう少し金名の話聞いてよ。名前が詐欺っぽいのは分つたが、大正の終わりから昭和にかけてですね、白山の麓から鶴来町つるぎまちに近い加賀一宮まではとにかく開通させたそうです。このことは古い時刻表や県の歴史書のようなもので確認できます。地元の人たちは鉄道が開通するつてんで、みな期待に胸膨らませた。手に手に旗をもつて、一番列車の到着を待ったが、とうとう来なかった。どうしてかと言うと、その一番列車は途中の鉄橋が列車ごと落下したらしい。欠陥工事が手抜き工事か分らないが、どうやら本当にあつた話のようです。

私…その叔父さん、本業は何だったのかな。

友…運送業だったようで、資金切れになつても、金沢や

鶴来から協力者が現れることを期待したんだと思います。

私…線路をどつちから敷き始めたんだろうか。白山側からか金沢側からか。

友…白山下から着工したようです。

私…もし本気で名古屋を目指すなら、金沢から進めて、資金切れで、白山下でストップなら分るが、山の方から町へ降りてくるというのが分らない。

友…そこまで言われると反駁できませんが、とにかくこの頃の人の夢は大きかったのは事実ですよ。

私…明治五年に鉄道が開通してから、官営も民営もジャンジャン鉄道の建設をはじめた。明治三十年頃に免許申請をした鉄道は四五〇社を超えた、とモノの本で読んだことがある。いま起業、起業というけれど、その頃の鉄道企業ブームが近代日本をつくつたとも言えるよね。

友…氣候が良くなつたら金名鉄道の廃線跡めぐりをやりませんか。

私…異議なし。それまでにいろいろ調べておこう。

会計戦争

安 永 知 史

「会計戦争」が始まっている。

あらゆる分野で競争がある。政治、経済、科学、技術等で。そのひとつの経済分野で、いま静かなる戦争が始まっている。それを「会計戦争」と呼ぶ。

私は公認会計士として、上場企業の監査に携わっているが、企業の経理担当者は、いま戦々恐々としている。その原因は「IFRS」という会計基準への対応に追われているからである。IFRS＝国際財務報告基準とはそもそも「何」なのか？ 表向きには、国際間の企業（業績？）評価を、統一した会計ルールにより比較可能性を図る、というものである。しかし、公表されている幾つかのルールを考察してみると、そこには隠された目的が見え隠れする。

ところで、どんな競争分野においても、ルールを自己に有利に設定すれば勝利への可能性が高くなることは歴

史が証明している。例えばスキーマのジャンプ競技は日本の得意分野であったが、何時の頃からスキーマの長さを制限して欧米選手を有利に導いたことや、柔道においてもポイント制を導入して欧米選手に有利に持っていたなど、「ルール支配」事例は枚挙に暇がない。

話を会計分野に戻すと、いま正に「ルールの変更」が企図されているのである。

IFRSとはそもそも如何なる性格のものなのか。それは現時点における「短期的視点における時価評価に基づく企業の即時清算価値を算定する」ことを目的としている。即ち企業買収（M&A）のための戦略的・平和的武器、これが隠された性格であることに気付かされる。

ここで日本の上場会社が置かれている会計環境に眼を転じてみよう。従来の日本の会計慣行は原価主義を主眼に置く年一回決算報告であった。しかしバブル経済による過剰な含み益の発生、その後のバブル崩壊、不正経理の発覚、監査疑惑などの問題が露呈した。この様な事態に対しての解決策が見出せず、対応が遅滞していた。

此処に米国からのプレッシャーが襲いかかってきたの

である。不良債権処理という表看板を掲げながら、米国基準の会計基準の導入が図られたのである。それが時価主義会計と四半期報告書制度の導入であった。

時価主義会計は、部分的には過大な含み益のオンパレードという意味では一定の効用があった。しかし四半期報告書については年四回決算作業に追いまくられている現状である。さらに問題は、四半期という短期的業績評価に重点が置かれることにより経営者は短期業績に振り回され、ジックリと腰を落ち着かせて長期的視野に立った企業経営がやりづらくなったことである。とはいえ、米国基準はあくまで「業績評価」に主眼を置き、決算書では「損益計算書」中心主義であり、日本の従来の会計基準のより詳細化と厳格化を促す性格のものである。

しかるにIFRSはその主眼を大きく変えている。前頁に述べたように、その主眼は企業の即時清算価値であり、中心となる決算書は「貸借対照表」である。先に（業績？）と記述したのは正にその意味であり、IFRSは業績よりも資産価値を測定することを目指しているのである。

この様に日本の上場企業は、一方では米国基準に従い四半期報告書を義務付けられ、またIFRSに基づく決算書作りに向かおうとしているのである。米国と英国（IFRSの本部はロンドンにある）の両方からのプレッシャーにタタタタ従属すべく努力を強いられる日本の企業は気の毒に思えてならないのである。私の妄想であつて欲しいが、米国と英国の会計基準設定機構の後ろにはそれぞれの国際金融資本の吐息が感じられるのである。世界の金融資本への影響力を発揮するには「ルール」を支配することが一番効果的であることを知りつくしているのは彼らであるから。

「会計ルールの支配化」という静かな戦いが始まっている。このような会計ルールの支配下に置かれるわが国経済は根こそぎ欧米資本に飲み込まれる危機を感じているだろうか。かつて第二次大戦後、東京裁判では「後だしジャンケン」の様な「平和に対する罪」というルールを押しつけられ、有罪にされた歴史を銘記すべきである。恐るべきは目に見える敵にあらず、見えないルールである。

私のハードボイルド体験入門記

鵜飼 直哉

一昨年(2009年)7月の企業OBペンクラブ例会で小鷹信光氏の講演があった折りに、氏の「私のアメリカン・グラフィティ」(早川書房)という本を入手した。帯に「ハードボイルドの達人が幻のルート66をバックに、最も輝いていた時代の粹なアメリカ言葉を指南」と書いてあるのを見て、その場でサインを頂いた一冊である。もう一冊、「私のペイパーバック」(早川書房)と題した小鷹氏の近刊書も買い込んだ。「集めも集めたり一万冊。男ならここまです惚れる!」と書いた帯に惹かれて手にとってみると、昔、丸善の洋書部で見た覚えのあるアメリカのどぎつい表紙のペイパーバックの写真が目につく。中は私には全く別世界のことだが、徹底した凝り性の書き物は、内容を理解できなくても手元におきたくなる。

「アメリカン・グラフィティ」の内容は、ルート66にはほとんど関係ないアメリカン・イングリッシュの

エッセイ風解説本である。36章構成で「One for the road」、「My way」、「That's cool」、「Hard-boiled」、など表

現からそれに関係する話に蘊蓄を傾ける。

久しぶりに英語の本をじっくりと勉強した。とにかく面白かった。著者の言葉への拘り、疑問をとことん追求する姿勢、数字に妥協のない表現、出典を丹念に書き込む構成などは、ひょっとしてこの著者は技術系かと思わずにはいられない。それに加え、いわゆる蘊蓄本の知ったかぶりの姿勢とは全く異なり、何もそこまで種明かしをしなくてもと思わせる文章は、読者を引きずり込むものだった。イラストと古い映画の写真がたくさん入っているのは、コストを気にする出版社にしては珍しい。

さらに「あとがき」に「この本はANA機内誌『翼の王国』に三年間連載したエッセイが基になっている」と書いてあるのを見て、心底驚いた。ルート66に関する話題をANA機内誌で読んだと人伝てに聞いて探していた幻の記事の著者が小鷹氏であることが分かり、私の「ルート66 66歳完走の夢」を謹呈した。折り返し頂いた『翼の王国』1996年12月号の特集「ルート

66 完走計画のノートブックより」全38ページの綺麗なカラーコピーは私の貴重なコレクションだ。

「あとがき」には更に「(機内誌なので)仕上がりはセックス、犯罪、政治などのネタのないきわめてお上品なものになった。本書は各章にシモネタ満載のnotebookを付けた」とあり「息抜きの幕合いにレイモンド・チャンドラーがらみのエッセイを三本のintermissionに入れた」と説明している。

アルコール飲料のPR誌に載ったというこのエッセイをパラパラめくってみると「ロンググッドバイ」という話がたくさんでている。全く初耳の話ばかりだ。三本目の「村上春樹のハードボイルド・ワンダーランド」には、「ロンググッドバイ」はハードボイルドか否かを、口角泡を飛ばして論じている。中身はとても理解できないが、一つの疑問に対し、仮説をたてて検証を繰り返すやり方は私が問題解決に使う手法とそっくりだ。

ここまで来たら「ハードボイルド」に少しは接しようと思い、amazonから「The Long Goodbye」の村上春樹訳版とPenguin Booksの英語版とを購入したが、そ

の厚さ(英語版は全450頁)に驚き、解説をさっと眺めただけでしばらく書棚に置いたままだった。

その後もごく初歩的な質問などで小鷹氏と二、三回手紙の往復をした。ずぶの素人相手に毎回丁寧な返事を頂いた。「小鷹氏の150冊の翻訳書のなかで『これぞハードボイルド』という本は？」と図々しく伺ったら、ダシール・ハメット著「マルタの鷹」を推薦して頂いた。さっそく早川ミステリー文庫の小鷹訳版とOrion出版の「The Maltese Falcon」も買った。訳本を参考にして英語版を読み出した。一年前のことだ。

今年の正月、久しぶりに雑然としたCDを整理していたら、未開封の「マルタの鷹」のDVDを見つけた。思いついて小鷹訳版を引っ張りだしてみた。30頁目に附箋が付いており、そこまで読んだ印になっていてその先を読んだ形跡はない。小鷹氏の「私のハードボイルド」(早川書房)を読んでいるうちに「私のハードボイルド体験入門」の根本的な間違いが判った。「ハードボイルド」は一晚で読み切ってこそ「ハードボイルド」なのだ。

「キリストの復活」(裏切りと再生)

都 甲 昌 利

ギリシャ正教の国ロシア、カトリックの国ベルギー、新教の国英国と米国に、合計約十七年間暮らしました。キリスト教には多くの祭礼(聖母昇天祭、感謝祭など)がありますが、私は「復活祭」が欧米人の暮らしの中で、キリスト誕生の「クリスマス」(降誕祭)と同様に重要な祝祭日と感じました。「キリストの復活」(復活祭)は、キリスト教の教義の中でも特に重要な教義だそうです。イースターともいわれ、イースター・パレードは良く知られています。イースター休暇を欧米人は一週間も取り、キリストの誕生を祝うクリスマスと共に一大行事です。ハリウッド映画でもこうしたテーマが取り上げられています。マーラーの交響曲第二番も「復活」がテーマです。

なぜこれほど大切な行事なのでしょう? それはどう

もキリストの死と関係がありそうです。死があつて復活があるのですから。ご承知の通り、キリストはユダの裏切りによつて磔刑に処せられます。ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会に、キリストが十二人の弟子と共に宴を張つた「最後の晚餐」の壁画があります。レオナルド・ダ・ヴィンチがこの晚餐の様子を描いたものです。数年前にダン・ブラウンの小説『ダ・ヴィンチ・コード』や同名の映画で話題になりました。

当時のエルサレムで、キリストはユダヤ教の祭司や律法学者たちの欺瞞に満ちた信仰を激しい言葉で非難しました。それまでキリストは数々の奇跡を行い、正しい言葉で説教して、民衆の熱狂的な支持を得ていましたので、古い考えのユダヤ教の祭司たちは、このままでは自分達の存在は無くなつてしまふと危機感を持ちました。そしてイエスを殺害する計略を立てるわけです。しかし、民衆に人気のあるキリストを捕らえれば、社会秩序が乱されて大問題になります。そこに登場するのが十二人の弟子の一人であるユダです。

「イエス・キリストをあなた達に引き渡したら、幾らくれますか」と交渉するユダ。結局、銀貨三十枚と引き換えに恩師の血を売りました。イエスは弟子十二人を連れて支持者の家に行き、晩餐の宴をいたします。席上、イエスは「あなた方の一人が私を裏切ろうとしている」と告げるのです。弟子達の驚きの表情。ダ・ヴィンチは「最後の晩餐」の壁画でユダを「主を裏切った歴史的悪者」として描きました。

なにもキリストに限らず、私達の周囲にも裏切りは見られます。恋人や友人に裏切られたり、子供に裏切られた両親、反対に両親に裏切られた子供、上司に裏切られた部下、部下に裏切られた上司、国のリーダーに裏切られた国民など。私もサラリーマン時代に取引先の人物に裏切られ、会社に損害を与えてしまいました。失意のどん底でした。裏切られても復活する人もいますが、私は復活しませんでした。

こんな時に出会ったのが、「キリストの復活」の壁画でした。図書館で『世界美術全集』のイタリア・ルネッ

サンスの絵画集の中にこれを見つけました。プリューゲルも描いていますが、十五世紀に活躍したピエロ・デラ・フランチェスカという画家が描いたものが一番気に入りました。キリストが大きな目を見開いて真実と愛の旗を持ち、左足を棺の縁にかけて、今にも死から蘇る力強い姿を描いています。墓守り三人が眠りこけています。この絵を見ると希望が湧いてくるのです。どんなに不遇と困難に遭遇しても生きていこうという意思が湧いてくるのです。いつか本物を見たくなり、駐在員としてベルギーに勤務していた時、イタリア中部トスカーナのサンセポルクロにある市美術館を訪れました。

この絵画は壁画であるために市外に持ち出すことが出来ず、ここだけでしか見られないので、感激も一入でした。絵葉書を何枚も買って帰国してから、失意にある友人たちにこの絵葉書を送り、感謝されました。

限られた人生の一時期には、これはというものに出会うことがあります。私にとっては、それはこの「キリストの復活」の壁画でした。

時を贖い取る

新井 良侑

昨年、力士の野球賭博問題がマスコミを騒がしていたころ、「人が求めるのは、われわれの不幸な状態からわれわれの思いをそらし、気を紛らわしてくれる騒ぎである」というバスカルの言葉を敷衍し、「人が求めているのは、倦怠という人生最大の不幸から思いをそらし、気を紛らわしてくれるものであり、すべての人が自分の仕事や趣味に打ち込むのは、そのためである。力士が本業に打ち込まないから、気晴らしに賭博に精を出すのだ」という批評が、ある新聞に載った。

この「人生はすべて気晴らしである」を読みながら、「人生はいかに暇をつぶすかだよ」が口癖であった、社内開発の鬼といわれ、研究開発のノウハウを伝授してくれたM先輩のことを思い出した。

M先輩はよく研究所に顔をだし、若手の研究所員を集めては、さまざまな開発談義をしていた。また、時々私

のところに来て、「君、人生は暇つぶしだよ。興味あることを何でも楽しんでやれよ」と冷やかしながら半分励ましてくれた。

この先輩の指導の下に、会社生活のほとんどを開発部門で過ごし、多くの新規開発に取り組み、幸運にも幾つかの成果を上げることができた。

また、二十才代の初めにイエス・キリストと聖書の世界を知った。それによって、「人は生まれて、生きて、死ぬだけだ。面白おかしく生きるに如かず」というそれまで持っていた虚無感を克服し、「人生は一人一人生きるに値する」と思えるようになり、人生を暇つぶしと考えなくなった。職業を天職とまでは思わなかったが、職業は信仰の実践の場であり、仕事を通して自分を磨き、自己を完成する手段として捉えるようになった。

研究開発を遂行する上での多くの困難や障害を乗り越える時、社会生活における様々な問題を解決する時、聖書の言葉から多くの知恵や活力を得てきたことで、年を経るごとに聖書が身近なものになった。聖書はすべての人が理解しやすい例話で満ちており、実生活に照らして

学ぶことができるので、いつしか時間に縛られずに、聖書をより深く理解したいという願いが強くなっていた。

しかし、いざ定年退職がカウントダウンされる頃になると、老後の生活の大変さや不幸な老後のマスコミ報道が身に詰まされるようになった。さらに同年代の仲間が勤務延長したり、新しい職場を見ついたり、新しい社会貢献の道を得たりしているのを耳にしたりすると、完全に退職し、毎日が日曜日の生活に耐えられるのかなという不安な思いも頭をもたげてきた。

そんな折りに、前々年退職したばかりの研究所時代の上司が、あっけなく急逝した。あるカトリック教会のお別れ会で、この先輩がクリスチャンだったこと、小学生の時はお母さんと一緒によく集会に参加し、教会の奉仕に熱心であったが、受験勉強が忙しくなるころから、教会から遠ざかってしまったことを知った。

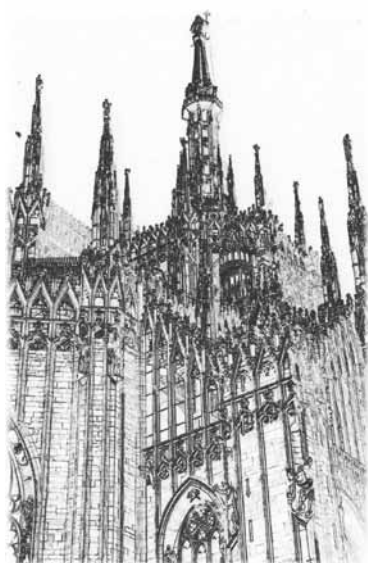
神父さんのお別れの言葉、「あなたはこれまでこの世で十二分に働いてきました。これから神のために、何か

しようと願ったことでしよう。しかし、神はこの時間を与えられませんでした」という言葉を聞いた瞬間、なぜか自分に語られたような気がした。

あの時からもう五年余が過ぎた。

「今の日々は邪悪ですから、時を贖い取りなさい」

（エペソ人への手紙五章十六節、回復訳聖書）



女中物語―サワイのこと―

浜 田 道 雄

バンコクに赴任して二週間、ようやく気に入った家が見つかって、ホテル暮らしから新居に移転した日の午後のこと。上司の澤井さんの奥さんが、「おうちが見つかったというから、女中さんが要るんじゃないかと思って」と、一人の女の子を連れて訪れてきた。

タイ人としては背が高い方だが、色の真っ黒な、いかにも田舎から出てきたばかりといった元氣そうな子だった。名前を尋ねると「サワイ」という。「いや、奥さんの名じゃなくて、あんたの名だよ」と重ねて尋ねると、澤井夫人がおかしそうに、「それが、サワイなんですって。タイ人にも私と同じ名前があるんですね」と笑う。

それが、十七歳のサワイとの出会いだった。東北地方のプリラムからバンコクに仕事を探しに出てきたが、まだ人の家で働いたことはないという。クリクリとした明るい眼をもつ利口そうな娘なので、家内は「頭はよさ

そうだ」といい、とにかく働いてもらうことにした。

こうして、サワイは我が家で元気に働きはじめた。二人の息子たちはすぐに彼女に馴染んで、幼稚園の送り迎えに途中の草原で一緒に虫や蛇を追っかけて遊んでもらうなど、遊び相手の姉さんができた気分になった。

しかし、私達の方はそうはいかない。毎日がドタバタ騒ぎだった。何しろ、サワイは日本語も英語もできない。私達は日本で多少のタイ語は習ったとはいえ、日常のものはしだっておぼつかない。事件続きは当然だ。

まず買物だ。家内が一緒のときはまだいいが、一人で行かせるときは「何を買うか」を伝えねばならない。絵心のある家内は万国共通語だと絵を書いて渡すが、描写が細かすぎ、レバーを買ってもらう筈がニンニクや馬鈴薯になったりして、とんでもないことになる。

絵に描けないことは、日本から持っていた「タイ日・日タイ辞典」を広げて、必要な言葉を指さし、片言のタイ語で伝える。苦勞してタイ文字を読み、話していると、サワイは私達の発音が違っていると直す。仕事の指示の筈が、いつの間にかタイ語教室になってしまう。

ある日、昼の社交で夫婦して出かけ、帰宅してみると、家の中で「キタナイ！ ヤメナサイ！」と誰かが大声で息子どもを叱っている。「友達でも来ているのか？」と急いで家に入ってみても、誰もいない。サワイに尋ねると、自分が叱ったという。びっくりして、「あんだ、いつの間に日本語を覚えたのか」と聞くと、「奥さんが叱るとき、いつも言ってるじゃないか」という。悪ガキ息子を叱る家内の口調を、いつの間にか覚えてしまったのだ。

そんな楽しい騒動を続けて二年近くたったある日、サワイが「仕事を辞める」といい出した。ボーイフレンドが故郷のペップリーでバーミー（タイのラーメン）屋を始めるので、結婚して一緒に行くという。ペップリーはバンコクから南へ百二十三キロ。サワイの故郷プリラムとはまるで反対の方向だ。そんな結婚を大丈夫かと危ぶむ気もあつたし、またせっかく私達に馴染んでくれた女中を失うのも痛手だと思った。だが、当人が結婚するとうのを止めるわけにもいかない。いろいろ悩んだが、結局お祝いを持たせて、送り出した。

それからまた一年余りが過ぎた。ある日家に帰ると、

子連れのサワイが平然として家で掃除をしている。「どうした？」と聞くと、「亭主の母親と喧嘩して、家を飛び出して来た。でも、プリラムに帰るのは遠いから此処に来た」という。「なんだ、我が家が実家代わりか」と呆れたが、「私達を親同様と思ってるんだ」と納得し、居候させた。サワイは一週間ほどいて、亭主の許に戻ったが、その後も、私達が帰国するまでの約一年間に、さらに二度家出して来て、その度に親子で我が家の居候をした。

私達が帰国するとき、住所を聞いていなかったの、サワイには帰ることを知らせられなかった。あれからも何度か家出をしたに違いないから、私達のいないバンコクに来て、サワイ親子はさぞかし困っただろう。帰国後、サワイのことを思い出すたびに、私達は心を痛めた。

だが、それから四十年。サワイもいまでは五十過ぎの婆さんだ。あのバイタリティーに溢れたサワイのことだから、姑との戦争にも勝ち、今頃は亭主を尻に敷いて、子供や孫を顎で使いながら、ペップリーで一番繁盛しているバーミー屋を切り盛りしているんじゃないか。いまでは、私達はそう確信している。

『カドタさんのブルース』

平尾 富男

中学生の頃は、学校でも家でも、音楽と言えばクラシックばかり聞かされていた。

英語を習い始めて、「生」の発音に親しむことを目的に、アメリカ駐留軍向けのFENというラジオ放送を聞くようになった。そこから流れてくる新鮮なジャズのリズムと旋律を初めて耳にして魅せられたのが、ジャズ好きになった原因だ。傍で聞いていた母が「何でこんな雑音だらけの音を聞いているのか」と呆れていた。ジャズも英語も中学生の理解力を超えていたが、今でも懐かしい思い出として頭の隅に残っている。

ジャズ界きつての超絶技巧を誇り、ダイナミックな演奏と流麗なアドリブから、「鍵盤の皇帝」の異名でも知られていたオスカー・ピーターソン。そのジャズに初めて出会ったのは大学生時代だった。その頃はモダン・ジャズを聴かせるジャズ喫茶が巷に沢山あった。昼間から仲

間と連れ立って喫茶店に入り浸り、神妙な顔をして足でリズムを取りながら、大きなスピーカーから流れてくるジャズに耳を傾け、タバコの煙を燻らせていた。

モダン・ジャズとしては親しみのある演奏スタイルで、難解な奏法に傾きつつあったモダン・ジャズの流れの中で、ベースとドラムだけをバックにスイング感溢れるオスカー・ワールドを拓いていたのがオスカー・ピーターソン・トリオだった。学生運動で学内が荒れていた時期を過ごしていたが、その演奏は素直に気持ちに馴染んで心を癒してくれた。中でも『ザ・トリオ』というレコードを初めて聴いたときには、全身に電流が走った。喫茶店に行く度にリクエストをし、遂にはレコードまで購入した。昔からピアノ・トリオと言えば数多のトリオが結成されているが、レコードのジャケットに堂々と定冠詞「The」を冠して「我こそはトリオだ」と言わんばかりの題名を付けた。それは、誰もがその実力を認めるピアノのオスカー・ピーターソンが、ベースにレイ・ブラウン、ドラムスにエド・シグペンを配した当代屈指の比類ないトリオ構成だからこそ可能だったのだ。

このレコードは、シカゴのクラブ「ロンドン・ハウス」での録音で、演奏中に食事の客のお皿にフォークやナイフが当る音が聞こえてくるのが新鮮に思えた。同じ一九六一年にこのクラブでのライブ録音の名盤に『ザ・サウンド・オブ・ザ・トリオ』というのがある。ここに収められている『カドタス・ブルース』というブルースの名曲がある。この曲はオスカーが自分の友人でH i・F iシステムのスペシャリストだったジョージ・カドタに作曲して捧げたと、ジャズの専門誌で紹介されていた。カドタというのがどうも日本人の名前のような気がしてならなかったが、後年ふとしたことから、そのカドタさんがトロントで下宿屋を営んでいたという話を会社の大先輩から聞かされて納得した。ニューヨークに駐在していた一九八〇年代初頭の話である

その先輩は若い頃、会社の製品の修理の為の尖兵としてトロントに派遣され、カドタさんの家に下宿をしていた。同じ下宿屋に、若い頃のオスカー・ピーターソンも一時期一緒だったというのだ。「俺はオスカー、オスカーって呼んでいたよ」と言うではないか。

その先輩は、こと音楽に関しては、クラシックもジャズも全く無知で興味すらなかったから、その後のオスカーの出世にも余り関心を持たなかったようだ。一度、オスカーが初来日したときには演奏会に足を運んで楽屋で再会を祝したらしいが。その頃その先輩と親しかったらオスカーと握手くらい出来たかもしれないのにと、恨めしい思いでその話を聞いた。

H i・F iシステムの専門家でもあったというカドタさんに捧げられたブルースは、とても明るい爽やかな名曲で、暗い物悲しいイメージのブルースではない。オスカーが亡くなるずっと以前に天国に召された先輩からは、ジョージ・カドタの人物像について詳しい話を聞けなかった。ただ、「大変にお世話になった」という言葉だけが耳に響いた。

オスカーも尊敬と愛情を込めてこの名ブルースを作曲し、カドタさんに感謝を表したに違いない。世に余り知られていないこのエピソードは、今でもオスカーの強靱なタッチと明快でハッピーなピアノ演奏をCDで聞きたびに思い起こさせられる。

下北半島の漂流譚―菅江真澄の日記より

大月 和彦

江戸時代の旅行家菅江真澄は、寛政四年（一七九二年）秋、蝦夷から下北半島に渡り、ここで二年半を過ごした。知人宅や寺院を転々としながら、田名部や大畑など各地を歩いて人々の生活や民俗風習を書きとめている。この中に小説や映画で知られる大黒屋光太夫にまつわる漂流民の話がある。

蝦夷松前を発つ直前の日記に「天明のころ紀伊国の船人が漂流し、ロシアに着き、十年の間に生き残った者がロシアの使節に連れられて根室に着いたという噂を聞いた」と記した。

これは、寛政四年九月、ロシアの使節ラックスマンが難破船神昌丸の船頭大黒屋光太夫ら生存者の送還と通商を求めてエカテリーナ号で蝦夷にやってきたことをいう。幕府はロシア側と交渉に当たる宣諭使を松前に派遣

し、松前の警備を南部と津軽の両藩に命ずるなど大騒ぎになっていた。松前でも人々の噂になっていたのだろう。

木材や海産物の積み出し港として賑わっていた下北半島西海岸の佐井で、神職、僧侶、医師、廻船問屋などと交遊していた真澄は、「佐井の浦人竹内善右エ門とかいう者が赤人のいる島に流れついて、その国にそのまま住み、今その孫がカムサッカ人に連れられてきた……と行きかう人が話していた」と書いている。

「カムサッカ人」はラックスマンのことで、佐井を出て漂流し、ロシアに住みついた船乗りの子孫が使節団の中にいたことが佐井に伝わっていた。

「佐井の浦人竹内善右エ門」が乗った船は、光太夫の神昌丸遭難より八年前の延享元年（一七七四年）十一月に佐井を出港した多賀丸のこと。コンブ、魚粕などを積んで江戸に向かう途中難破し、翌年五月千島のオンネコタン島に漂着した。生き残った乗組員十人はオホーツク、サントペルブルクなどをまわった後、イルクーツクに引き留められて日本語学校の教師をしていた。その中の一人とロシア人女性の間生まれた子が成長して通訳

となり、ラックスマン使節の一員として父の祖国にやって来たのである。

光太夫のロシア見聞記『北樺聞略』のエカテリーナ号乗組員名簿に「総理役イワン・ヒーリッポウィッチ・タラヘジニノフ。三六歳。先年南部より漂流せし久助といへる者の子なり」とある。総理役とあるが、実際は通訳で、多賀丸乗組員の南部領宮古出身の久助の子、トラベズニコフであることが判明している。

佐井村の船着場の広場に遭難船の模型と並んで、「多賀丸漂流記念碑」が立っている。

長い漂流の後、ロシアで日本語学校教師として日露交流に尽くした功績と、望郷の念に駆られながらも帰国が叶わず、改宗し、生を終えざるを得なかった久助をはじめとする多賀丸乗組員の生涯を思い、佐井村がイルクーツク大学の協力を得て一九九六年に建立したものだ。

和歌を通じて親交があった南部藩田名部代官所の菊池

成章とある日町で出会ったところ、ロシア人が渡来したので警備のため蝦夷松前に派遣されていたが、昨今帰ってきたところだと話したとも記している。また恐山の湯治で一緒になった人から聞いた話として、根室から松前に向かったロシアの船が霧のため航路を見失い、尻屋崎近くの岩屋沖まで流され、牛皮の小舟で浜に上陸した。岩屋の人達は赤人と恐れ、泣き叫び、浦の役人が駆けつける騒ぎがあったと記すなど、ロシア船の渡来はこの地方にも緊張をもたらしていた。

晩年、秋田で著した随筆に「をろしやのおどり」の一文がある。宝永、正徳（十八世紀初頭）の頃ロシアに流れ着き、文字を教えながらそこで生を終えた佐井の浦人の末孫が、先祖の地佐井の盆踊りをまね、「嫁をとるなら目黒髪黒がよい、サハラサハラ」とはやした、と書いている。多賀丸のことを思い出したのだろうか。

海に囲まれた下北半島には漂民の話が多く残っている。

「独居老人の死」と後始末

寺 井 融

八十一歳の老女が亡くなった。一人暮らしである。宅配の弁当屋が、食べていないことに気づき、発見されたのだ。死後二日経っていたという。身寄りがなく、我が家が連絡先となっていた。ところが、警察から連絡があったとき、私たち夫婦は海外旅行中であつた。

帰国後、あわてて警察署に問い合わせてみる。「解剖で不審死ではないと判断されました。それで、葬儀屋を手配し、遺体安置所に預けてあります」と言われた。分かる範囲の親族に連絡を入れ（といっても八人だったが）、安置所に緊急集合する。

二週間近く冷凍保存されていたため、遺体は青ざめて見えた。線香を手向け、それから親族会議を行った。最大のテーマは、費用をどうするかである。

「お葬式代は残してある、と言っていたわよ」

「貯金をおろしたらいいのさ」

「でも、死んだ人のを、勝手におろせるの」

いろんな意見が出る。結局、当方が立て替えておき、後で精算することにした。まず茶毘を急ぎ、弁護士をやっている友に依頼して、法定相続人を探すことも決めた。

難問は部屋の明け渡し。故人は片付けが大の苦手だったとき。妻にいざなわれて訪問してみれば、玄関をあけたとたん、新聞や雑誌から衣類にインスタント食品と、日常雑貨の山である。床や畳の表は見当たらない。

「これはひどいね」

「そうでしょ」

空気も、もーつとしている。よくテレビで見るゴミ屋敷の一步手前であつた。

区役所の年金課に向く。

「年金手帳の返却は、社会保険事務所です。その際に『除住民票』を持って行って下さい」

そう言われたので、住民課に直行した。

「どういふ関係ですか」

「妻の母の従兄弟にあたります」

「そうすると五親等ですよ。直系の三親等以内でな

いと、出させませんので」

「お金をもらう話ではないのですよ」

食い下がつてみても、「ほかの親族の委任状が必要だから」の一点張りである。あきらめて帰宅。保険事務所に電話してみると、「年金手帳は、そちらで捨てて下さい」だって…。

NHK、電力、ガス、電話の解約をし、都の住宅供給公社に「亡くなった」と言って、手続き書類を拙宅に郵送していただくよう頼んだが、送られてこない。調べてみれば、故人宅に郵送されていた。

引越し業者からは、当初の見込みより大幅に廃棄物が増えたので、二十万円上乗せしてくれないかという。それを了解し、二カ月後の月末支払いで了承してもらう。

弁護士から報告があった。

「調査では、三親等以内の相続権を持っている人物はおりません。遺書もないです。財産は国庫に収納されます。精算は、国が選んだ財産管理人の弁護士が行います。引越し屋への払いも、そうです」

安心していたら、約束の月末に、引越し業者から「ま

だ入ってきていません。なんとかありませんか」と切迫した電話があった。冗談ではない。零細自営業者は、二十万円欠けたために倒産するかもしれないのだ。早速、財産管理人に電話する。

「手続きが終わっていませんので」と暢気な答え。

「うちが立て替えておきます」と声が尖ってしまった。

また、その財産管理人に、菩提寺のご住職とは、納骨法要、戒名、永代供養料などすべてを含めて百万円で話がついている、と言っておいたのだが、「三百万円になった」とのこと。今度はあきれて声が出なかった。

結局、故人の資産は、預金や株券などを合わせると一千七百万円あった。火葬、納骨、住居退去費などを含め四百三十万円ぐらいかかり、ほかに弁護士費用がある。財産管理人の弁護士には国が払う。当方の弁護士、友人へは、この故人の残金から払おうと思っていたのだが、それはできない。依頼人払いが原則であるようだ。

「通信費だけでいいよ」

友は言い張る。だが、そうもいくまい。立替金として返ってきた一割を、受け取ってもらうことにした。

能への興味

田 原 敬

五年前、高校時代の同級会の際、恩師の宮崎先生が余興として、永年やつておられる謡を披露してくれた。謡は能の発声の部分であり、さすがに年季の入った声に魅了された。後日、この同級会の感想文を先生にお送りすると、写真を頂いた。

この九月に国分寺跡で薪能をみた。今年で十八回、毎年能の盛んな佐渡市から一座が来られる。会場は広い場所、周囲は森にかこまれ、薪を燃やし、暗くなるころには満天の星。幻想的だ。

前座で、男女の小学生の舞台が四十分あった。小さいうちに稽古をし、大勢の観客のまえで発表するのは、素晴らしい能の教育となる。演目は狂言『鬼の槌』、能は『巻絹』であった。

亀井勝一郎氏が書いている。佐渡へ行くと、むこうから牛車を引きながら老農夫がくる。すれちがうとき、ふ

と耳を傾けると謡曲をうなっている。佐渡では農夫も能をやると聞いていたが、なるほど！

昨年六月に亡くなった、国際免疫学会会長をされた多田富雄氏は、学生時代から能楽堂に出入りし、ご自身も台本を書かれるほど、能楽の造詣が深い方であった。

日本は農本国家であり、農耕に従わず納税の義務を果たさない芸人を「河原者」と蔑称したことが、『新猿楽記』に記されており、日本の演劇はアウト・ローの人々によって伝承された。

能楽といえば、観阿弥、その子の世阿弥が特に有名だ。能楽のまえは田楽と猿楽として始まり、観世、宝生、金春、金剛の四座が奈良、京都辺りで発祥し、一三七四年、京都の今熊野で十二才の鬼夜叉を演じた世阿弥のシーンは、当時、未だ十七才の青年將軍足利義満を強く惹きつけ、大和猿楽は貴族社会の芸能として急速に根付いていったと言われている。

十一月十四日、大宮市へ中島美登里さんの「琴の響き」の演奏会に行くと、元大宮市長の新藤享弘氏が挨拶をされ、「宮中から勅使が来ると、氷川神社の舞台で能楽、琴、

踊りなどで、仕事の合間に饗応する。全国で十七社が選ばれ、武蔵国では明治神宮、靖国神社、氷川神社。奈良県は四社、京都も四社です」と述べられた。

猿楽の前身は飛鳥時代、中国大陸から雅楽や舞楽などと共に渡来した散楽で、隋・唐の代に形成された礼楽を飛鳥王朝がこれを真似て、雅楽寮を置いて国家体制に取り入れたことが分かっている。

やがて、一般大衆にも普及した。

幕藩体制が終わり、明治になると、能、狂言の世界は貧苦の底に落とされ、泥棒、警官、蠟燭屋、鰻や、灸師などになる程の、厳しい時代があったようだ。

岩倉具視は米欧使節団として外国を訪れ、彼の地で礼服を着用し、オペラを見て、自国の能楽を見直したそう。三井は観世、安田は宝生の大パトロンになり、日本美術の恩人であるフェノロサは、梅若実について謡を学び、能の本質を極めた。

戦後になると、喜多節生、野村万作などはアメリカに招かれて能や狂言の実技を教えた。今では能楽は世界で上演され、芸能としての奥深さが認識され、逆に外国で

その真髄を自国の演劇にとり入れている。

フランス政府招聘の芸術留学生制度が出来ると、ジャン・バローはまず観世寿夫をバリーに招き、能とパントマイムの技法が交換されたと言われている。

能から派生した三味線や箏曲は数が多いようだ。日本の三分の二の能舞台が佐渡にあるのは知っていたが、佐渡市長の高野宏一郎氏も、佐渡は能大國で、能楽の質が高いことを強調されていた。

この文は石橋いしはしのCDを聞きながら纏めた。



拝啓、周平コーチ殿 おめでとうございます

松 谷 隆

「コーチが未熟です」これは昨年の大阪国際女子マラソンで途中棄権した有紀子選手に対する陸連専務理事の言葉です。これを聞いて、専務理事はなんとという傲慢野郎かと怒り心頭でした。周平さんも絶対復活させるぞと誓われていましたね。

「赤羽選手は上下動のすくないフォームで余裕を持って走っていた。この強風下での26分台の記録は立派」との今年のレース後の専務理事のコメントを聞き、これを言わしめた周平さんの手腕に感服しています。ほんとうにおめでとうございます。

昨年の棄権のあと、ロンドン・マラソンまでの膝の治療、トレーニングについては大変なご苦労をされたとお察します。そのご経験が、今回の優勝への道を開いたにちがいありません。けがの防止、万一けがの場合の早期発見など列举にいとまはありません。またブログにお

書きになったように『長距離・マラソン強化合宿』に参加され、先輩監督たちと交流されたことが実ったのでしよう。

これで、有紀子選手は完全復活と言えますね。一夜明けたスポーツ紙はもちろん一般紙でも今後の期待を大きく報道しています。

今回はわずかの差で、今年8月の世界選手権内定には届きませんでした。しかし代表に選ばれるのは間違いないと確信しています。

また、4月のロンドン・マラソンには招待選手として出場されることですね。昨年の経験がきつと役に立つと思います。昨年のロンドンでのラスト2・195キロが8分4秒、大阪では7分48秒に改善されています。しかし世界のトップは7分を切っています。今年のロンドンでどれだけ改善されるか楽しみにしています。

となると、今年は3回のフルマラソン出場です。一昔前には、女子のマラソンは年2回が限度と言われたものです。いかに疲労を早く回復するかが重要課題だったからでしょう。今回、周平さんのことから、準備万端怠

りないことでしょう。

昨日、増田明美さんは「赤羽さんは昨年ロンドン・マラソンのベースメーカーがきちんとベースを作ってくれたので、前半楽だったといっている」として学習効果を強調していました。さらにアナウンサーが「赤羽選手は周平コーチに今年は長居で待っていてほしいと伝えた」と紹介したとき、増田さんは「赤羽さんにそれだけの自信があるということでしょう」とこれも絶賛でしたよ。

私が有紀子選手に着目したのは2006年12月の実業団駅伝で「ママさん選手」と紹介されたときでした。翌年5月の織田記念国際の5千米トル優勝のときには『陸上競技女子選手たちその2』の駄文をクラブのホームページに掲載し、周平さんに紹介しました。そのとき有紀子選手の年齢を間違えて書き、周平さんに「微妙なおんな心に理解を」とおしかりを受けましたね。

その後2008年6月の日本選手権までは有紀子選手の成長期と理解しています。特に1万メートル決勝はメインスタンドのゴールラインの延長線上で見えていました。あの迫力にまさる場面にはその後出会っていません。

北京オリンピックから昨年の大阪国際女子マラソンまでは、世界との競争での苦惱期と見えています。長距離からマラソンまで、スピードの向上とスタミナ作りの難しさに直面されたに違いないと信じています。その一例は、1万メートルで31分台の記録が出なかった事です。

昨年のロンドン・マラソンからは充実期、円熟期の始まりとなるでしょう。ロンドンの自己新で6位入賞に始まり、12月の実業団駅伝の10キロ31分55秒で、福士選手に次ぐ記録を出したあと、今回の快挙です。

優苗ちゃんとのスキップを減らしてまでのプロ根性を貫かれたお二人の意志の強さがあれば、これからの困難もきつと克服されるに違いないと確信しています。

昨日、有紀子選手がトラックに入り、サングラスを周平さんに向けて投げたとき、思わず涙がこぼれました。「奥さんの願いをかなえてあげたい」という周平さんの言葉が実現する寸前だったからです。

これからも二人三脚、いや優苗ちゃんとの三人四脚でますます前進されることを祈念しております。

本当におめでとうございます。 敬具

タイムカプセルよ 有難う

黒崎 昭二

二〇一一年正月も半ば過ぎた頃、思わぬ便が届いた。発信人も受信人も黒崎隆平。私の次男が勤務した富士重工群馬製作所からのもの。一九九〇年十月に製作所三十周年を記念し、タイムカプセルを埋設したときに書かれたものが、二十年という期限が来て、各人の宛先に送られてきたのである。多くの仲間も一緒に手紙を書いたのだろうが、その頃の彼の書きなぐりの字が、却って真実味を出して胸に迫る。彼は残念なことに、その手紙を書いた二ヶ月後に病気で亡くなった。親としてまったく驚天動地だった。太田市に行き、残念な葬儀に参加した。工場側に種々事情を聞いたが、亡くなったものは仕方ない。そんな状態で暫くの間は逆縁の淋しさに耐えていた。一家の長である自分のために求めた墓地に、墓碑を作ってから、既に十五年も経ち、墓参りは折々に欠かさない。いつまで経っても無念の気持ちは消えない。諦め

られないのである。

そこへ、タイムカプセルからの手紙である。亡くなった時は二十六才だったから、いま生きていれば四十六才である。きつと家庭も持ち、何人かの子もなして、よい「おっさん」になり、会社では、技術屋としての実力も備わって、然るべき壮年の自動車技術者になっていた筈であろうに。

この手紙は、私にとっては、口惜しいが、嬉しいような、倅が帰省してきたような気分にくれた。タイムカプセルを二十年経って開いて、夫々の人たちの手許に送った会社当局に感謝するが、子を持つ親としてこのような経験は二度としないものである。

万博などを含めて、いろいろな記念すべき時に、タイムカプセルを作り、相当年数経ってから開けてみるということはよく聞くが、私自身としては、そういう機会があれば極力参加して、よき思い出をなし、その後の人生の身の処し方にプラスにしたいと思っている。

ここに、その手紙を添えるので読んでください。

私は今、第3 ボディー技術課から現場応援として第2 ボディー課に来ています。作業内容は、ジャスティ（車種の名前）のフード取付及びブルーブレースの取付けです。

富士重工に入社して3年半になりますが、生産技術の仕事にも慣れ、少しやる気がうせていた所、丁度現場応援の話がありましたので、気分を変えようと思って来ました。

最初は生産技術の仕事に比べれば現場の仕事は肉体労働であり頭を使わないし、給料もいいし、3か月だからこんないいことはないと思っていました。

しかし、いざ来てみると、最初、筋肉痛に悩まされ、次は早番・遅番に切り換わる時に寝不足、さらに食欲不振といろいろ悩まされました。

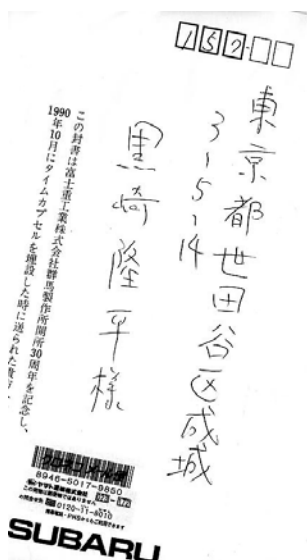
あと2ヶ月ですが、早く終らないかなーと思っています。

20年後には私はいったいどうなっているのでしょうか。46 才になっていると思いますが、多分結婚して子供もいると思います。

20 年経ってこの封書を開けた時、この時の状態を思い出して前向きにがんばりたいと思います。

1990年9月28日（金）

黒崎 隆平



「己の死」―最初で最後の大発見

金 京 法 一

「死ぬのはなんとなく空恐ろしいが、心ならずも親孝行ができなかった両親や、若くして死別した恋人に再会できるかもしれないと思うと、甘酸っぱい期待のようなものを感じる」友人は真面目な顔をして言う。

ハイデガーが一九二七年に発表した『存在と時間』上巻は、この類の本としては空前の売れ行きで、やがて始まった世界大戦では、ドイツ軍将校が背囊の中にこの本をしのばせ、陰惨な塹壕生活の中で必死に生と死の意味を探し求めたという伝説すら生まれた。いつかは必ず訪れる死の恐ろしさに耐えかね、世人は無意味な饒舌で誤魔化しの現在を生きる。人間が人間たる由縁は、現在を想起による既往（過去）と期待による将来（未来）に分節し、瞬間としての現在を生きる、つまり時間性を獲得することにある。そして絶対不可逆な死の覚悟は、今から死までの時間こそ己の真の時間との確信を生み、本来

的な生き方ができるようになる、というのが上巻の趣旨である。

しかし待望の下巻は、目次が発表されながら刊行されることなく、一九七六年ハイデガーは八六年の生涯を終えた。理由は不明のままであるが、研究者の憶測は後を絶たない。

存在一般を現存在（人間のこと）の徹底分析により明らかにすることを目指し、「現存在が存在に先立つ」をテーゼとして上巻は書かれている。プラトン、アリストテレスに始まり、カント、ヘーゲルにより完成されたという形而上学は、主観・客観の一致するところに真理があるとし、この論法は自然科学の分野では大成功を収めたが、人間を対象とする哲学の分野では自己同一性の壁に阻まれて、行き詰ることが十九世紀後半では次第に明らかになった。ハイデガーはこの二四〇〇年の歴史を持つ形而上学に徹底した批判を加え、自然を客観の対象から現存在そのものに帰還させ、哲学史を塗り替える壮大な構想を抱いたらしい。現象学者らしく主観・客観という二項対立ではなく、現存在（主観）から出発するが、

気がついてみたら現存在と存在一般という二項対立の罫にはまっていたというのである。根本的な軌道修正を試みたようではあるが、大成功を収めた上巻が実は間違っていたとは言えず、結局ダンマリを決め込むことにしたという説が有力のようである。いかにも二十世紀の大秀才と言われた人物らしいやり方である。

ただ挫折の理由はそれだけではないような気がする。死を覚悟するところに時間性の起点を置いたのはまさに画期的な発想であり、卓見という他なく、『存在と時間』の大成功もそこにあるのだが、当然のことながら死とは何かという問題が提起されるであろう。ところが、人間は他者の外見的存在消滅を死と認識しているに過ぎず、死そのものの、ましてや己の死については何も知りえない。知った時には己の存在は消滅しているのである。カントの「ものの自体」と同様、死は人間が絶対知ることができない、したがって学の対象にはなりえない事象なのではなからうか。ハイデガーがそれに気がつかないはずがない。おそらく、死を記述したり、書きものにして後世に残すことはできないが、死の瞬間には己の死を知ること

は可能であり、その時には哲学史上最大の謎を解くことができるという確信を得たのではなからうか。生きている間には不可能でも、死を含めた全生涯をかけて自分の哲学を完成できるという確信である。ハイデガーにとつて死は物理的な人生の終わりでも、己の哲学の完成を意味した待望の瞬間であつたかも知れない。

ハイデガー自身は下巻の出版断念をそれほど残念がる様子もなく、大学の講義・講演会・著作や出版と、一流学者の道を歩み、老後は世界中からの信奉者や礼賛者に取り巻かれて幸せな生涯を送つたらしい。

この己の死が持つ意味を知ることが、ハイデガーだけでなく、誰でもが享受できる特権である。また、生きている間は死後のことは絶対に分らないが、あの世がないとはいえないのである。懐かしい人々に再会できるかもしれない。また、心がけさえあれば、人間の最大関心事Ⅱ己の死の謎を解明できるかもしれない。大哲学者気分で最期を迎えるのも、満更ではないかもしれない。

「山恋」の想い

阿部 典文

私の山登りは、中学二年生の時の箱根・神山の登山に始まる。そのとき仰いだ富士山の姿に感激し、今日まで「山恋」が持続されている。この山恋に拍車をかけたのが、我が家の屋上より、偶然遠く高尾山の山稜越しに望んだ「雪を頂いた高峰」であつた。

山登りの初心者にとって、雪山登山は高嶺の花。しかし冬の晴天の日に繰り返し望む白銀の山の姿は心の中に焼き付けられ、憧憬的となつた。

やがて登山技術の向上に従い、行動半径が低山から奥秩父や南アルプスに拡大すると「心の中に秘められた高嶺」は次第に鮮明な実体のある山の姿に置き換えられて行つた。そして鳳凰三山の残雪豊かな賽の河原から、野呂川を隔て直接仰ぎ見た日本第二の高山「白峰北岳」が山恋の原風景として定着した。

この「北岳」への登山は、高校二年生の夏実現した。

信州・高遠から北沢峠經由、野呂川源流を辿るコースは北岳登山のヴァリエーション・ルートであり、夏山シーズンが終わりに近い八月末の事であつた。

それから二年後、私は伊那谷から入山し、南アルプス最南端・三千メートル級の「聖岳」から、白根三山・北岳までの二週間にわたる縦走を試みた。

当時の山日記の冒頭には、旧暦のお盆で帰省客を運ぶ満員のバス、小学校の校庭で繰り広げられた村人による盆踊り、気持ちよく食料の米を分けてくれた素朴な山村の人々の生活情景が記されていた。

予想しない事が起こるのは山行の常。臨時運休となつた森林鉄道の軌道沿いに、遠山川を二十数キロ遡る重い荷物のボツカが待ち受けていた。

南アルプスの山行の特徴は、北アルプスに比較して山の懐が深く、山麓のアプローチが長い事である。予定が一日遅れて登山口の大沢渡から本格的な登山が始まり、入山後三日目ようやく赤石山脈の鞍部の露営地に辿り着くことが出来た。

聖岳は南アルプスで一番海に近く、しかも東海道の街

道筋から望める山の一つである。私の登頂時は不幸にして台風が近づき、山頂を包んだ濃いガスの為期待していた伊豆半島から太平洋への眺望は得られなかった。

赤石岳は東京都心から望める南アルプスの高山であり、山頂に立って「遙々来つる哉」との感慨に耽った。

山頂付近の雪田には墜落した飛行機の残骸が散乱し、戦争の傷跡が残されていた。

塩見岳には、弘法大師が山頂から海を望んで「塩」を麓の鹿塩鉱泉に呼び寄せたと伝えられる伝説があるが、地形的に考えてこの山からは海は見えない。

北岳には、塩見岳北面のカール状のガレ場より雪投沢を下り、大井川左股を横切って、日本で第四の高山・間ノ岳経由の登山道を選んだ。この付近は人里から隔絶された南アルプスの秘境であり、数日間誰一人とも遭遇せず、静穏な山の雰囲気を満たした。

結婚して山登りと疎遠になると、私は「書斎の中の岳人」に変身した。書棚に並んだ山岳文学書のコレクションを夜静かに引き出し、地図の上で未知の山への机上の山行を楽しんだ。

丁度その頃、鎌倉時代の日記紀行書『海道記』手越の宿（静岡市）の項に「北ニ遠ザカリテ雪白キ山アリ間ヘバ甲斐ノ白峰トイフ」との記述と、和歌「惜シカラヌ命ナレドモ今日アレバ生タルカイノシラネヲモミツ」が添えられている事を知った。

南アルプス縦走の知見から「甲斐の白峰」は聖岳若しくは赤石岳の可能性が強いが、「書斎の岳人」にとつては、「山恋」の原風景となつている白根三山であつて欲しいと、深夜の書斎で地図を広げながら、学生時代の激しかった山行に思いを馳せていた。

子育てを終えると、東京近郊の低山歩きを再開した。久しぶりに訪れた曾遊の奥多摩や奥秩父。『日本百名山』の著者・深田久弥の終焉の地「茅ガ岳」などから望む雪を頂いた南アルプスの連山の展望は、若い日の「山恋」の原点を鮮やかに思い出させてくれた。

そして今、年老いた私は命あるうちに再び「白峰北岳」の山頂に立つ日を夢見ている。

愛犬ベルの死

児 玉 忠 雄

昨年七月一日夕、愛犬ベル十六才が死んだ。寿命を過ぎて嬉しさと不安の交錯する日、猛暑に耐えかねたのか、突然の別れだった。

二か月前、五、六段を滑り落ちて蹲まるベルを入院加療させた。頭を打ち、神経が少しやられたとの懇切な病院長の診断だった。

六月初め、東北リアス海岸旅行で、宮古浄土ヶ浜、龍泉洞、遠野、中尊寺を巡る旅中の電話で、病状に一喜一憂した。旅後すぐ病院に駆けつけ再会した時は、少しやつれて不安気な愛犬を抱き、思わず涙した。それから一カ月のリハビリで食欲も元通りに回復したが、大好きな散歩はままならず、不自由な右後脚を支えながら頑張つて歩こうとした。時折「もう疲れた」というように私を見上げる目がいらしかった。

七月一日、ベルは朝飯のときから、家内の足許に纏わ

りつきたがった。「今日はいやに甘えるね」と言つて、午後私は、親しい友人と近くの麻雀荘に行った。七時過ぎ携帯電話が鳴った。「ベルが……」と言つて途切れた。驚いて家に走った。台所の壁に背をもたせ、ベルは静かに眼を閉じていた。

何回も撫でると、まだ体は温かく柔らかで、死んだことが信じられない平常の顔だった。

死に目に会えた家内の述懐によれば、誰かを探すように玄関に通じる戸の硝子に鼻先をつけ、諦めたように食堂に戻ろうとした途中、「ウオーン」と鳴いて倒れたのが最後だったという。静かに苦しまず、家内に抱かれたまま旅立つて逝ったそうだ。

ベルは怜悧で、人によくについて可愛がられた。血統書つきの端麗な容姿だった。生後二カ月で長男の飼犬としてやって来て、最期まで家族の一員であり、そしてまた時折は夫婦の鎧（かすがい）となり、一挙手一投足が皆の笑いを誘い、心を和ませてくれた。

ベルの死を知り、近所の奥さん、犬友達が、百合や桔梗の花束を抱え、涙ながら弔問に来てくれた。三日間、

氷で遺体を冷やしながら徐々に硬直していく頭、手、足に触り、別れを惜しんだ。

七月四日、王禪寺の霊園で二男夫婦、孫ら、家族揃って丁重な葬儀を行った。ハワイに家族旅行中の長男からは心の籠った弔電が送られてきた。花に埋もれた顔は覚りきった平靜な表情で、あらためて深く様々な想い出が去来し、生の儚さに心打たれた。

茶毘に付した時、煙突からゆつくりと一条の淡い煙が立ちのぼり、空の果てに消えていった。暑い夏の午後だった。この実感は強く深い。愛した者が突然姿を消し去る。「姿がある」という、ただそれだけで幸せな実感を失う不幸の重さ。

応接間の一隅、小さな朝鮮机にベルの遺影を中心に、幼犬から老年に至る写真を飾り、遺髪、首輪、家族の追悼文を供えて仏壇とし、朝な夕な、水や菓子などを供えては追憶に耽っている。

少子高齢化、核家族化の進むなかで、我が家も他聞に洩れず、息子は二人共独立別居し、夫婦二人の生活が続いている。十六年余も生活を共にし、相愛のパートナー

だった我がスヌーピーを、突然失って呆然自失、悲嘆に暮れ、一時はあのペットロスに襲われ、虚脱感、悔悟、など、追想の度に、悲しみに打ちひしがれている。

喜寿を過ぎてこの数年、愛犬の死を機に、一層自分の余命が幾許も無いとの思いが深くなる。身近に親友知人の訃報を聞けば尚更である。そこで、昨年から積読の本類を処分し、身辺整理に手を付けている。「吾が生既に蹉跌なり、所縁を放下すべき時なり」（徒然草）の境地で、これからの残照の日々を送るだろう。

それでも、愛しのベルは、いつも心の中に生き生きとした面影を現し、消えることはない。



国債発行ウルトラC

鳥海 博

一月二十七日に日本の国債が格下げされるという報道がありました。八年九ヶ月振りの格下げで、またかという感じ。狼少年もどきですが、国債の価格の暴落には至らず、まあ事なきを得ました。国債や地方債を含む公的債務が今やGDP比二・一七倍ということで、先進七カ国（G7）中で最悪の状態になっていますから、危ない状態であるのは確かです。「何とかなる」「誰かが何とかしてくれる」は、もういけません。

国家の支出が九十兆円で、税収が四十兆円ですから、五十兆円ほど足りません。これを国債で埋める。こういう無為無策をここ十年十五年、繰り返して来ましたが、公的債務が見るうちに膨れ上がりました。国全体としてはこんなに借金があるのに、国債が信用され、依然として安い金利で国債が発行出来るといふその背景には、一つには、勤勉な日本国民が働いて稼いだお金を

無駄に消費しないで貯蓄に回したこと（個人金融資産が千五百兆円あります）、もう一つは、日本の企業には国際競争力があって、対外取引において儲かっていることがあります。世界第二位の外貨準備高もあります。

さしたる収入増大策も無く、また支出抑制策も無いとなると、残るは資産の売却による彌縫策です。個人で言えば、ダイヤモンドやミンクのコートを買ったり、土地を処分したりですが、国家の場合ですと、例えばの話、国会議事堂を売ってしまうとか、東京大学を民間に払い下げるとか、金目のものは、幾らでもありそうです。日本国家もいよいよ食えなくなったら、尖閣諸島、竹島を中国や韓国に売り飛ばすことになりそうですね。北方領土も取られっ放し。沖縄もマゴマゴするところかの国に取られてしまうかも知れません。

財政の借金体質は、ここ当分は変わりません。膨れ上がった歳出はそう簡単に減らせませんし、一方、収入の方も消費税以外に目ぼしい財源は無さそうですから。斯くなる上は、これから発行する国債と過去の累積債務とに関し、然るべき方策を考えないといけません。

そこでいくつか、関係各位にご提案申し上げたいことがあります。その一つは「永久債」の発行です。借りたお金は永久に返さない。金利だけは払う。そういう仕組みの債券です。借り賃だけは払うけど、貰ったも同然のお金ですから、借りたお金を安心して使えます。五十兆円発行しても、金利が1%なら、五千億円だけ、予算措置を講ずればいい訳です。

もう一つの方策は、「物価連動債」です。これは発行可能なように二〇〇四年に法制面の手当てがなされましたが、ただ、これを買うのは特定の金融機関だけで、多くの規制が残されているので、流動性も低く、その残高も八兆円足らずに過ぎません。これを一般国民も買えるようにすれば、「ハイパーインフレ」も怖くありません。

更にもう一つの策は、累積債務の株式化です。やや行き詰まった企業が時にこれを行います、概ね債権放棄に近い、見掛け上は債券に代わって、株式が手元に来るんですが、民間会社の場合は、無配であったり減資されたりで、実際には無価値の「紙くず」なのかも知れません。しかし、国家債務の場合は、国家には国有財産

を始めとする豊富な資産がありますから、無価値の有価証券にはならない筈です。どういう形で株式化するかが見物ですが、電電公社や国鉄、専売公社など、株式会社に变え、公開・民営化して成功した例もありますから、国債保有者は、「国会議事堂株式会社」や「東京大学株式会社」の株主になれるかも知れません。

少し冗談めきますが、国家と国家のM & A（合併・買収）も、近未来に起こり得るかも知れません。日本には優秀な人材が居る。世界に冠たる技術がある。あるいは蓄積された資本やインフラがある。一方、資源はあるけど、人や技術やお金が無いので、世界に雄飛出来ない国がある。互いの利点を上手く搾り合わせれば、T P Pよりずっと効率の良い統合国家ができるかも知れない。そんな絵空事的な解決法もありそうです。

それにつけても、これからの日本に取って一番大事なのは、人材の養成・確保でしょうね。一に勉強、二に勉強、三四が無くて五に勉強。目先の不況感・デフレ感はなかなか消えませんが、刻苦勉励・精励恪勤のDNAを持つ日本国民に大いなる期待を持っています。

ドイツ・オーバアマガウの地へ

西川 知世

それは三年前のいつだったか、友人に「十年に一度上演されるキリスト受難劇を観に、ドイツのオーバアマガウに行こう」と声をかけられて始まりました。

私と友人は日本ルーテル教団・東京ルーテルセンター教会というルーテル派の教会に属していますので、ドイツに行くなら、宗教改革の地・ルターの足跡を巡礼して、オーバアマガウへ入りたいということになりました。バッハはルターのために礼拝音楽を作曲していますので、その道はバッハ街道と重なります。アイゼナハ↓エアフルト↓ワイマール↓アイスレーベン↓ライプチヒ↓ビッテンベルグ↓ベルリンと、ドイツの中部を横断してスイス国境近くの田舎町に行きたいとなりました。

欲張りな企画をどのようにすれば実行できるか、旅行社に三十人のツアーの企画を持ち込みました。教団の機関紙に募集を出し、人を集め、金額やコースを設定しま

した。出発半年前からユーロが下がり、嬉しい誤算もありました。こんなふうに北海道から沖縄までの仲間を揃えた、無謀とも思えるツアーの主催者になったのです。

一番大切なことは三十人分の席の確保です。売り出し日は上演二年前の一月一日、世界中からいつせいに予約が始まり、六ヶ月間の上演にもかかわらず短期間に売り切れるということでした。旅行社のドイツ支社に手配を頼み、万全と思っていましたが、結局大幅に売出しが遅れて八月に席が確定しました。ドイツらしいのは、宿泊パッケージになっていて、座席と宿泊がセット、観劇の日の昼・夜食もセットされています。私たちは中間の八〇〇ユーロ、六月二十二日としました。そのクラスでは、オーバアマガウの町には宿泊できませんが、隣のペンションです。分宿は心配でしたが、行ってみたら、かえって静かな綺麗な村で大満足でした。私の泊ったところは村のパン屋さん。

さて、肝心の受難劇は村芝居という想像を遥かに超えてすばらしいものでした。巨大な半野外劇場で、客席には四千人も入ります。上演時間は午後二時半から、夕食

をはさんで夜十一時過ぎまで。芝居の途中の休憩はありませんから、トイレのことを考えて、せっかくのドイツビールもワインもこの日は我慢。バスでペンションに帰ると、すでに寝静まっているペンションの裏口から、朝出るときに預かったキーでそっと入ります。ペンションの人は起きて待っていてくれません。いかにもドイツです。

六月の舞台の背景は、九時過ぎまで明るい夏至の夜空です。ドイツ語はわからないのですが、聖書に忠実な場面ですから、手に入れた日本語訳の台本を片手に満喫しました。俳優、コーラス、オーケストラ、監督、裏方、運営すべて村人が総出でやるのです。私たちが昼食を食べたレストランのウェイターは、夜に俳優として出演するのだと自慢していました。この村に生まれ、学校に行き、生活すべてがこの受難劇のためだけにあるといっても過言ではありません。四百年続いています。前の大戦では、ナチスのヒットラーのユダヤ政策にも利用されたという歴史の痛みもあります。現在もユダヤ社会から上演中止を要求されています。

日本ではキリスト教者になることは、ある種、土着と決別していくことですが、この国境付近のドイツの小さな村では生活のすべてに土着の信仰として根付いているのが新鮮な驚きでした。

現実とも思えないほど充実した十日間の旅行を終えて興奮もさめやらないときに、立て続けにNHKで特集が組まれてテレビ放映されました。ご覧になった方もいるでしょうか。その画面を見ながら、同行した仲間たちと、十年後どうする、今度はスイスとオーバアマガウという手もある、などと話したことでした。



掌編小説勉強会

昨年(2010)の二月、三月に相次いで東京新聞と産経新聞に当クラブの紹介記事が載り、「掌編小説勉強会」の合評会風景も取材されました。その効果もあり、昨年は合評会への見学参加者が増えるとともに、新たなメンバーも加わりました。

四年前発足以来、メンバーは固定していましたので、新人の加入は画期的なことであり、有望な新しい書き手が、すでにこの勉強会に新風を吹き込んでいます。

現在メンバーは、男性八名、女性二名の十名、昨年より男女一名ずつの増えました。加えて合評会には講評専門の常連が二、三名出席し、読み手の目線からの貴重な意見を下さいます。

掌編小説は、短編より短い(ここでは、原稿用紙十枚から三十枚)小説で、小説を書きはじめには適當の長さといわれます。この原稿を隔月一編書き上げて合評会に掛け、メンバーがお互いに真剣な評議を行った結果を

織り込んで作品を仕上げます。

合評会はこの一月で二十四回を数え、約百八十編の作品を書き溜めました。その内容は、会社絡み企業OBらしい小説ばかりでなく、戦中・戦後の貴重な記録、時代小説、家族・家庭もの、社会派、そしてもちろん恋愛小説と多様です。

今年は、この中から秀作、傑作を選んで念願のアンソロジーを編みたい。そして、その成果を時代に先駆けて電子書籍の形にして世に出したい、と考え、その第一歩を踏み出しました。

すでに、三人三篇の作品を取めた電子ブック『大人の玉手箱』を「パプー」を通じて無料公開しました。

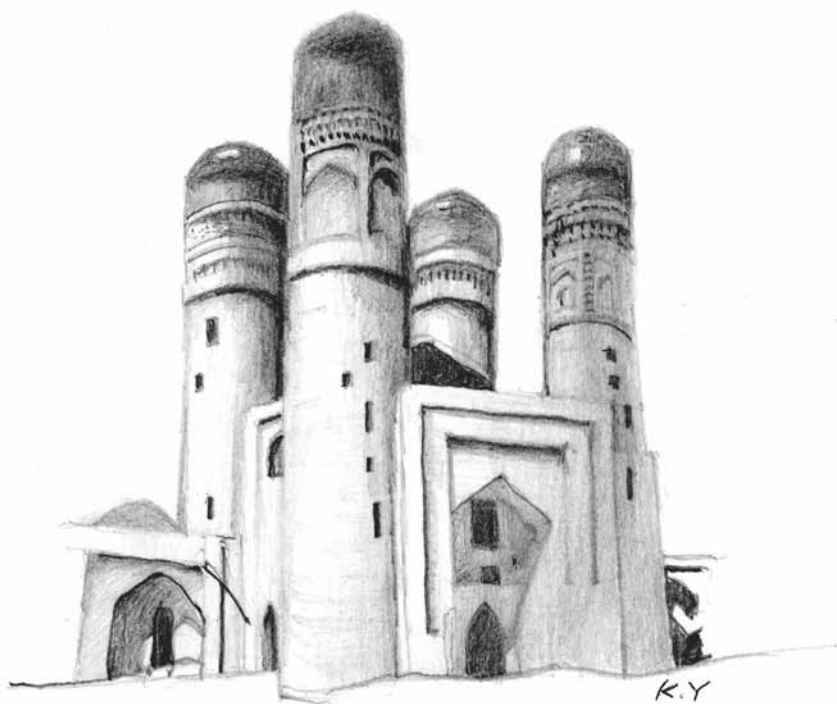
次のURLを開いてご覧になって下さい。

<http://p.booklog.jp/book/21915>

今回は小さなデビュー作ですが、引続き本格的な作品集を編んで電子出版をする予定です。ご期待下さい。

(プロマネ 濱田、西川、廣澤)

創作短編



岐れ道

馬場 真寿美

日本海の怒濤さかまく堤防の上で、凍てつくような寒まじりの寒風に晒されながら、私は一人、猛り狂う夜の海を見つめていた。足元では、轟く波が壁に当たって砕け散り、巨大な渦を卷いている。

私は、暗い海の中へと、深く、深く沈んでいった。

薄く目を開く。と、思いがけず間近な距離に、ぼんやりと瓜実顔の女の顔が見え、「大丈夫ですか」と私に問いかけた。四方が白い壁に囲まれている。かすかに消毒薬のにおいのするミスト。

—— 生きている

不覚にも涙がこぼれた。

私は幸せにはあまり縁のない男だった。父は早くに亡くなり、母の女手一つによって兄と私、妹の三人は育てられた。しかし、どういうわけか、母は兄と妹ばかりを

偏愛し、私を嫌い冷たく遠ざけた。その理由の分からない母の不公平さは、思春期に入った私をひどく苦しめたものだ。だから、予科練の募集がかかると、私は迷わず進んで入隊したのだった。

予科練の日々は峻烈そのものだったが、私には心穏やかに過ごせる避難所のようなものだったのかもしれない。三年後、故郷に戻ったときには、私はすでに世間の理不尽さもある程度、諦観できるほどに成長していたのだから。

まだ旧制高等学校に通う学生的身であつた私に、縁談が持ち込まれたのもその頃である。先方は、若くまだ色香の残つた未亡人と、その一人娘の瑠璃子である。どこで私を見初めたものか、ぜひとも婿にという。瑠璃子は色白でぽつてりとした肉感の、美しい容姿の持ち主だったから、私に異存のあるはずもない。それにやはり、私は早く家を出たかつた。結納が取りかわされ、早くも婚約者気取りで時に瑠璃子のもとを訪れていたある日のことである。突然現れて驚かせてやろうと、いたずら心で裏木戸に手をかけた私は、いつもとは違う気配にはっと

息を呑んだ。

——客でも来ているのだろうか？

出直そうかと考えていた矢先、媚びを含んだ若い女の嬌声が聞こえてきた。瑠璃子だ。見れば、庭先で瑠璃子が見知らぬ男とふざけ戯れている。私の心は妖しく波打った。そのまま思考が停止してしまったのか、その後どうやって家に帰り着いたのかすら記憶にない。

思えばあの時、考え直すべきだったのだ。この悲惨な結婚に足を踏み入れる前に。けれど、若さゆえのプライドと美しい瑠璃子への未練がまさり、私は目をつむり、結局予定通り彼女と式をあげた。

私は無骨で無口な男である。享樂的で派手好きな瑠璃子にとって、私との結婚生活はさぞかし退屈なものだったろう。母親と別れて北陸の豪雪地帯に赴くことも、瑠璃子が嫌がったため、私は赴任先に一人で下ることを余儀なくされた。そしてお定まり、東京で瑠璃子に男ができたようである。私は彼女に請われ、離縁状を送った。

雲がいつしか雪国特有の水分の多いぼた雪と変わり、夜の海を見つめていた私の肩にしんと、孤独と絶望

感とともに重く降り積もっていった……はずであった。

「——さん！——さん！」

霞のかかった記憶の向こうから、私を呼ぶ声が聞こえる。ゆっくりと目を開けると、いきなり大福のようななまるい顔のドアップ。なぜか懐かしい。泣きだしそうだと、「お父さん、ああ良かった！意識が戻ったのね」と、一人の女が顔をくしゃくしゃにして涙ぐんでいる。

「……富美子？」

傍らに立つ白い服を着た若い男が（医者なのだろう）、ペンライトで私の眼を交互に覗き込みながら、

「もう大丈夫です。発見が早かったから、後遺症もほとんど残らないでしょう」

と微笑みかける。

「……」

私は、わけの分からない顔をしていたのだろう。

「お父さんたら。お風呂場で倒れていたんですよ。もう、びっくりして……」

そこで、ようやく私の頭はゆっくりと回転し始め、記

憶が巻き戻された。風呂から出て体を拭いていたところまでは覚えている。それから目の前が真っ暗になり、意識が遠のいていったのだっけ。

そう、実際には私が瑠璃子と結婚することはなかったのである。あのとき、私は憤然と立ち去り、仲人となった人に事の次第と、この縁談を破談にしてくれるよう頼んだのだった。とはいうものの、当時うら若かった私にこの失恋の痛手は大きかった。人間不信にもなった。大学では呆けたように空虚な年月を過ごしたものである。

ようやく傷も癒え、大学を卒業、就職して見合いの話を持ち込まれたときのことである。話を持ってきてくれた親戚の叔父さんは、姉妹の二枚の写真を取り出して見せ、「どちらでも、好みのお嬢さんを」と薦めた。姉の方は瓜実顔のなかなかの美形である。美人はみな似るものなのか、どこか瑠璃子を思い出す。妹はというと、ブスではないものの、とても美しいと言ひ難い。けれど、澁瀬としていて、少し大きめの口でニカッと笑っている様子に愛嬌があった。私は迷わず「妹さんを」と言ったものである。

日本海沿いの北陸の辺境な豪雪地帯にも、富美子はいそいそとついてきてくれた。見たこともない大雪に興じて、隣の家の屋根の雪かきまで買って出ていく。私の少ない給料をやりくりして、息子と娘二人の子どもたちもりっぱに育てあげてくれた。富美子の明るい性格のおかげで、家庭に笑いの絶えたこともない。

そのとき、心配して駆けつけてきた息子と娘が、それぞれに子どもたちを連れてきたため、にわかに病室が騒がしくなった。まったく、心配して来てくれたのはいいが、「おじいちゃん、おじいちゃん」と、蜂の巣をつついたような騒ぎである。

意識を失い、生死の境を彷徨っていたときに見た幻の人生風景。あれは一体何だったのだろうか。

人生にはいくつもの岐路があるという。

だとすれば、私はどうやら道を間違えずにこれたようだ。そう思っていたと、病室の喧噪に紛れて今度こそ本当に涙がこぼれ落ちた。

おたふくが一番だと呟きながら……。

薩摩湧水町の三姉妹

古川 さちお

鹿児島県栗野町幸田（現湧水町幸田）という草深い小村に生まれ育った平川幸二郎は、幼い頃祖母スエに連れられて、隣の吉松によく行った。吉松町は平成七年、栗野町と合併し「湧水町吉松」となっている。

そこにはスエに輪をかけたように傲慢なスエの長姉ナカが、豪農米内家の権力者として暮らしていた。ナカは、後沿いだったにも拘わらず、未亡人となってからも、米内家の指針・経済を一手に取り仕切っていたようだ。隠居屋に住まいながら、母屋から通う若い女中をこき使い、厳格な生活を営んでいる。

「おナカ婆さん」は、気に食わないと誰でも怒鳴りつけるが、幸二郎だけには信じられないほど優しくかった。しかし、祖母のスエには訪ねた途端から怒鳴り散らし、気の強いスエも負けずに言い返すから、口喧嘩が絶えない。

だが、恐ろしいほどの喧嘩を聞きながらでも、幸二郎は「おナカ婆さん」がくれる、取って置きの干し柿や砂糖金柑を頬張り、この上もない幸せを感じるのだった。

喧嘩がひどくなると、スエは幸二郎を連れて、湧き水の綺麗な竹中池の横の小道を登り、次姉チヨの嫁ぎ先に移動する。チヨ婆さんは、これまた未亡人で一人暮らし、昼は煤けて赤貧の暮らし。それでも大の焼酎好き。酔うと小声で歌う優しく愉快な婆さんだった。

幸二郎の兄弟姉妹では、長姉のサト子、長兄文一から幸二郎と、七歳の春になると吉松行きが始まり、それは二、三年続くことになる。三人の間では、変わり者の婆さん三人の話が、後年忘れられない思い出話となる。

話を前に戻そう。明治二十年代日清戦争の前だ。栗野町別府村士族の旧家池ノ上家に、美人の誉れ高い三姉妹がいた。前記のナカ、チヨ、スエの三名だ。

明治維新の後も、昭和二十年の日本敗戦の時まで残っていた「士族」「平民」などという身分制度は、何の特典もなく実質無意味だった。にも拘わらず、士族で豊か

な地主階級であれば、中には一般平民を見下し、特権階級意識を持つ者も少なくない。件の三姉妹もそのような意識を持ち、ことば使いから態度まで不遜だった。

当時としては、そのような「お高くとまったところ」が一部で評判がよく、近郷の士族富裕層にもてはやされる。池ノ上家長女のナカは、若くして病弱の妻を亡くした吉松町の豪農米内金之助の後添いとして嫁入りした。お高い初婚のナカにして、後添いで我慢したのは、自身の年齢がやや行き遅れ気味なのと、大人しい金之助の心の豊かさだった。

次女のチヨは、ナカの奨めで金之助の弟才次郎に嫁いだ。才次郎は放蕩息子で、チヨは気が向かなかったのに、ナカの奨めには抗しきれずに嫁入りしたものだ。そして後々、身上をつぶした夫の死後は一人息子一家とは別居、件のあばら家に一人暮らしをしているのだった。

さて、幸二郎の祖母スエ、即ち池ノ上家の三女は幸田村の豪農高本家の分家にあたる平川家の一人息子慶蔵の嫁になった。慶蔵はなかなかの美男子で、スエには格好の夫と言われた。が、惜しむらくは事業経営能力に欠け

ていた。

夫婦ともに、氣位が高く、子供七名を士族の子として恥ずかしくない人間に育てたつもりが、全くあてが外れてしまう。子供たちは意味のない「士族」の身分を馬鹿にする。慶蔵は村の小学校に土地を提供するという慈善事業を行なう一方、事業に手を染める。製材所をやったり、酒屋を経営したりするが、やること全てに失敗。

本家から分けられた財産のほとんどを失う。長男実光が家督を引き継ぐ段階では、家屋敷以外全ての田畑・山林は借金の抵当に供されていた。

明治中葉に美形を誇った三姉妹も、その終末は必ずしも幸せとは言えない。

長女ナカは米内家にあつて家族中に指図をし、自分の意思を通した。「お前は医学校に行き、軍医になれ」とか、「お前は女学校を終えたら、看護婦になれ」、「あの子は頭がいいから、大学の工学部に入れて鉄道の技師で大成させよ」、「お前は別に取りえがないから、師範学校に入

り教師になれ」等々。考えた末とはいえ、自分勝手な指示を与える。それは、戦前の社会がそのまま続けば成功したと思われる。

ところが、敗戦で世の中が様変わりしたので、ナカの指示を受けた子や孫たちは、当初の目的を半ばしか達成できず、ナカから離れていった。長男の重雄は戦後の土地改革で三分の二の農地を失ったにもかかわらず、残りの田畑と山林を守り、なんとか一家の生計を豊かに維持することができた。しかしながら、義母ナカの贅沢と高い氣位を維持することはできず、女中も解雇したので、馴れない介護も引き受けねばならなかった。

ナカは義理の弟の長女文恵に、ある日突然「お前は幸田の平川家の末息子嫁になれ」と命令した。文恵には晴天の霹靂だったが、周りが取り持つて、命令は実現する。かくして、文恵は幸二郎たちの義理の叔母となった。

それをきっかけにして、米内家と平川家はより近い親戚となる。後年、米内家では、文恵の姪で聡明な真理子の婿養子として幸二郎を迎えようという話が持ち上がった。しかし幸二郎は、「気がすすまない」として断り、

真理子を悲しませた。既にナカは亡くなっていたので、結婚を強制するものはいなかった。もし、ナカ存命だったらどうなっていたか。幸二郎は冷汗三斗の思いだ。

次女チヨは長男の家に引き取られ、一時生計を共にしたが、身体の不自由を失い、施設に入れてもらった。

三女のスエは孝行息子実光の才覚のお陰で、隠居屋を総檜造りに改造してもらい、慶蔵とは別に一人で好きな温泉旅行などを楽しんだ。また、幸二郎たち孫の遊学先を頻繁に訪ねる。食糧難の頃は米の運搬と称して、孫の下宿先や娘の嫁ぎ先を訪ねた。趣味の旅行を満喫したようなものだ。

ただ、長寿には恵まれず、直腸がんに侵されて、慶蔵に先立つこと六年であの世へ旅立った。享年六十四歳。それでも人並み以上の幸せな晩年だったろうと、孫の幸二郎は思う。

据え膳食うは男の恥

中 江 賢 三

「近頃、学生のキャリアアカウンセリングをしているんだ。無償でね」

と、Mは少し胸を張って友達に言った。

「無償？ 七十代の君を二十代の学生が相手にしてくれる——そんなありがたいことはない。若さを吸い取る分、君は応分の報酬を払うべきだよ」

「それでは買春になっちゃうじゃないか！」

二人は笑った。

ある相談日、色が黒く野性的でセクシーだが、通った鼻筋が少なからず知性を感じさせる女子大学生Fが来た。

「セックス産業で働きたいんです」

「ええっ！ それ本気？ そんな影の分野を目指すなんて？」

「ずっと公務員と教員を目指していましたが、どうも

あきたらない。きれいごとでなくて、とことん人間性の悪の部分に迫ってみたいです」

「悪と認識した上でセックス産業へ？」

「だって人間だれしもそんな部分があるでしょう？」

「そりゃそうだけど……」

「悪であっても、だれにもあるのだから避けなくてもいいのではないですか？」

「うーん」

「それに、お年寄りも悩んでいらつしやるそうですよ」

「ちょっと待って！ それは君が心配することかな？」

「だって、本当はそうじゃないですか？」

つい、Mは自分の目が彼女のバストに行こうとするのを慌ててそらせた。

「実は、一次を受けてきたのです」

そういつて彼女は、得体のしれない道具と小さな怪しい模様の丸い袋を机の上に置いた。そしてその袋を指さして微笑んだ。

「きれいでしょう？」

その表情は、あえて突っ張っているようにも見え、本

心その会社に就職をしたいようにも見えた。そして、誘っているようにも見えたが、これはMの考えすぎであつたかもしれない。

「小説にはセックスの話材が多いですよ。セックスを探索すれば人間が少しでもわかるように思うのです」
「理解できないでもないが、小説だつてポルノ小説以外は性のことだけを書いているわけではない。セックスを研究しなければ人間がわからないものかね。まして、セックス産業に入らなければセックスのことがわからないというものではない」

「でも私は、そっちの方から究めたい。そのことを深く知らずに人間をしているなんて、臭いものにフタをすることです。そしてそのことで人を喜ばせたい。」

自分の心の奥底を覗き込みながら、Mは揺れた。

「据え膳食わぬは男の恥」

「この子は本気だ、何としても止めねばならぬ」

その夜中、Mは彼女とホテルの部屋にいた。そして、
.....

明け方、

「どう？ しつかり研究できた？ ぼくはそれどころでなかったけど」

「.....」

——というところで、Mは、はつと夢から覚めた。

「なあんだ、夢か」と思つてすぐに「夢でよかった」と思い直した。そして、夢であつてもこんな行動をしてしまふ自分を恥じた。でも夢はクリエーターだ、思つてもみないことを見ることもある。それにしても夢の中であつても最後の一线を越えなくてよかったな……。

次の相談タイムで、Mが妄想を払いのけて待った彼女は、それを吹き飛ばすリアルな内容の話をした。それは、就職希望の企業主催の大人たちの仮装パーティーに出たというのであつた。Mはその中身を聞かず、

「研究成果はどのくらいあつたのかな？」

と尋ねた。

「それが先生、研究どころか刺激がきつすぎて、私も友達も気分が悪くなつて。同室の友達は帰ってから、気

を失つて救急車を呼んだのですよ」

「そういう仕事をしなければならぬ企業にやはり行きたいままなの？　その企業の社員の人たちといつしよに働きたいという気持ちになったの？」

「快楽の深淵をのぞいて気づいたこと、同じ性でも愛とセツトの方がやはりよっぽどいい。快楽のあとの空虚や棘。そこに集まる人たちの多様、異様——そういうことも研究成果なのかな」

「そりゃそうだよ。研究にあたったその結果、出てきたものだから……」

潮目は変わった。

Mは二つの話をした。一つは「存在の耐えられない軽さ」の映画——。

「ハンガリーの主人公の医師はどうしようもない女たらし。女から女を漁り歩いたあげく、最後に選んだ女性には、金持ちの女優でなく、貧しい社会活動家だった。そして彼自身、自分という存在の軽さに耐えきれず、とつた行動は、おりからハンガリー動乱で侵攻してきたソ連

軍の戦車の前に立つことだった。命を投げうって……」

もう一つは、本田宗一郎の話だった。

「彼の若いころの芸者遊びは有名だ。そして日本の赤線を廃絶したのは、晩年の本田宗一郎会長率いる売春禁止審議会だった」

黙って聞いていたFが口を開いた。

「性に関心を持つていくせに、聖人ぶっている人は嫌いです。私は話に出たその人たちのように性に強い関心を持つ、悪い女であつてもよい。しかし、彼らのように何かできそうな気がする。それは——」

悪びれず子供たちに性教育ができそうなことです。エイズ絶滅キャンペーンの運動もできるかもしれない」

「いいことだな。だれにもできることではない。でもメシはどうして食べる？」

「ふつうに就職して『人』を研究します。それでも性への関心は失わず、性教育やエイズはNPOやボランティア活動で取り組めるかもしれない」

カウンセリングされたのはカウンセラーであつた。

（以上は、実在しない人物のまったく架空の話です）

ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞

西川 知世

夏には猛暑の日が続き、冬は記録的な寒波到来となった。気候のニュースが新聞に出ない日はないといった按配であった。体調を崩された方も多くいらつしやるかもしれない。ペン俳句でも亀井さんの欠席投句、石川さんの春以降の長期欠席と心配が重なったが、六、七名ほどのメンバーが集まり活発な句会が開かれている。

六月三日の句会には、志村良知さん、道村美恵子さんのお二人が参加してくださり、嬉しいことであった。志村さんはその後、ペン俳句メンバーとしてご活躍である。

笑い声が絶えず、楽しく元気に句会ができたことを感謝して、成果をまとめさせていただく。

空風の東京億の灯を点し

町の灯に倦み極月の橋渡る

人恋ふて赤き林檎に触れてみむ

新酒酌む七面倒な民主主義

海原に見えぬ国境鯨鍋

回転ドア出でて残暑の風の中

九十路まで辿り着きしやおらが春

石川 素屯

花種の店の賑はい春浅し

宴開けてポインセチアの緋に酔ひし

磯波を蹴立て「わっしょ」と神輿渡御

葡萄棚深く隠れる房一つ

中盤以降はお休みが続いたが、悠遊のために近作を送ってくださった。この欄を指して作句されたとお手紙にあった。嬉しい。「磯波を」の句、中七の措辞のリズムのよさが、いかにも勇壮な男たちの祭りを活写している。

妻さきに入る実家や松飾

親子して泉に影の重なりぬ

紅茶好きの嫁と付き合ひ焼林檎

ポスト覗けば一枚の枯葉かな

ポインセチア北の窓から海みえて

上田 信隆

妻、親子、嫁、今年は人事句に挑戦し、句幅を広げようとされている。「妻さきに」の句は、大概の方がそうだよなと思われるだろう。視点が正直でユーモア（俳諧味）溢れる。松飾の季語により、視点が上質なものになっている。

睡蓮の咲き始めゐてモネの池

林檎地に落としロシアの林檎園

朴落葉の音のからからつむじ風

川沿ひの白壁土蔵新酒汲む

かたはらに曼珠沙華咲く母の墓

大泉 子泉

「林檎地に」の句は、ロシアの小説を彷彿とさせるような素材である。そこから物語が始まりそうである。一転「かたはらに」の句は情緒的な句。すつくと立つ曼珠沙華と母のイメージが作者の内で呼応する。母の墓の断定が効果的。

初茜海の彼方に生れけり

子と孫の去りし静けさ四日はや

軒先をくぐる日脚の伸びてをり

山肌に広き流れや草を焼く

三重の塔を彼方に陽炎へる

亀井 弘次

三月まで投句を続けてくださった。年末に退会されるとお電話をいただいた。寂しい。ペン俳句創立時から、長く力を尽くしてくださったことを感謝します。「初茜」の句は、心象も重ねることができるとして雄大である。

なべて同じ葉色となりし梅雨入りかな

志村 良知

葉の先を極め翹割る天道虫

楽器負ひ弱冷房車を過ぎ行けり

茄子の馬に父の嫌ひし猫侍り

林檎食む深夜の母の病院に

「なべて同じ」の句で華々しくデビューされた。俳句は季節感が大切である。この句は梅雨時の色濃い湿った緑の感じが良く出ている。「林檎食む」の句、ご母堂を秋に見送られた。周辺はモノクロで林檎の赤だけが印象に残る句である。

魂が抜けてふらりと枯れ野行く

中村 晃也

花冷えの朝淹れたてのハーブティー

ホタル籠朝からジャズを口ずさみ

三代目布目確かな冷奴

賛美歌がやんで秋刀魚を焼く匂ひ

常にカメラを手にフォト俳句に備えられている。俳句を食欲に楽しむ姿勢に喝采。「賛美歌が」の句は新鮮。賛美歌と秋刀魚の匂いの二物衝撃の句であるが、二物の距離が上手くいっていて、句に深みをだすことに成功している。

文机の上の路線図日脚伸ぶ

中村 雅道

花万朶限りなく空狭めけり

夏日燦と穂高連邦屹立す

音も無く流星容れる北の海

信濃路の日暮れて蕎麦の花あかり

「花万朶」の句、今年は空を狭めるほどの桜が美しい代々木公園で花見をした。句会幹事としてご苦労を担って下さっている。大景を詠むのを得意とする作者だが、「文机の」の句は軽妙で春が近づき心浮き立つ心持がでている。

旅人になりたし街のかげろへる
今生に治らぬ病鳥帰る

水原亜矢子

つつましく嘘多き日や枯葉散る
枯葉踏む音の重なるシャンゼリゼ
初時雨ジャズ売る酒場さんざめく

お忙しい中、ときどき顔を出してくだって、句会がピリツとする。楽しい。「旅人に」の句、私も旅人になりたいと思っているひとりであるが、陽炎の街に立っているとき、その願望が湧き上がってくるのは作者の詩的感覚。

ふるさとの庭になお咲くさるすべり
花時計ふたたび動く五月かな
木の葉散る母と歩みし坂の道
そのうちに何うはずが十二月
故郷の電波かすかに除夜の鐘

玉山 和夫

ペン俳句句会には参加しておられないが、毎年この欄に投句をくださる。当クラブの最長老。俳風は悠々と自由闊達。「そのうちに」この句のような洒脱な俳句の世界に到達したいと思う。この欄でお会いできるのが楽しみである。



二〇一〇年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

二〇一〇年十二月で七年半を迎えました。年末で七十九回目の「ペン川柳」はクラブで最も古い歴史を誇る分科会の一つです。

いつもの黒薩摩銀座店で、喉越しをビールで潤しながらの昼間の勉強会に続けて、呑み放題の懇親会を楽しむだけでなく、時には場所と嗜好を変えての活動も計画したいと考えています。

古参のメンバーだけでなく、若いメンバーの参加を含む増員を期待しています。

時事・新聞川柳も悪くはありませんが、夢を大きく！文芸川柳を目指します。企業OBらしい悲哀と余裕を詠う川柳を詠みながら、大いに飲み喋る勉強会の伝統を維持していきたいと念じています。

見学（ひやかし）も大歓迎です。

以下は、常任メンバー十名が二〇一〇年に詠んだ句か

ら自薦の優秀（！）三句です。メンバーの「人となり」が良く表出されて興味深いですね。

（順不同）（一部は世話人の選句）

不言

- ① 上席にいきなり座る天下り（席）
- ② 貧乏神今日もお前か夢枕（夢）
- ③ 化粧法変えてみたけどブスはブス（変える）

酔雅

- ① ふりむいて花街のぞく枯れすすき（花）
- ② あれ美人お尻ずらして席つくる（席）
- ③ 盂蘭盆に元カノすうっと夢枕（夢）

酔深

- ① 清濁を併せ飲んだら濁に負け（飲む）
- ② 送られる門出の歌に恨み節（歌）
- ③ 俺の運爪先上がり古希過ぎて（爪）

昂

- ① 激論も水に流して縄のれん (水)
 ② 「オイ」社長夢で良いから呼ばせろよ (夢)
 ③ リタイアーこれですつきり義理を欠く (欠く)

だし

- ① 立つ立たぬ昔のボーナス懐かしや (立つ)
 ② ぬれ落ち葉演歌でたどる過ぎた夢 (夢)
 ③ 根回しをやったつもりが四面楚歌 (歌)

西貢

- ① あるはずの埋蔵金は掘りそこね (掘る)
 ② 真水好きやっぱり嫌ったビール割り (水)
 ③ 爪弾き晴らす恨みは核頼り (爪)

損得

- ① 飲むだけが打つ買うよりも長生きし (飲む)
 ② いやですね席順気にするOB会 (席)
 ③ また負けた詰めが甘いと爪を噛み (爪)

安兵衛

- ① そいつあ豪気あの世で李白と一斗飲む (飲む)
 ② 古いことまた掘り返す妻の角 (掘る)
 ③ 爪研いで憎い部長を引っ掻くの (爪)

井波

- ① 花吹雪昔合格今卒寿 (花)
 ② 席立たれ礼を言う間にガキ座る (席)
 ③ 気前よく掘った埋めたで国滅ぶ (掘る)

零門

- ① 知床で飲んで騒いで栄誉賞 (飲む)
 ② 席替えて悲喜交々の顔の色 (席)
 ③ もういやだ役満流す接待は (流す)

サロンの21

二〇一〇年の各月のテーマは次の通りでした。

一月	COP15
二月	米国の穀物戦略
三月	電気自動車の衝撃
四月	トヨタの躓き
五月	インド洋―米中印の争覇の場
六月	独占禁止法の経済学
七月	幻想の経済大国―中国 その一
八月	幻想の経済大国―中国 その二
九月	中国の地政学的大戦略
十月	アメリカのティーパーティー
十一月	繰り返される中国の反日キャンペーン
十二月	二〇一〇年の世界と日本

尖閣諸島衝突問題をハイライトに中国との関係が緊迫し、中国問題への深い関心がかがわれます。電気自動

車やトヨタ問題、アメリカの中間選挙の去就など多彩な問題が提起され、参加者の活発な議論が行われました。独占禁止法のようなややアカデミックな問題も取り上げられました。

(プロマネ 金京)



英語を読む会

昨年の会では政治、経済、歴史、紀行、文学、芸術など多方面に及ぶテキストが取り上げられ、英語で読む楽しさを充分味わうことができました。会は輪講形式で運営されていますが、担当講師の不足が悩みです。我こそはと思われる方の挙手を希望しています。

六月	中村 将陸	Fears Intensify That Euro Crisis Could Snowball
七月	阿部 典文	"Audience of Mikado at Yedo, by Sir Earnest Satow
八月	平尾 富男	"Three Men In Boat, by Jerome K. Jerome
九月	大泉 潤	"An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, by Adam Smith
十月	野瀬 隆平	Japan — U.S. Security Treaty
十一月	松谷 隆	MI6, The History of the Secret Intelligent Service (preface)
十二月	中村 将陸	Chinese Supercomputer Wrests Title from U. S. (プロメネ 大泉・中村(将))
三月	金京 法一	The New York Times Topics "Japan"
四月	松谷 隆	Body image, diet pushing Japanese women to lose weight
五月	野瀬 隆平	Unbeaten Tracks in Japan
一月	平尾 富男	That Daring Gypsy Strikes Again, and Anew (Metropolitan Opera)
二月	大泉 潤	The Iwakura Embassy to the USA and Europe

「800字文学館賞」の作品公募

昨年に続き、第二回の「800字文学館賞」の作品を募集したところ、二百十九編の作品が寄せられた。

審査の結果、残念ながら最優秀賞（深田祐介賞）については該当作品がなかったが、次の二編が優秀賞に選ばれ、賞金と賞状が贈られた。

優秀賞 「選ばれた親」 山端晶子

優秀賞 「幸せな顔」 渡邊政治

受賞者の一人、山端晶子さんは、一月二十日に開催された新年会に出席し、会員の皆さんに紹介された。

優秀賞に選ばれた作品を以下に掲載します。

選ばれた親

山端 晶子

その男の隣に、いつの間にか幼い男の子が座っていた。どこかで見たような、と男は思った。ここは多摩川の土手。男は会社の帰りにいつもここへ寄っては、川面の風を感じるのがささやかな楽しみなのだ。

男はその子の顔をのぞき込むように見て言った。

「坊や、お母さんはどうしたの？ もう日が暮れるよ。送ってあげようか？」

すると男の子が、

「おじさんも早く帰った方がいいよ。奥さんが首を長くして待ってるよ」と返してきた。なんとまあ生意気なことを言うかと、男は少しムツとしたが、なんとなく憎めない顔をしているので、「そうだなあ」と答えた。

「おじさん、子供はいる？」と、男の子がいきなり聞いてきた。

「……なんで、君はそんなこと聞くの？」

「ボクはおじさんのところに行くって決めたの。早い者勝ちだから先を越されちゃダメなんだ」

「え？ 俺のところに来るって……？」

男は、わけのわからないことを言う変な子だと思った。

「あっ！ おじさん、奥さんだよ！」と、男の子は後ろを指さした。

「えっ？」と、男は後ろを振り向いた。

確かに、妻がこちらに向かつて来るのが見えた。男はハッとして、

「どうして、アレが俺の奥さんだとわかったの？」と言つて振り返つたが、男の子は姿を消していた。嘩然としている男の傍に、妻がニコニコしながら近寄つてきた。妻は満面笑顔でさつき男の子がいたところに座り、男に寄り添つた。

そして妻は唐突に妊娠を告げた。

「……えっ！ 本当?！」

男にとつては七年も待つた待望の第一子だ。妻は男の帰りが遅いので待ちきれず土手までやってきたのだった。男はうれしさのあまり男の子のことをいつとき忘れていたが、妻に聞いた。

「おまえが来るとき、俺の隣に男の子がいただろ？」

だが、妻は誰も見なかったと言う。男は目を見開き、妻の顔をじいっと見てしばらく思案していた。そして男はやさしく妻のお腹に手を当てて言つた。

「俺たち、選ばれたみたい……この子にさ……」

幸せな顔

渡邊 政治

茂は目を覚ました。電車は雨の中を走っている。胸には大きな花束、送別会で部下たちから贈られたものだ。高校を卒業して四十二年間勤めた銀行、仕事だけが生きがいだつた。向かいの窓に老いた自分が映っている。その茂の手には紙が握られている。スナック「叶え」、みんなと別れてからほんの出来心で立ち寄つた店。その店のママの名刺。水割りを作りながら

「この名刺に望みを言うと叶うのよ」とママは言つた。茂は名刺に一つの願いごとをした。

電車がホームに止まる。改札を出ると駅前で背伸びをした。

「寒い」

十二月二十五日、雨は雪に変わるだろう。

「お父さん」後から声がした。

振り向くと娘の留美が傘を持って立っている。妻の淳子も。

留美は傘を開くと私の横に立ち雨を防いでくれた。淳子も傘を差し、私を真ん中に三人並んで駅から歩き出た。留美の手を背中に感じる。願いが叶った。こうやって三人で歩きたかった。留美が私のほうを向き

「お父さん、長い間ごくろうさん。そしてありがとう。ここまで育ててくれて」高校二年生の留美からそんな言葉を言われるとは、目頭が熱くなった。

「あなた、お勤めごくろうさま。これからよろしく」
「淳子、お前までなんだ。照れくさいよ」そう言いながら涙をぬぐった。留美は中学生のころは茂を疎んじていたが、茂が胃がんで入院すると少しずついつもの留美

に戻っていった。幸い転移もなく無事この歳まできた。

「ありがとうは私の方が言うべきだ。二人とも仕事一筋の私をよく支えてくれたね。本当にありがとう」

朝、雪のうつすら積もった公園のベンチに花束を抱えた老人が座っていた。巡査が近くに住む宮地茂であることを確認した。

「家族に連絡を」年嵩の警官が言う。

「家族はいません。奥さんとお嬢さんがおられたのですが一五年前に自動車事故で亡くされています」

「一人暮らしか。それにしても幸せそうな顔をしているな。仏さん」そういうと年嵩の警官は署に連絡を取り始めた。

(プロマネ 志村 田谷 野瀬)

追悼

遠藤俊也さん



平成22年8月13日ご逝去
86歳
平成3年当クラブ入会

文章と釣りの皇帝

中川路 明

一九九一年の遠藤さんに次いで翌年、私はペンクラブに入り、それまでの文章講師石川さんの辞任を受けて、新しい文章教室「何でも書こう会」の設営に運営委員として推進を依頼されました。クラブとしては、単にそれまでの文章の上達よりも、自分の書きたいこ

と、言いたいことを会員に発表するという大綱が決まりましたので、優れた執筆者である遠藤さんのご意見を伺おうと、隣り駅のお宅を訪ねたのが最初の出合いです。

田園都市沿線の緑豊かな住宅地にお住まいでした。五島慶太が掘り返すまでは武蔵野の天然林であり、今も小さな古墳や石窟が数多く点在する史的地帯で、遠藤さんも散策をお楽しみでした。未だに未採掘のままもあると聞いて驚き、私も早速その地を訪ねました。

先日のご葬儀の折、食品企業の東南アジア各店を統括されているご長男に久しぶりにお会いしました。突然のご逝去によるご帰国でした。ご長男の奥様も私のことを覚えていてくださり「父はペンク

ラブの皆様との日々を大変喜んで話しておりました。皆さまにどうぞよろしくお礼をお伝え下さい」と丁寧な言葉を受けました。この場を借りて皆様にお伝えします。

遠藤さんはエチオピア在勤中に同国のハイレ・セラシュ一世と酷似しているため、自分の車が近づくとき皆が国旗を振り歓声を上げました。鏡で見るとなるほど、容貌、特に眼の窪み具合や鼻の格好が皇帝に生き写しだとい自分でも認めざるを得なかったそうです。

花に囲まれた遺影の温顔の優しい目を仰ぎながら、もうお会いできないのかと涙の溢れる眼を閉じました。

あざみ野の図書館でも時々お会いしました。文章をよく勉強され、

特に紀行文での描写は素晴らしいものでした。なかでも『記憶に残る旅』は、石川さんや都甲さんも絶賛されたことを覚えています。

遠藤さんが有斐閣から自費で出された随筆集『旅・人・釣り』でも巻頭に掲載され、本号にもこれを遺稿として転載しております。

特に「：狭い山裾に数十戸の平屋の民家が屋根を寄せ合って…」に私は心を打たれました。私も長い雪国生活で、山間の急斜面に軒を連ねる港の民家の屋根に心惹かれ、「雪崩の流れに沿うような屋根」と表現したことがあります。自分の物理的な描写と、中で心を寄せ合いながら住む人への思いやりに溢れる遠藤さんらしい描写との差に恥じ入ったのです。

過去の『悠遊』でも遠藤さんの社寺巡礼の紀行文を多く読みました。博識だけでなく、仏像の形や色まで想起させる名文でした。普通なら見逃しがちな寺社屋、周囲の蠟梅や萩などの描写にはなお一層の感慨を覚えました。

遠藤さんのもう一つのご趣味は釣りです。特に鮎釣りでは、釣り解禁から落ち鮎まで、北上川から南の四十川まで年中お出かけでした。毎月の例会の帰途、各地のお話に飽かずに耳を傾けました。長良川、錦帯橋の名匠の腕を肴に、盃を傾けた夕餉も喜びでした。

思い返すとときがありません。ペンクラブでは数少ない旧制高校の同時代人でした。物も金も豊かに育った現代人と違って話が合

い、敗戦後の貧しく自らを律した静かな昭和を共感し、顧みました。「釣りに出て、限りなく流れ行く水面を見つめ、八高の寮歌を口ずさむ時、生きていく勇気が湧いてきたんですよ」と励まして下さったことがありました。十年以上親しく誼を下さり、ご指導戴き有難うございました。

酷暑が続いた初秋の例会の帰り、「私も足が悪くて例会にはもう出席できません。君も養生して元気を戻しなさい」と握手を求められ、「いやあ。また図書館でお会いしましょう。お大事に」と、あつさり別れたのです。

そして三月後、あまりにも早い悲しい知らせに筆を落としました。

台掌

遺稿

記憶に残る旅Ⅱ冬景色の佐渡Ⅱ

遠藤 俊也

井上靖の紀行文『大佐渡小佐渡』を読んで、雪の佐渡の美しい描写に強い感銘を受けた。そのことが、私を佐渡へ誘ったのである。

一泊二日の忙しいツアー旅行であったが、初めて見る佐渡はすべてが珍しく印象的だった。

三月に入ったとはいえ、佐渡はまだ冬の名残が強く、金北山きんぽうざんを主峰とする大佐渡の山々は白雪に覆われたままであり、刈り田にはうっすらと淡雪が見られる。しかし、道路に雪はなく、私たち一行を乗せた貸し切りバスは国くに中平野を快く走っていった。

流されてここで亡くなられた順徳上皇の真野御殿まのの、妙宣寺などを回る。日蓮上人ゆかりの妙宣寺の一隅には日野資朝すけともの墓があった。後醍醐天皇の寵臣で佐渡へ流刑となり、その後ここで処刑された。私ひとりがこの墓に気

付いた。夕方の薄日が木陰から漏れて、苔生こけむした墓石を薄赤く染めていた。その夜は、外海そとかい府海岸の平根崎の高台に立つ新設の温泉ホテルに一泊した。ここからは日本海を一望できた。

翌朝起きてみて、薄墨色の空から雪がちらついているのに驚く。雪はだんだんと烈しさを増してきた。

朝食後、ホテルの窓辺から眼下を眺めると、こちら側の断崖と向こう側の断崖との間の狭い山裾に、数十戸の平屋の民家が屋根を寄せ合っている。どの屋根も雪で真っ白だ。人影は全くない。粉雪の無数に舞い落ちるなか、集落全体がひっそりと眠っているかのようなのである。海に接している白い湾曲した線が、波の打ち寄せるごとに揺れ動いている。山側の樹々は幹だけを黒く残しているだけだ。この情景はまさに一幅の水墨画といってよい。

私たちのバスは、相川に向けて山沿いの道をゆっくり下っていく。途中、尖閣湾せんかくの揚島あけしまで止まった。映画「君の名は」のロケ地にもなった観光名所のひとつだ。

ここでは、海拔何十メートルもの断崖絶壁と、海中から屹立する幾つもの大きな浸蝕岩が、海に突き出た松の

梢の間から姿を現している。男性的な絶景である。岩の表面、松の枝葉に薄く積もった雪は、崖や岩に白く砕けて散る荒波と調和して、なんともいえぬ美しさを醸し出している。雪はまだ止みそうにない。カメラを構える手が凍えそうになる。

このあと、バスは海と山とに挟まれたいくつもの小さな集落を右手に見て過ぎてゆく。この辺りを井上靖は次のように描写している。

「屋根に雪を戴いたそうした部落は、どれも車窓から見ると、自然と闊っている険しいものは感じられず、人間の営みが波に洗われ、しゃぶられて、むき出しになっている感じで、ひどくひっそりとしている」

これらの集落の中で達者^{たっしや}というところを過ぎた。妙な名だと思つて、バスガイドに尋ねたところ、「山椒大夫伝説の中で、厨子王がここで何十年ぶりに母親に会えて、お互いに達者だったことを抱き合つて喜んだのです」と言う。こういうところにも、歴史や伝説を大切に扱う佐渡の土地柄が滲み出ているのであろう。

相川から海岸を離れ、佐渡金山（宗太夫坑）を見学し

たあと、再び海岸に出る。七浦海岸^{ななうら}である。このころまでに雪は止み、雲の間から日が照つてきた。明るい空の下、波も穏やかになってきて、今までの荒々しい海岸とは正反対に、ここからは優しい女性的な感じを受ける。名所のひとつ、夫婦岩もここにあった。佐渡おけさの一節に、「波の姑の邪険を避けて忍び寄るかや夫婦岩」と唄われている二つの大岩が、唄の文句そのままに海上で仲良く寄り添っていた。

この後、私たちは一路両津港^{りょうつ}経由で帰路についた。

（平成七年四月）

遠藤俊也氏のエッセイ集「旅・人・釣」より

企業OBペンクラブの本年の歩み

＝平成二十二年(二〇一〇年)＝

(会員への敬称略)

役員人事(二〇一〇年～二〇一一年の二年間を務める

役員が、会則に従って会員投票により選任された。)

会長	西川 武彦	(出版担当)	再選
副会長	平尾 富男	(事務局長)	再選
副会長	大泉 潤	(財務担当)	再選
理事	野瀬 隆平	(運営委員長)	新任
理事	浜田 道雄	(副運営委員長)	新任
理事	田谷 英浩	(広報担当)	新任
理事	清水 勝	(会計担当)	再選
監事	山縣 正靖		再選

二〇一〇年度の年度方針の概要は次の通り

- ①新規プロジェクトの企画
- ②新分野での出版に挑戦
- ③会員数七十名の維持

- ④ホームページを活用した情報発信
- ⑤デジタル・マガジンとの提携確保

一月例会(二十一日)

- ・新入会員＝馬場真寿美
- ・ゲスト講演＝川淵三郎氏(Ｊリーグ名誉会長)
- 『サッカーと私』夢があるから強くなる』
- ・新年会＝①会員参加 三十八名

②招待参加ゲスト＝三十名

二月例会(十五日)

- ・新入会員＝斎藤進、門屋信行
- 退会会員＝木下洋介、小西紀嗣
- ・会員講演＝高橋孝蔵(『ライフワーク』『ストレッチ先生』…第一部「人とのつながりを大切に」、第二部「何を書くか」)
- ・会員講演＝新井良佑(『健康についての雑感』)
- ・『悠遊』第十七号の完成・配布

三月例会（十八日）

前奈良博物館長）

・新入会員Ⅱ浜口須美子

『唐招提寺について』

・ゲスト講演Ⅱ菊池夏樹氏（高松市菊池記念館名誉館長）

・公開ホームページの一新
（リプラス社による新しいデザインで運営開始）

『祖父菊池寛と文藝春秋』

七月例会（十六日）

・産経新聞によるクラブ紹介記事の掲載

・新入会員Ⅱ廣澤重穂、上山裕次、下平紀代子

（三十一日付け）

四月例会（十九日）

・『悠遊』第十七号合評会

『むかしばなし出逢いの旅―受け継ぐもの伝えるもの』

・お花見（『ペン俳句会』の吟行と共同開催）

もの』

五月例会（十九日）

八月例会（夏休み）

・新入会員Ⅱ志村良知、道村美恵子、阿久澤泰子、野上浩三

・会員の計報Ⅱ遠藤俊也（享年八十六歳 合掌！）

・会員講演Ⅱ金京法一（『私の趣味―音楽鑑賞』）

・会員専用ホームページの一新（リプラス社による新デザインで運用開始）

・会員講演Ⅱ大越浩平（『ブルースを聴く、ヤノピを主に』）

・「新入会員へのオリエンテーション」

主に』

・第二回「800字文学館賞」の公募開始

六月例会（十七日）

九月例会（十七日）

・新入会員Ⅱ富岡喜久雄

・「ペンフォト575」の立ち上げⅡプロマネ中村晃

・ゲスト講演Ⅱ鷺塚泰光氏（元東京国立博物館副館長、

也による新しい分科会活動の開始

- ・ゲスト講演Ⅱ平林博氏（日本国際フォーラム副理事長、日印協会理事長、元駐仏大使）

『日本の国家ブランドをどう輝かせるか―フランスからの教訓』

十月例会（二十一日）

- ・退会会員Ⅱ山崎礼子
- ・ゲスト講演Ⅱ福田嘉文氏（生涯学習アドバイザー、元第一証券（株）常務）

『忘れられた幕末の偉人―小栗上野介忠順』

十一月例会（十八日）

- ・会員講演Ⅱ阿部典文（『ある造船技術者の回顧』）
- ・会員講演Ⅱ田原敬（『江上波夫先生に学んだこと―騎馬民族王朝説』）

十二月例会（十六日）

- ・退会会員Ⅱ莊司忠志、亀井弘次、三宅劭、小野寺満憲、道村美恵子、斉藤進
- ・ゲスト講演Ⅱ日米学生会議

（恒例の現役大学生による活動報告と、世代を超えた意見交換と懇親）

・第二回「800字文学館賞」優秀賞の発表

まとめ（総評）

会員総数

二〇一〇年二月の「会員名簿」に掲載された総数は六十八名であったが、多くの新入会員を迎えることが出来た。一方、残念なことに病氣・高齢で退会される会員もあり、年末には六十九名となった。

公開ホームページを六月に、会員専用ホームページも八月に新規に立ち上げ、従来よりも見栄えの良いデザインと使い易さで会員にはおおむね好評であった。一方、過去の作品（財産）が全て掲載されなくなっている点を惜しむ会員の声も多く聞かれる。今後の課題であろう。女性会員の更なる増員と会員の平均年齢の若返りを今後とも努力したい。また、全会員の協力で外部発信への積極的な対応を期待したい。

文責Ⅱ事務局長 平尾 富男

企業OBペンクラブとは（会員以外の読者のために）

企業OBペンクラブは、平成元年に「世の中にも申したい」民間企業のサラリーマンOBが中心になって設立されました。その多くは、海外勤務を経験した人たちでした。その後、クラブの発展とともに、海外経験は出張や旅行だけというOBやOG、さらには官庁や政府機関のOBなど、また「世の中にも申したい」人だけでなく、自分の人生や職業経験から何かを書きたくなった人、俳句や川柳をひねりたい人、世界の動きなどを同年輩の仲間と一緒に議論したい人など、独身女性や主婦を含む多士済々の人々が参加して、活躍しています。

●どんなことをしているか、その一端を以下にご紹介。

①同人誌「悠遊」の発行 一九九四年に第一号を刊行。

それ以降、全員参加を原則に年一回発行を続けています。

②月例会と講演会 会員または外部講師による講演会を催し、会員の知識欲を満たし、相互理解を深めています。

③何でも書こう会 会員の書く一編八〇〇字の短編に對

し、出席者が自由に感想や意見を出し合う、肩の凝らない楽しい会合で文章力の向上を目指しています。

④掌編小説勉強会 二〇〇七年一月に原稿用紙十〜三十枚程度の掌編小説を書くことを目標として発足しました。隔月にメンバーの作品の合評会を開催しています。

⑤ペン俳句会 日本人のDNAに組み込まれている句心を解き放ちます。年に数回の吟行も行っています。

⑥英語を読もう会 英米の一流新聞や雑誌に掲載された最新の政治・経済・文化に関する記事、更には短編小説や社会科学の古典などを購読して楽しんでいます。

⑦サロン21 現代への理解は物書きには必修との認識から、特に国際政治・経済問題を中心に、歴史的・地政学的観点からの分析を自由討論形式で行っています。

⑧ペン川柳会 川柳は小説の筋書き作りには最適です。

二〇〇六年に続いて、二〇〇九年にも『卒サラ川柳・卒サラも遠くなりけり』（青蛙房）を出版しました。

⑨フォト句会 二〇一〇年に登場。写真と句との自由なコラボレーションを楽しみながら新鮮な発想を磨いていきます。飛躍的な発展が期待される遊びです。

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	出 身 会 社
阿久澤 泰子	興和企画
阿部 洋己	キリンビール、キリンビバレッジ
阿部 典文	石川島播磨重工業
新井 良侑	ダイセル化学工業
安藤 晃二	三菱商事
石川 正達	毎日新聞
稲宮 健一	三菱電機
岩崎 洋一郎	三菱レイヨン
上田 信隆	東芝情報システム
上原 利夫	住友商事
鵜飼 直哉	富士通
大泉 潤	三菱化学
大越 浩平	NECインフロンティア (旧・日通工)
大月 和彦	労働省
大西 宏	松下電器
大平 忠	三菱化学
大野 晃	三井物産
大庭 定男	三井物産、野村総研
門屋 信行	監査法人／中央会計事務所
上山 裕次	近畿日本ツーリスト
金京 法一	三菱商事
倉藤 金助	桜井会計事務所
黒崎 昭二	新日鉄
高口 恵子	主婦
児玉 忠雄	三菱銀行
小寺 裕子	会議通訳
牛坊 貞夫	三井物産
清水 勝	明治安田生命 (安田生命)
志村 良知	リコー
下平 紀代子	白泉社
杉浦 右藏	NTT、三菱電線工業
高橋 孝藏	丸紅、松竹
田原 敬	和田製本工業

氏 名		出 身 会 社
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省、日英協会
田谷 英浩	たや てるひろ	神鋼電機
垂水 健一	たるみ けんいち	中日新聞（東京新聞）
寺井 融	てらい とおる	民社党本部、産経新聞
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
中村 爽	なかむら そう	日本工営
中村 将陸	なかむら まさみち	富士通
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米海軍基地
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
新田由紀子	にった ゆきこ	Springer-Verlag Tokyo
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
橋本 政彦	はしもと まさひこ	日商岩井
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学
平尾 富男	ひらお とみお	キャノン
廣澤 重穂	からさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事
古川 幸雄	ふるかわ さちお	安宅産業、石川島播磨重工業
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メデイコ
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
水原亜矢子	みずはら あやこ	東急電鉄
三 春	みはる	住友商事
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行
吉嵩 清巳	よしごき きよみ	関西ペイント
吉田 邦彦	よしだ くにひこ	明治安田生命（安田生命）
渡里 清	わたり きよし	山一証券

「この国のかたち」が心配である。特集テーマ「JAPANN 2025」には、次世代の無事を願う思いが多数寄せられた。しかし、「国づくり」がまさか「大失敗」しないだろうなど首筋がヒヤリとしている。ここまで編集後記を書いたところで、大震災が勃発。日本は今、すべてに優先するのが被災者への支援。「頑張ろう、日本！頑張ろう、東北！」老いも若きも連帯と助けあいのときがきた。（大平）

初校の最中、M9.0の超大型東日本大震災に見舞われた。続いて福島第一原発の原子炉破損。日本は史上まれに見る大災害に見舞われた。十八号では特集テーマに「JAPANN 2025」を選んで、多くの会員から素晴らしい力作を得たが、さすがにこのような事態は予想していない。被災者に心からなるお見舞いを申し上げるとともに、日本がどのように復興していくか、見守ってゆきたい。（浜田）

OBペンクラブの真骨頂ともいえる「世間にも申す」姿勢が発揮され、また一見堅そうな諸氏の意外なる失敗談も親しみと笑いを誘い、硬軟織り交ぜた楽しい号となった。PC校閲機能の活用その他に、役割分担の徹底も校正作業の効率UPに功を奏した。校正の最終バツターと執筆者確認をとる役目を兼任したお陰で、大いに働いているように皆さんが誤解してくれたのはもっつけの幸い（?）。（三春）

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第十八号

二〇一一年四月二〇日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ会長

西川 武彦

印刷所

株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋二一ー一

TEL 〇三十三二二一〇四七九

連絡先

企業OBペンクラブ事務局

平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三ー二（千二二七ー〇〇六四）

Eメール: hira0321@04iiscom.net

クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座

三菱東京UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝

（普通）1086096